(6) 中ノ茎（B・C・D）遺跡

なか の くき

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境 225

1. 自然環境 225

2. 歴史的環境 225

Ⅱ　調査の方法と経過 226

中ノ茎Ｂ遺跡 230

中ノ茎Ｃ遺跡 232

中ノ茎Ｄ遺跡 233

1. 周溝を伴う建物遺構とその出土遺物 233

2. 大溝と出土遺物 236

3. 堆積層出土遺物 238

Ⅳ　ま　と　め 239

調 査 要 項

遺　跡　名：中ノ茎Ｂ・Ｃ・Ｄ遺跡

遺 跡 記 号：中ノ茎Ｂ－ＢＣ（宮城県遺跡地名表登載番号：44018）

中ノ茎Ｃ－ＣＤ

中ノ茎Ｄ－ＣＥ

遺跡所在地：宮城県栗原郡高清水町字中茎

調 査 面 積：約 4,000m^2（発掘面積：約 1,200m^2）

調 査 期 間：昭和 51 年 4 月 12 日～4 月 30 日

調　査　員：宮城県教育庁文化財保護課

早坂春一、高橋守克、一条孝夫・中島　直、手塚　均、清野俊太郎

Ⅰ　遺跡の位置と環境

1. 自然環境

位置と地形環境中ノ茎遺跡は栗原郡高清水町字中茎に所在する。高清水町の中心部から南へ約2km、国道4号線沿いの同町台町から東へ約0.5kmに位置している。中ノ茎遺跡は、小さな沢谷をはさんで南から北へ中ノ茎A遺跡、中ノ茎B遺跡、中ノ茎C遺跡、中ノ茎D遺跡の4地区にわかれて分布している。

宮城県の北西部県境には、奥羽山脈の一端をなす栗駒国定公園がある。それらは栗駒山・荒雄岳を中心とする標高約900～1,400mの火山山地を形成している。この火山山地の麓には大中小の起伏山地が取り巻いている。その麓からは大起伏丘陵・小起伏丘陵が東へ長く延び、その高度を減じながら迫川低地へと没する。この丘陵は築館丘陵とよばれ、北の磐井丘陵と南の玉造丘陵にはさまれて県北最大の延長をもつ丘陵となっている。築館丘陵は主に第3系中新統や鮮新統の地層から成っており、泥岩・砂岩・凝灰岩などの軟岩を主として構成されているが、一様に安定した地盤となっている。特に、高清水町を中心とする標高30～40mの小起伏丘陵は鮮新統の浮石凝灰岩や厚い洪積礫層の分布する地域で、深層地下水が豊富に包蔵されている地帯となっている。また、築館丘陵の南北東縁は栗駒山・荒雄岳に源を発する迫川や江合川、それに伴う無数の小河川および沢谷によって開析され、複雑に入りくんだ微地形が形成されている。

本遺跡の所在する高清水町は、これら築館丘陵群の東南端に位置し、小山田川・透川・善光寺川・その他無数の沢谷によって鋸歯状に入りくんだ4つの小起伏丘陵と前述の河川・沢谷によって形成された沖積底地から成っている。本町内に分布する4つの小起伏丘陵は北から、①善光寺川北岸に接する、築館町の蟹沢から瀬峰町の藤沢地区へ連続する丘陵、②一迫町の南沢地区から樹枝状に東南へ延びて、高清水町の善光寺・東館・大寺へ連続する丘陵、③小山田川南岸に接する高清水町小山田地区・手取・勝負ケ町に連続する丘陵、④古川市の宮沢地区・高清水町台町・中ノ基地区・田尻町四ツ壇原へと違続する丘陵とに分かれている。

中ノ茎遺跡は高清水町に展開する4つの小起伏丘陵群の最も南に位置する丘陵上に立地し、国道4号線沿いの台町から県道田尻－小牛田線沿いにある。さらに遺跡は、中ノ茎集落のある台地の南斜面から丘頂へかけて中ノ茎B遺跡、丘頂から北斜面に中ノ茎C遺跡、そして小さな沢谷をはさんで北側の丘陵の丘頂から北斜面に中ノ茎D遺跡と3地区に分かれて立地している。これら3遺跡の立地する丘陵は標高35～40mで、漸次東方へ傾斜しながら迫川低地へと続いている。地表面の起伏が小さく豊富な深層地下水もあってか、古くから水田化が進められ、台地一帯は現在畑・水田として高度な土地利用化が進んでいる。

（国土地理院発行1/25,000「高清水・築館」を複製）

第1図　周辺の遺跡

下折木地名表

番号	遺跡名	立地	種別	時代	県遺跡番号	20	薬沢東Ⅱ遺跡		散布地	平安	46046
1	小深沢遺跡				46058	21	薬沢東Ⅲ遺跡				46047
2	経壇遺跡	丘陵	経塚	古代？	46008	22	薬沢東Ⅰ遺跡		散布地	平安	46045
3	殿上館跡	丘陵	城塚	中世	46007	23	町田遺跡		散布地	奈良・平安	46044
4	大鰐谷北向遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文（後）	46013	24	経ケ崎遺跡	台地	包含地	縄文・古墳・奈良・平安	44003
5	古館館跡	丘陵	城館	中世	46012	25	上経ケ崎遺跡（満海壇）	台地	五輪塔	平安	44004
6	寺山（極楽寺跡）	丘陵斜面	寺院跡	平安	46015	26	透川遺跡	台地	包含地	平安	44032
7	空堤遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文（前）	46014	27	台町西遺跡	台地	包含地	奈良	44013
8	折木山遺跡	丘陵	寺院跡	鎌倉	44006	28	向野A遺跡	台地	包含地	縄文・平安	44029
9	袖山遺跡	台地	包含地	奈良・平安	44038	29	向野B遺跡	台地	包含地	奈良末・平安	40031
10	五輪C遺跡	台地	包含地	奈良・平安	44034	30	松ノ木沢田遺跡C	台地	包含地	平安	44030
11	五輪B遺跡	台地	包含地	奈良・平安	44033	31	観音沢遺跡	台地	集落跡	縄文	44019
12	五輪A遺跡	台地	包含地	縄文・古墳	44010	32	松ノ木沢田遺跡A	台地	包含地	縄文・平安	44027
13	新庄（新城館）館跡	丘陵	城館	中世	44002	33	松ノ木沢田遺跡B	台地	包含地	縄文	44028
14	下折木遺跡	丘陵端	集落跡	平安	44014	34	萩田遺跡	台地	包含地	縄文(晩)・弥生	44007
15	下佐野遺跡	台地	包含地	奈良・平安	44015	35	仰返り地蔵前遺跡	台地	包含地	奈良・平安	44005
16	堂の池遺跡（満の池）	台地	包含地	古墳・奈良	44016	36	中ノ茎遺跡	台地	集落跡	縄文・奈良・平安・中世	44018
17	大寺遺跡	台地	包含地	縄文(早)・古墳・奈良・平安	44001	37	覚満寺跡	台地	寺院跡	中世・近世	44023
18	東館遺跡	台地	集落跡	奈良	44017	38	外沢田遺跡	台地	包含地	奈良・平安	44008
19	高清水城（御妻城）跡	台地	城館	中世	44024	39	中三代遺跡			奈良・平安	46050

2. 歴史的環境

本遺跡周辺には、多くの遺跡が見られる。高清水町内の遺跡を中心として、その歴史的環境を概観してみたい。

現在のところ町内最古の遺跡は縄文時代早期の大寺遺跡である。昭和29年の調査で沈線文・貝殻腹縁文の施された尖底土器が発見され、これらの土器群は遺跡名をとって大寺式と呼ばれている。その他、縄文時代の遺跡としては前期の笹森遺跡・甚六原遺跡、前・中期の大窪遺跡、晩期の花鳥遼跡などがある。

弥生時代の遺跡としては、中期の萩田遺跡などがある。萩田遺跡からはこの時代の特徴的な蛤万石斧が出土している。また、下蝦沢遺跡や大寺遺跡からは後期の遺物が採集されている。

古墳時代になると、縄文時代・弥生時代に比して遺跡数は増加する。東館遺跡では前期の方形周溝墓が発見されている。方形周溝墓は古墳との関連で注目されているものである。古墳としては、北山囲古墳群・新田古墳群・小野横穴古墳群などの後期群集墳がある。この時代の集落跡については東館遺跡・観音沢遺跡などが調査されている。東館遺跡は中期、観音沢遺跡は後期の集落跡と考えられている。

奈良・平安時代は前時代に比してさらに遺跡数が増加する。下折木遺跡・手取遺跡・西手取遺跡・藤屋敷遺跡・下田遺跡などが調査されている。これらの遺跡からは竪穴住居跡をはじめとする遺構が検出されており、集落跡と考えられている。また、須恵器を生産した遺跡として外沢窯跡・城内窯跡などが発見されている。

中・近世の代表的な遺跡に高清水城跡・新庄館跡などの城館跡がある。また、城館跡以外の遺跡としては観音沢遺跡がある。掘立柱建物跡・土倉・井戸などの遺構や青磁・陶器・木製品などの遺物が発見されている。また、宮ノ脇遺跡では塚5基が発掘され、墓ではないかと考えられている（宮城県教委：1977）。

Ⅱ　調査の方法と経過

中ノ茎遺跡は立地する微地形によって、遺跡全体が4つの地区にわかれて立地している。それぞれ便宜的に商から中ノ茎A・B・C・D遺跡と独立した遺跡名が与えられている。今回の調査は昭和48年度に発掘調査した中ノ茎A遺跡を除く3遺跡を対象とした。

調査区は、新幹線路線敷の中心杭2本を使用して設定した3m方眼のグリッドである。グリッド名は東西をアルファベット、南北を数字で表示している。各遺跡で使用した中心杭の番号は次のとおりである。

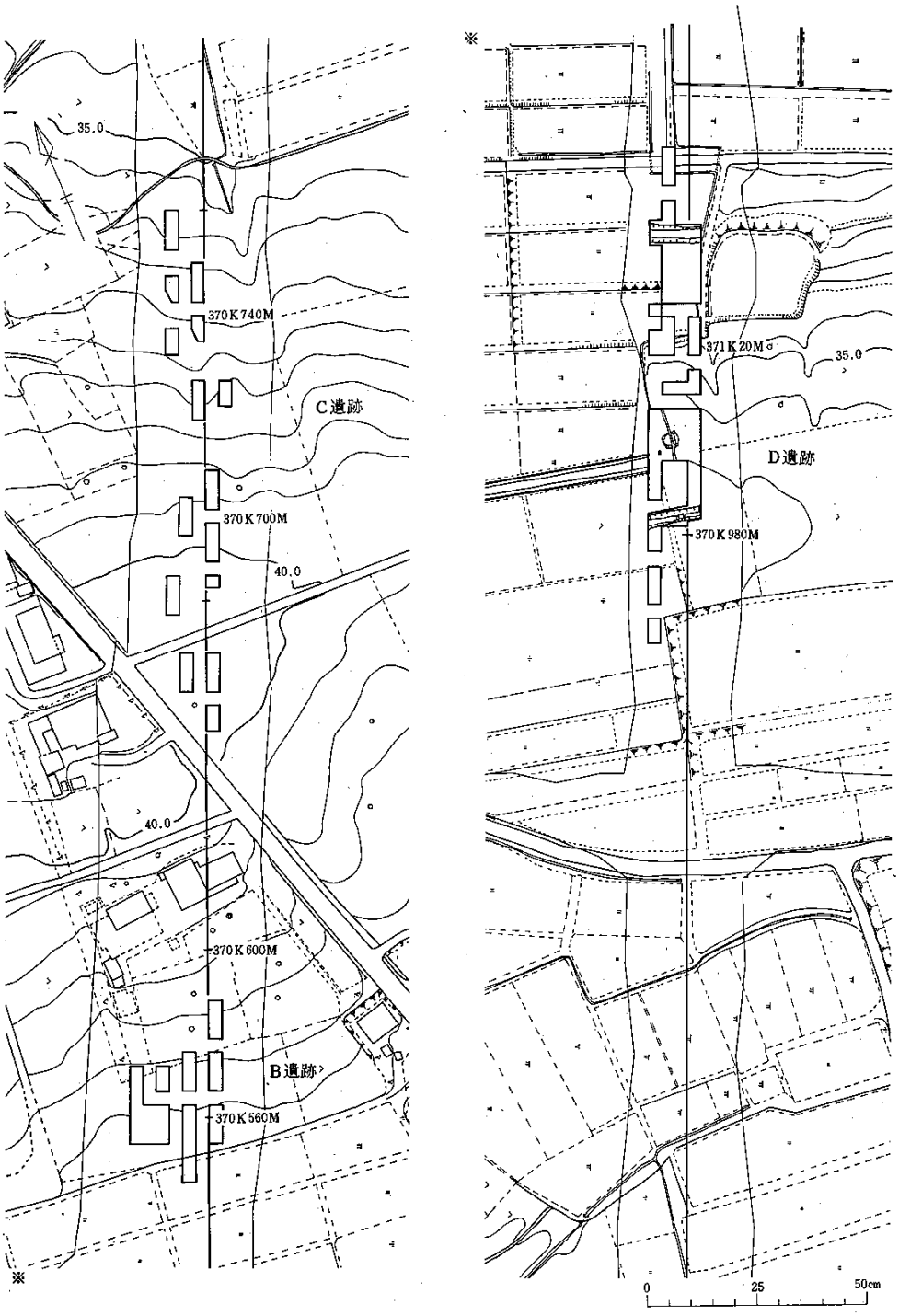
中ノ茎B遺跡－370K600M、370K560M

中ノ茎C遺跡－370K700M、370K740M

中ノ茎D遺跡－370K980M、371K20M

発掘調査はまず中ノ茎B遺跡を昭和51年4月12日に開始した。B遺跡は耕作土下即地山となっていて遺構は全く発見できなかった。遺物は堆積土から縄文土器片、土師器片数点を数えるだけで、発掘面積388m^{2}を調査し、4月14日で終了した。引続きC遺跡の発掘調査を4月16日まで行った。本遺跡は育苗圃として利用され、地山深くまで耕作が及んでいたこともあって、もはや遺構の発見は期待できなかった遺跡である。必要な図面の作成にとどめ、発掘面積約338m^{2}をもって終了した。D遺跡の発掘調査は4月17日から開始された。粗掘作業は4月20日をもって一応終了し、その間に台地南縁と北縁から大溝遺構の発見、台地中央平坦面から方形に巡る浅い溝状遺構とその4隅に柱穴を伴うなんらかの建物遺構の確認、また、この遺構を南北に切る浅い溝の発見があった。これらの遺構の発見に伴い関連する遺構の存在を確認するため、周辺のグリッドを拡張しながら検討した。4月21日から各遺構の精査、実測図作成などを行ない、4月30日をもって調査は終了した。発掘面積は570m^{2}である。

このように、中ノ茎遺跡の発掘面積は、A遺跡を除いて調査対象面積は約4,000m^{2}あったのに対し、発掘面積は1,196m^{2}となった。



第２図　中ノ茎遺跡遺構配置図

Ⅲ 調 査 の 成 果

本遺跡は中ノ茎集落を中心として、前述のとおり3地区に分立している。ここでは南から地区ごとに、その発掘調査の内容と結果について記述する。

中ノ茎B遺跡

B遺跡は南側小起伏丘陵の南斜面から丘頂にかけて立地している。基本的な層序は2層から構成されている（第3図）。第Ⅰ層は表土（耕作土）である。第Ⅲ層は地山への漸移層で、地山の細粒ブロックを混入している。地山は明褐色（7.5YR$^{5}/_{8}$）砂質シルトである。いたるところ地山まで撹乱をうけており、遺構はまったく検出されなかった。

遺物は第Ⅰ層から縄文土器片・須恵器・中世陶器細片・剥片石器などが出土している。第Ⅲ層からは、縄文土器の破片が出土しているにすぎない。これらの遺物の大半は摩耗が著しく、図上復原は不可能なものばかりである。

出土遺物（第3図）

本遺跡からは遺構の発見はなかった。遺物は堆積層から縄文土器・須恵器・中世陶器・施釉陶器の破片などが出土している。

〔縄文土器〕 13点出土している。1～3は体部破片で斜行縄文（1・3がＬＲ、2がＲＬ）が施されている。4は鉢形土器とおもわれる口縁部破片で、肥厚させた口唇部には縦位のきざみがつき、その下には太い平行沈線文が施されている。口縁部上端と裏面にも一条の沈線がみられる。
また、5は4と同一の個体と思われる被片で、平行沈線がみられる。

6は深鉢形土器の口縁部破片で、口縁には突起がみられる。外面には、突痘部を中心に沈線による円文・半円文や弧状文が描かれている。区画内にはＬＲの縄文が施され、沈線に沿って刺突がめぐっている。7と6は同一個体と思われる体部の破片で、外面全体に6同様の文様構成がみられる。

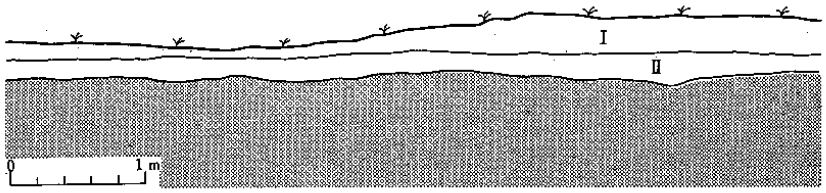
これらの所属時期は、1～3は限定できず、4・5は晩期末葉、6・7は器形や外面全体の文様構成などの特徴から縄文時代後期・宝ケ峯式に属するものと考えられる。

以上の他に、細片が6点ある。いずれも内外面ともに摩滅が著しく、詳細は不明である。

〔須恵器〕 体部の小破片が1点で図示できない。外面には平行タタキ目痕がかすかに観察でき、内面にはナデが施されている。

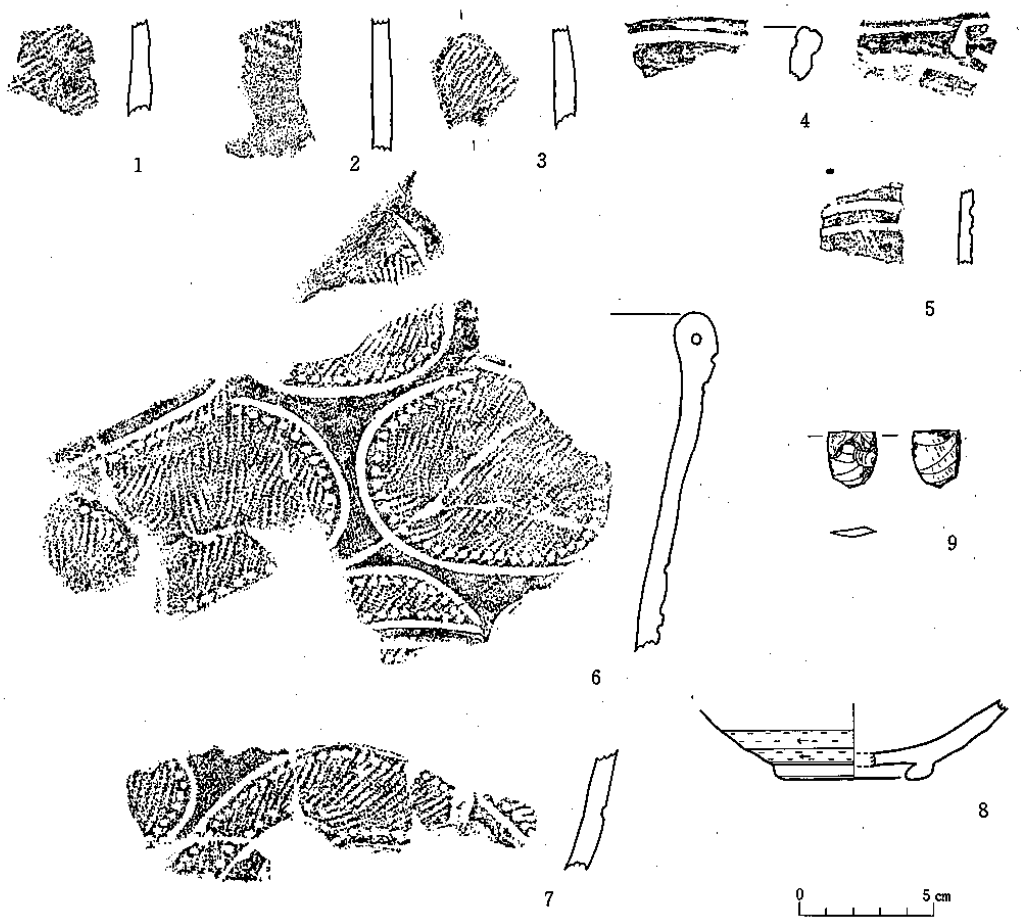
〔中世陶器〕 3点出土している。細片のため器形は不明である。色調はいずれも赤褐色・黄橙・灰褐色系を示すが、胎土は緻密で器厚が厚く、かたく焼き上っている。

〔施釉陶器〕 1点出土している（8）。高台付坏の底部から体部までの破片である。高台部は付高台である。底部周辺から体部外面には回転のヘラケズリが施されている。釉は灰緑色を呈



中ノ茎B遺跡，基本層位

層位	土色		摘要
Ⅰ	黒褐色	7.5YR3/2	シルト腐植物を多量に含む。
Ⅱ	極暗褐色	7.5YR3/3	砂質シルト、地山状部位を混入。



第３図　中ノ茎Ｂ遺跡基本層位と出土遺物

している。年代は不明である。

〔石器〕不定形石器が1点出土している（9）。上半が欠けている。右側縁の一部に調整剥離が加えられている。

中ノ茎C遺跡

Ｂ遺跡の立地する丘陵の北斜面に立地している。本調査区の基本的な層序はⅣ層から構成されている。第Ⅰ層は表土である。第Ⅱ層は極暗褐色微砂質シルト層であるが、明褐色（7.5ＹＲ$^{5}/_{6}$）砂質シルトの地山粒を若干含む層である。第Ⅲ層は黒色（7.5ＹＲ$^{2}/_{1}$）シルト層で浅黄橙色（7.5ＹＲ$^{8}/_{3}$）の地山粒を含んでいる。第Ⅳ層は黒褐色（7.5ＹＲ$^{2}/_{2}$）シルト層である。以下は地山の明褐色（7.5ＹＲ$^{5}/_{6}$）細砂質のしまったシルト層となっている。

各層とも地山粒を多量に含んでおり、育苗圃の耕作土として、常に地山深くまで撹乱を受けていることを裏付けている。遺構は検出されなかった。

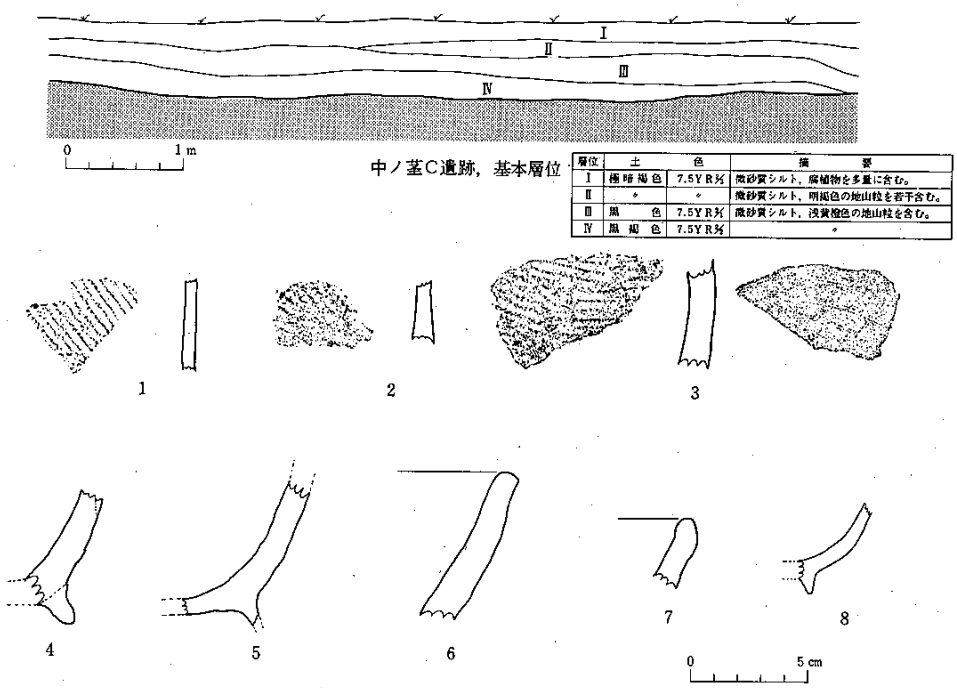
遺物は第Ⅰ層から縄文土器・土師器・須恵器など、第Ⅱ層から縄文土器・土師器・中世陶器など、第Ⅲ層から土師器・須恵器・中世陶器などが出土している。いずれも細片である。

出土遺物（第4図）

〔縄文土器〕　2点出土している（1・2）。体部破片で斜行縄文が施されている。

〔土師器〕　4点ある。このうち体部破片が2点で、内外面とも黒色処理されているものと、外面は摩滅のため不明、内面は軽いナデがみられるものである。底部破片は2点ある。いずれも摩滅が著しく調整は不明である。

〔須恵器〕　いずれも破片で9点出土している。このうち甕の体部破片が6点あり、外面に平



層位	土	色	摘　要
Ⅰ	極暗褐色	7.5YR5/4	微砂質シルト，腐植物を多量に含む。
Ⅱ	〃	〃	微砂質シルト，明褐色の地山粒を若干含む。
Ⅲ	黒　色	7.5YR2/1	微砂質シルト，浅黄橙色の地山粒を含む。
Ⅳ	黒褐色	7.5YR2/2	〃

第４図　中ノ茎Ｃ遺跡の基本層位と出土遺物

行タタキ目、内面に青海波文・ヘラナデなどみられる（3）。また付高台のある体部下端から底部にかける破片が2点ある。4は体部下端から高台部を残しているものである。台部は付高台でづんぐりと外方へ踏ん張って、その端部は丸くおさまる。内面には自然釉がみられる。5も体部下端付近から高台部を残している破片で、体部下端付近の外面は回転ヘラケズリによる調整がみられ、内面はうすい自然釉がかかっている。台部は付高台で接合部周縁はナデ調整を施している。台部底面にはうすい自然釉がかかっている。以上の他に壺形土器の肩部とおもわれる破片が1点あり、内外面ともロクロ調整されている。

〔中世陶器〕　11点ある。そのうち2点（6・7）擂播鉢の口縁部破片とおもわれるものである。他は器形の推定が不可能な破片である。

〔磁器〕　1点出土している（8）高台付埦と考えられるものである。外面の底部と台部の境には2条の手書きの線がめぐる。また、底部からし5cm上方にも1条の手書き線をめぐらし、体部の絵柄は不明だが、観察できる部分をみると「ススキ」をおもわせる鮮細な線と「雲」をおもわせるような不定のぼかし状の手書きの絵柄が描かれている。釉はにぶい乳白色で貫入が認められる。

中ノ茎D遺跡

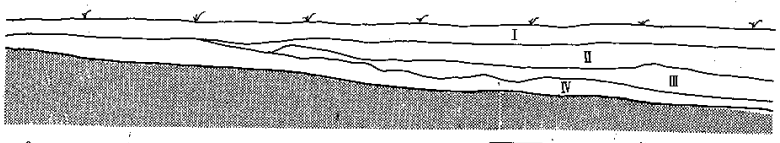
B・C遺跡が立地する台地の北斜面から、小さな沢谷をはさんで北側には、高清水町台町から覚満寺へ延びる小起伏丘陵がある。本調査区は、この台地の頂部から北斜面に展開する畑地や水田に位置している。

本遺跡調査内の基本的な層序は4層から構成されている。第Ⅰ層～Ⅲ層までは地山崩壊土の封土となっており、2次堆積土で第Ⅳ層が旧表土である。

遺物は第Ⅰ層から須恵器・中世陶器、第Ⅱ層からは縄文土器1須恵器・石器、第Ⅲ層からは須恵器・丸瓦片・砥石などが出土している。

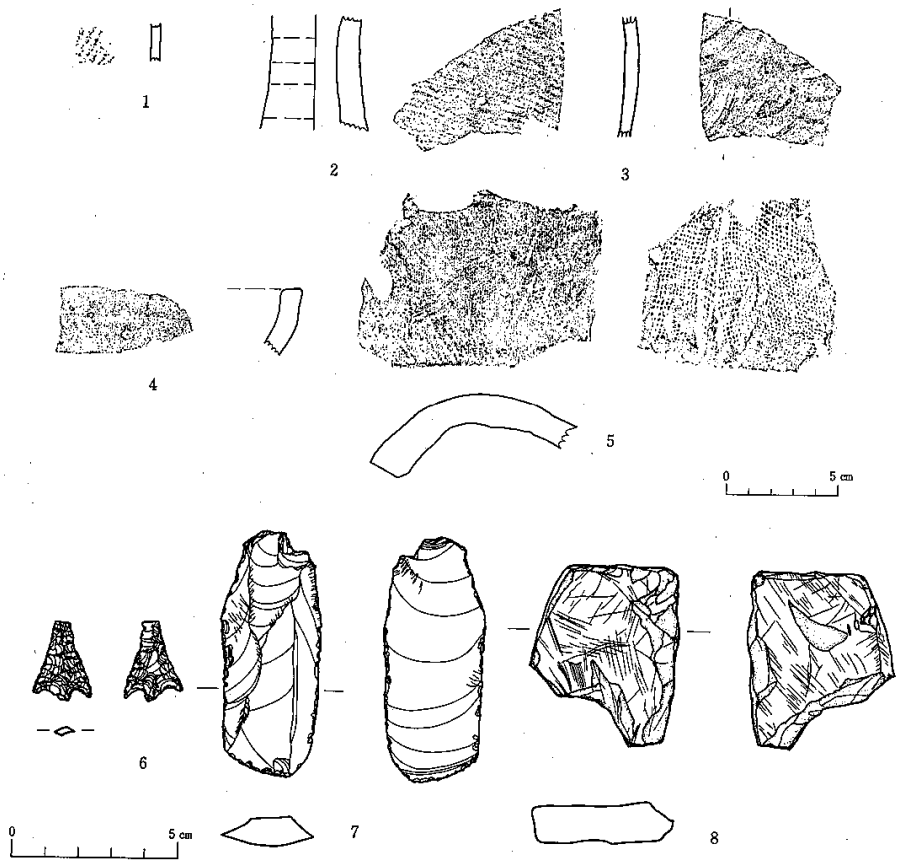
1. 周溝を伴う建物遺構とその出土遺物

台地の頂部、調査区のほぼ中央部の地山面で確認された。ほぼ南北に延びる後世の溝によって切られている。周溝の平面形は約3.5×3.5mの隅丸方形である。周溝の四隅にはピットが検出され、そのうち東辺に位置する南北両隅のピットから柱痕跡が確認された。ピットの形態・規模・掘り方埋土に共通点が認められること、その配置においても規則性が認められることなどから、この4個のピットは建物に伴う柱穴の可能性がある。また、周溝の内側は削平をうけているが、四隅の柱穴を結ぶように構築されていることから、周溝・4個のピットは、これが一体となった上部構造をもつ、何らかの掘立柱建物跡と推定される。周溝・ピット内から土師器・須恵器が出土している。



中ノ茎D遺跡，基本層位

層位	土色		摘要
Ⅰ	褐色	7.5YR3/4	砂質シルト，腐植物を若干含む。
Ⅱ	黄橙色	7.5YR3/1	砂質シルト。
Ⅲ	明褐色	7.5YR3/4	砂質シルト。
Ⅳ	黒色	7.5YR3/1	砂質シルト，腐植物を多量に含む。

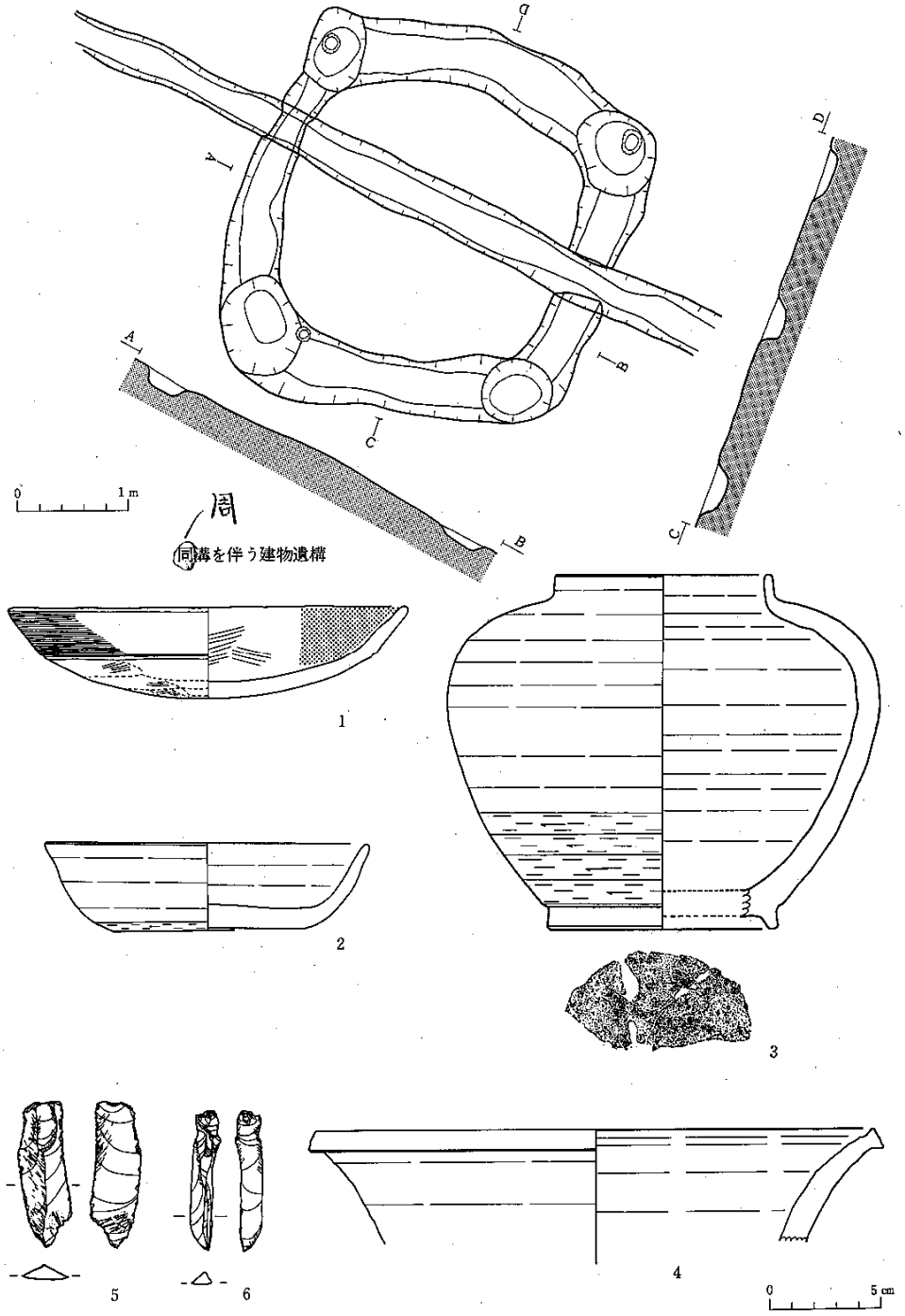


第５図　中ノ茎Ｄ遺跡の基本層位と出土遺物

出土遺物（第6図）

周溝・ピット内埋土から土師器・須恵器が出土している。これらの遺物は殆んどが破片で図上復原できたのは土師器坏1点・須恵器坏1点・短頸蓋1点、甕口縁部破片1点だけである。

〔土師器〕　1は外面中央に軽い段を有し、内面に軽い稜をもつ丸底の坏である。外面の調整



第６図　中ノ茎Ｄ遺跡，遺構と出土遺物 (1)

は段から口縁部は横ナデ、段から底部は手持ちのヘラグズリ調整が施されている。内面の調整はヘラミガキ・黒色処理されている。ヘラミガキの方向は口縁部付近・底部ともに不定の斜向になっている。この類の坏は土師器の編年における栗囲式に属するものと考えられる。

〔須恵器〕 2は底部から口縁部へ直線的に外傾する坏である。外面は、底部から体部下端部にかけて回転ヘラケズリの調整が施され、他はロクロ調整、内面もロクロにより調整されている。3は短頸壺のほぼ$^{1}/_{2}$の破片である。口縁部は短く垂直に立ち肩部が強く外張し漸次体部・底部へつぼみ高台部は厚く、やや外方へ踏んばり、その先端はほぼ平坦である。外面は体部下半から底部が回転ヘラケズリ、体部上半から口縁部はロクロ調整、内面はすべてロクロ調整である。台部は付高台で接合部周縁はナデ調整が施されている。4は甕の口縁部破片で、口縁端部が上方・下方にわずかにつまみ出されている。内外面ともロクロ調整が施されている。

〔剥片〕 円形周溝内の堆積土から出土した縦長の剥片が2点ある（5・6）。

2. 大溝と出土遺物

高清水町台町から田尻町四ツ壇原へ延びる台地を横断する路線敷内の南縁と北縁沿いに大溝遺構が検出された。

〔台地南縁の大溝遺構〕 水溝は幅約3.2m、深さ1.0～1.2m、底面幅0.9～1.2mの規模のものである。溝の底面近くには幅約40㎝、高さ約40㎝の堰状の遺構も付設されている。溝の断面形はほぼ「逆台形」になっているが、底面は平坦ではなく弯曲している。なお、この溝は路線外の東西に、さらに延びている。構内の堆積土は6層からなっている。

遺物は第1～2層・第4層から出土している。それらは縄文土器細片1点・須恵器細片2点・中世陶器細片5点・平瓦細片2点である。

出土遺物（第7図）

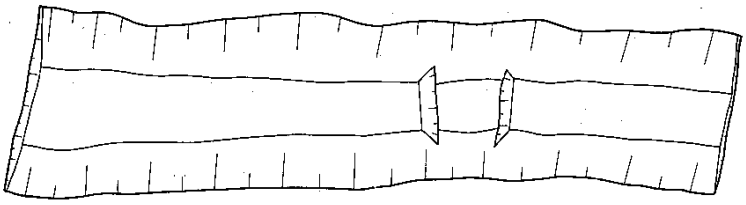
〔縄文土器〕 1は第1層から出土した体部破片である。斜行縄文（ＬＲ）が施されている。

〔須恵器〕 2・3は第1層出土の甕の体部被片である。外面の調整は平行タタキ目、内面はナデ調整である。3の外面には自然釉がかかっている。

〔中世陶器〕 第1層と第4層から出土している。4は端部を欠くが甕の口縁部片とおもわれる。色調は赤褐色を呈し、厚い。

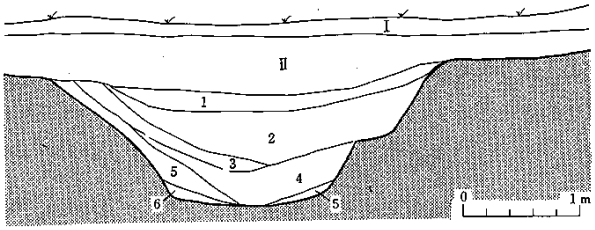
〔平瓦〕第4層出土のもので2点ある。1点は表裏両面とも摩耗して調整は不明である。5は格子文をもつものである。

〔台地北縁の大溝遺構〕 この溝は南縁にある溝と平行して台地北縁を東西に延びる溝である。その規模は幅3.8m、深さ約1.2m、広幅約2.1mで平坦である。堆積土は7層に分かれる。遺物はまったく包含されていない。

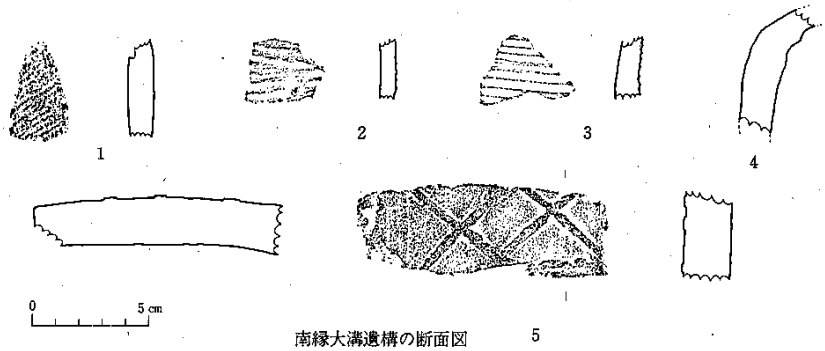


中ノ茎D遺跡，台地南縁の大溝遺構

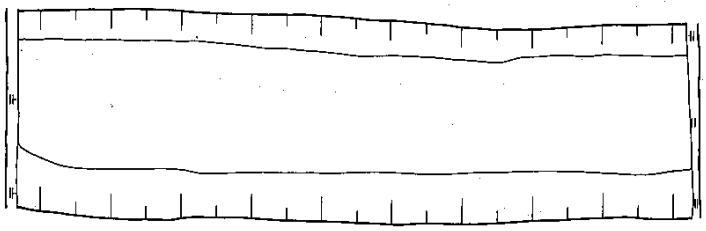
0　2 m



層位	土色		摘要
I	明褐色土	7.5YR3/4	黄褐色の地山粒を含む。
II	褐色土	7.5YR3/3	砂質シルトでかたくしまっている。
1	褐色土	7.5YR3/3	砂質シルト，黄色土粒を斑点状に含む。
2	褐色土	7.5YR3/3	砂質シルト，かたくしまっている。
3	黄褐色土	7.5YR3/4	砂質シルトでしまっている。
4	暗褐色土	7.5YR3/4	砂質シルト粘性，黄色土粒を含む。
5	黒褐色土	7.5YR3/2	砂質シルト腐植物を含む
6	黄褐色土	7.5YR3/4	粘質シルト

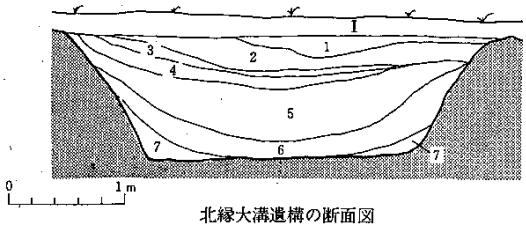


南縁大溝遺構の断面図



中ノ茎D遺跡，台地北縁の大溝遺構

0　2 m



層位	土色		摘要
I	褐色土	7.5YR3/4	砂質シルト，若干の腐植物を含む。
1	褐色土	7.5YR3/4	砂質シルト，しまっている。
2	黒褐色土	7.5YR3/2	砂質シルト，粘質，地山粒を斑点状に含む。
3	褐色土	7.5YR3/4	粘質シルト，しまっている。
4	暗褐色土	7.5YR3/4	砂質シルト，しまっている。
5	黄褐色土	7.5YR3/4	砂質シルト，褐色地山粒を多量に含む。
6	黒褐色土	7.5YR3/2	砂質シルト，腐植物を多く含む。
7	黄褐色土	7.5YR3/4	粘質シルトで硬質土。

北縁大溝遺構の断面図

第７図　中ノ茎D遺跡，遺構と出土遺物 (2)

3. 堆積層出土遺物（第5図）

〔縄文土器〕　1は部位不明の細片である。外面に原体ＬＲの縄文が施されている。

〔土師器〕　坏の底部片、体部片合わせて4点出土している。外面は底部破片には手持ちのヘラケズリ、体部破片にはヘラミガキが施され、内面はいずれもヘラミガキ・黒色処理されている。

〔須恵器〕細片が18点出土している。部位的にわかるものは坏の口縁部片1点・甕の口縁部片1点・長頭壺の頸部片1点、そして壺の底部片とおもわれるもの1点で、他はすべて甕の体部片である。壺の底部片は、外面が回転ヘラケズリされている。甕の口縁部片は内外面ともロクロ調整が施されている。長頭壺の頸部片（2）は、内外面ともロクロ調整で、内外面に自然釉がかかっている。また、甕の体部細片のなかには外面に平行タタキ目、内面に青海波オサエ目の痕跡が認められるもの（3）やナデによる調整を施しているものなどがある。

〔中世陶器〕　器形・部位不明の細片が18点出土している。いずれも厚く、赤褐色で焼成はあまりよくない。5は器形不明だが口縁部の被片である。

〔瓦〕　丸瓦の先端部の破片で、外面には縄タタキ目の後にナデ調整を加えている。内面には布目痕が認められる（4）。

〔石器〕　6は有茎の石鏃で、先頭部と茎部先端を折損している。茎部両側は深くえぐりこまれている。石材はチャート質である。7は縦長剥片である。石材は硬質頁岩である。8は短冊形の砥石である。使用面は2面で擦痕がみられる。石材は砂質泥岩である。

Ⅳ　ま　と　め

中ノ茎B・C遺跡は、過般（昭和48年）調査を実施した中ノ茎A遺跡の延長上にあって、もともと地形的に同一のまとまりをもった遺跡と考えられる。本来集落を営むための立地条件も良好なところである。また、本遺跡及び周辺の分布調査時にも多くの遺物が表面採集された遺跡でもあった。しかし、発掘調査の結果は中ノ茎A遺跡と同様、開田や育苗圃等によって地山までも撹乱をうけ、表採遺物に関連した遺構はまったく発見されず、出土遺物も極少量にすぎなかった。発掘調査を実施したB・C遺跡の面積はごく部分的であるが、縄文･古代･中世等の各時代の遺物が出土していることを考えると付近に展開する丘陵上には、これらに関連する遺構群の存在が容易に推察される。

中ノ茎D遺跡は、A･B･Cの各遺跡とは小沢谷をはさんで北側枝状丘陵上に位置し区別される。すでに開田化が進み、かなりの撹乱をうけ丘項平坦部は地山が露出している状況であった。しかし、調査の結果、隅丸方形状に周溝がめぐり、四隅にピットを伴う建物跡と丘陵北縁南縁に大溝遺構の検出を得た。建物跡は周溝・ピット内から出土した遺物からみて古代に属するものと考えられるが詳細は不明である。また、北縁･南縁にめぐる大溝遺構は、未調査の部分が多く、また規模や機能は不明であるが、出土した遺物から推して中世以降に構築されたものと考えられる。

引用・参考文献

氏家　和典　　(1957)：『東北土師器の型式分類とその編年』歷史第14輯

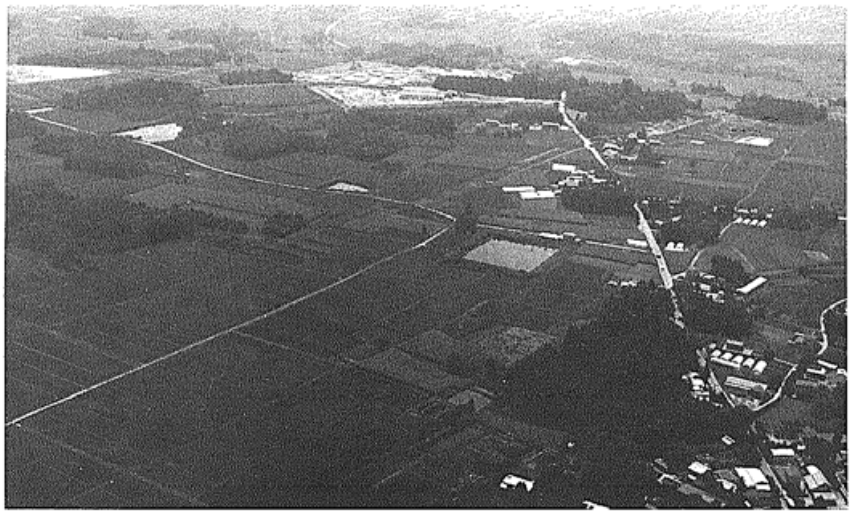
〃　　(1972)：『東北新幹線関係分布調査報告書－中ノ茎A・B・C・D遺跡』「宮城県文化財調査報告書第87集」

宮城県教育委員会（1974）：『東北新幹線関係遺跡調査報告Ⅰ－中ノ茎A遺跡』「宮城県文化財調査報告書第35集」

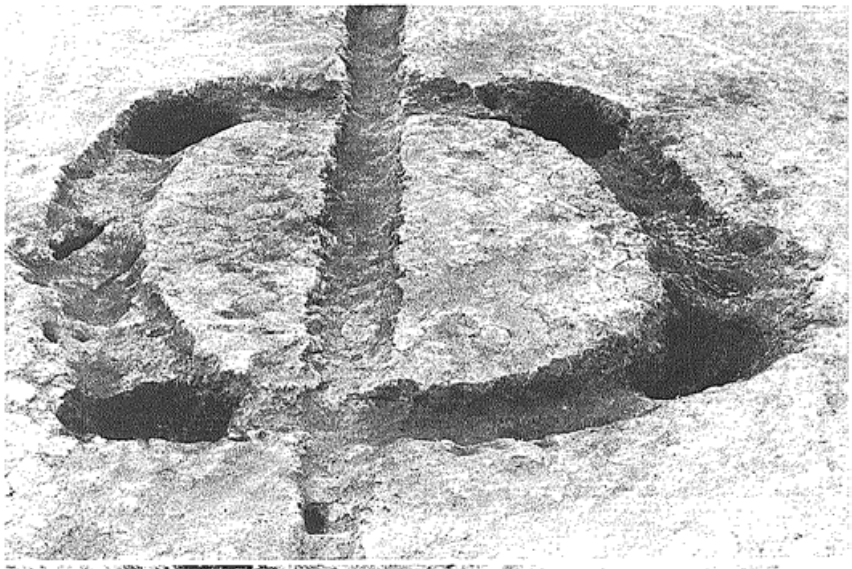
〃　　(1976)：『宮城県文化財発掘調査略報』「宮城県文化財調査報告書第48集」

図　　版

中ノ茎遺跡遠景
（北方上空から）

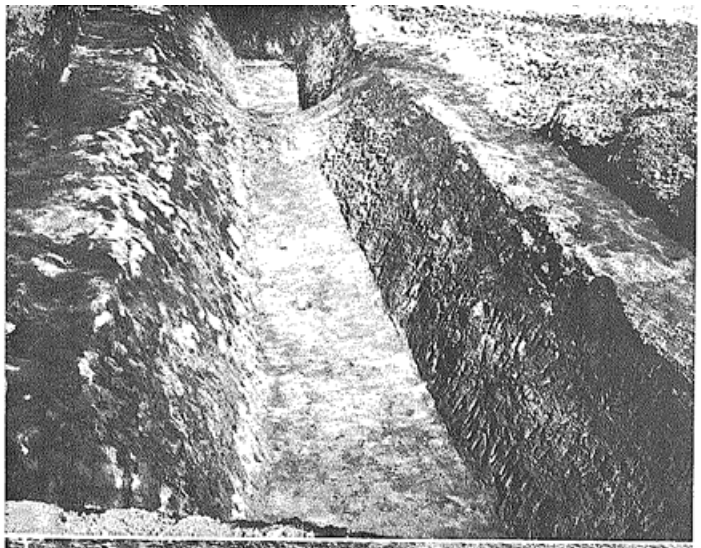


方形周溝状遺構



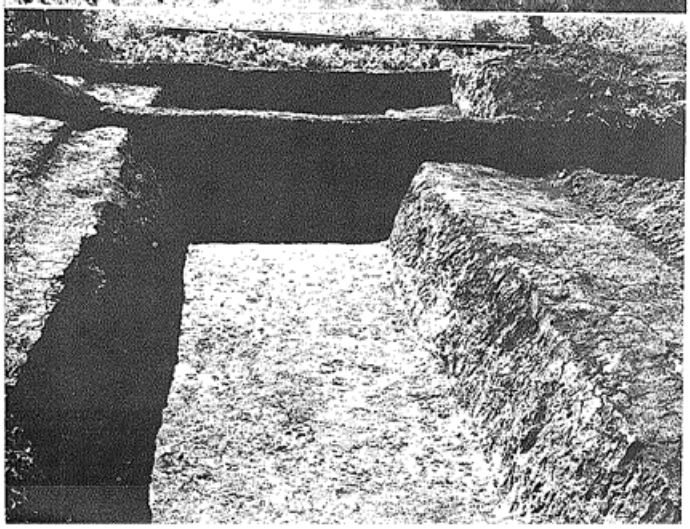
方形周溝状遺構
遺物出土状況

図版 1



台地南縁の大溝

同　上



台地北縁の大溝

図版２

(7) 東（ひがし）館（だて）　遺　跡

目　　次

Ⅱ　調査の方法と経過 245
1. 調査の方法 245
2. 調査の経過 246
Ⅲ　発見された遺構と遺物 246
1. 遺物包含層 246
2. 方形周溝墓 261
3. 竪穴住居跡 267
4. ピット群 270
5. 堀 272
6. 貯水施設 275
7. 溝 277
8. 東舘地区表土および層位不明の遺物 277
9. 筒ノ池地区表土出土の遺物 280
Ⅳ　考　察 282
1. 出土土器の分類 282
2. 出土土器の組み合わせとその年代 287
3. 出土土器の問題点 290
4. 遺物包含層と遺構の年代 291
5. 貯水施設 292
Ⅴ　ま　と　め 292

調 査 要 項

遺　跡　名：東館遺跡

遺 跡 記 号：ＣＧ（宮城県遺跡地名表登載番号：44017）

遺跡所在地：宮城県栗原郡高清水町東館

調 査 面 積：約3,800m^2（発掘面積2，440m^2）

調 査 期 間：昭和51年5月6日～7月21日

調　査　員：宮城県教育庁文化財保護課

早坂春一、加藤道男、高橋守克、一条孝夫、中島　直

Ⅰ　遺跡の位置と立地

東館遺跡は宮城県栗原郡高清水町東館に所在し、高清水町役場の東方約700mの地点にあたる。

高清水町の中央部には、陸前丘陵の1つである築館丘陵から枝分かれした標高60mほどの小丘陵が北西から南東へしだいに高さを減じてのびており、同丘陵の北側を善光寺川、南側を小山田川が流れて狭い沖積地を形成している。東館遺跡はこの丘陵上の南東端に立地している。
遺跡の中央部には東側から沢が入り込み、丘陵部を南北に二分している。地表面で採集される遺物の分布や地形からみて遺跡の範囲は約15,000m^{2}に及ぶ。

新幹線の路線は遺跡の中央を南北に縦断している。

調査範囲内の北半（筒ノ池地区）は丘陵尾根上の平坦部と南斜面とから成り、標高は平坦部で約20m、現状は水田である。南半（東館地区）は丘陵尾根上の平坦部と北斜面、南東斜面から成り標高は平坦部で約21m、現状は畑地である。両丘陵間の沢（湿地）は標高約16m、現状は水田である。（遺跡の位置と立地については「中ノ茎遺跡」の第Ⅰ章参照）

Ⅱ　調査の方法と経過

1. 調査の方法

調査区の設定―調査範囲は東方に平行してのびる2つの丘陵上と、その間の湿地にまたがっている。したがって丘陵上の2ケ所の地点を区別するため南側丘陵上を第1地区（東館地区）北側丘陵上を第2地区（筒ノ池地区）とした。湿地は特に地区名を付していない。

丘陵上は路線がほぼ丘陵ののびる方向と直交しているところから路経敷の中心杭2本をそのまま基準として軸線を設定し3m単位のグリッドを組んでいるが、第1地点と第2地点では別の中心杭を基準にしているため。グリッドの方向がわずかに異っている。グリットも名地区ごとに付しているが、東西方向をアルファベット、南北方向を数字で表現している点は共通している。

湿地にはグリッドを組まず、任意のトレンチを設定しており、その位置は近くにある路線敷の中心杭2本から計測している。

実測図－平面図は方形周溝墓・竪穴住居跡を遣り方測量によって縮尺$^1/_{20}$で、ピット群の一部と貯水施設、堀状遺構を平板測量によって$^1/_{40}$で作成し、遺物包含層の範囲はグリッド杭を使用して$^1/_{100}$の略図に記入した。

断面図はすべて$^1/_{20}$である。

2. 調査の経過

調査は昭和51年5月6目に開始した。最初に第2地区（筒ノ池地区）にグリッドを設定し、グリッドを3個つないだ3×12mのトレンチによって表土除去を行なった。その結果この地区は表土下が地山であり、表土から土師器が数点出土しただけで、遺構は検出されなかった。発掘面積は約340m^{2}である。5月8日には埋め戻しを行なって第2地区の調査は終了した。

次に第1地区（東館地区）の調査にうつり、グリッド設定ののち3×12cmのトレンチによって北側から表土除去を始めた。尾根上の平坦部と北斜面では表土下が地山であり、平坦部で方形周溝墓･竪穴住居跡、ピット、溝などを、北側斜面では堀状遺構を確認した。つづいて平坦部についてはほぼ全域を拡張して遺構の精査を開始し、同時に南東斜面の遺構確認作業を行ない、表土下で遺物包含層、貯水施設を確認した。さらに、第1・2地区の間の湿地と、第1地区南側の湿地をトレンチで調査したところ、前者で2本、後者で1本の堀状遺構が検出された。なお、北側斜面、湿地については拡張は行なわなかった。

6月中頃には平坦部の精査が終了して実測図の作製をはじめ、さらに南半の精査、実測と全体の最終的な写真撮影を行なって7月21日に調査を終了した。第1地区の発掘面積は湿地のトレンチを含めると約2,100m^{2}であり、第2地区を合わせた合計は約2,440m^{2}となる。

また、調査が終了に近づいた月　日には現地説明会を開催して調査の成果を一般に公開している。

Ⅲ　発見された遺構と遺物

1. 遺物包含層

第1地区南半の東を向く斜面で3ケ所の遺物包含層が確認された。南側から順に記述する。

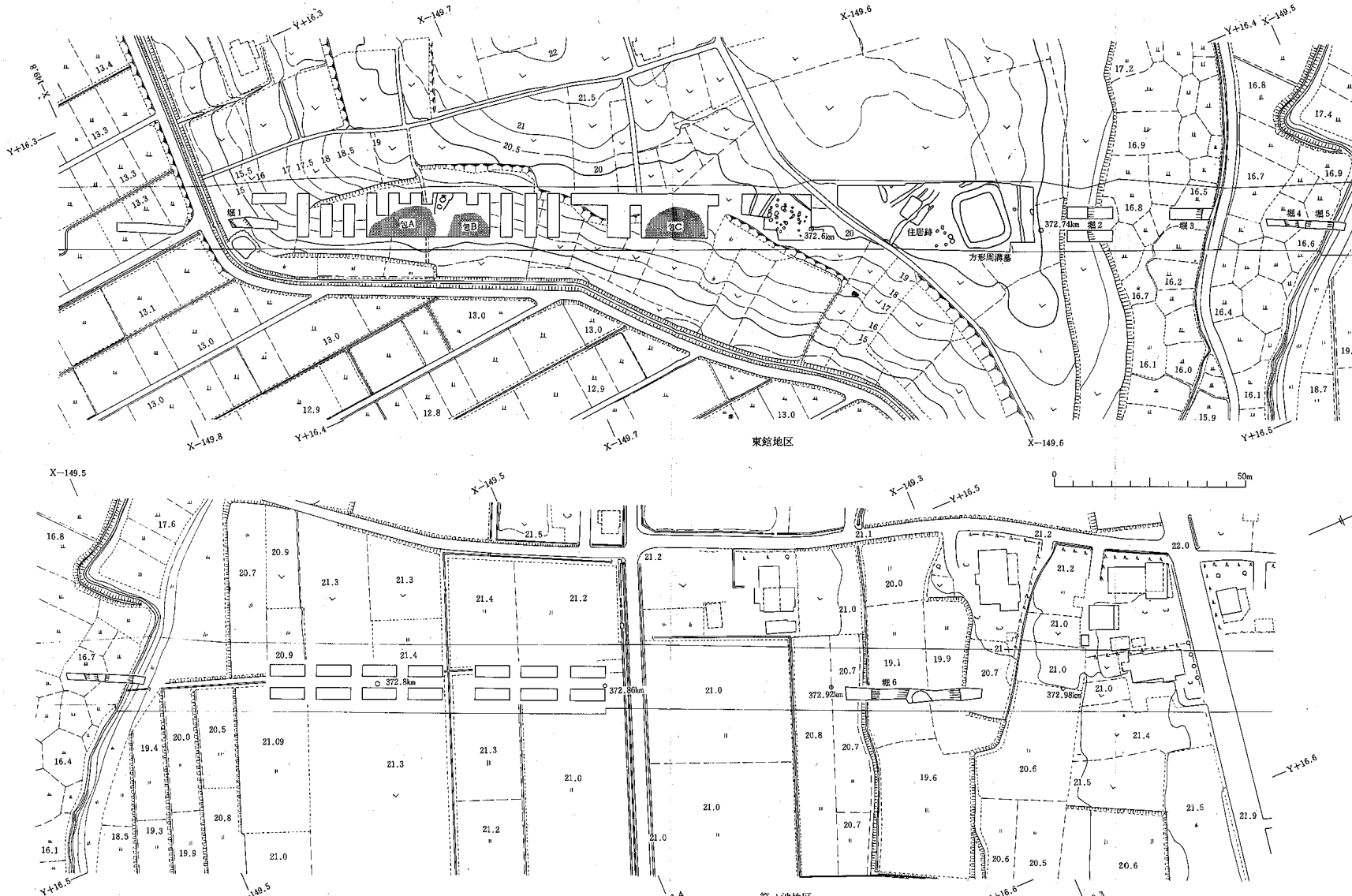
Ａ地点－貯水施設の南側斜面下半の表土下で確認された。面積は調査範囲内で約100m^{2}である。包含層は2層に大別される。第1層･第2層とも黒色あるいは黒褐色の砂質土で東に傾斜し、分布範囲もほぼ同じで東方調査区外までのびる。遺物は層中から出土し、土師器、須恵器･赤焼土器などがあり、第1層出土のものが大半を占める。遺物の保存状態は良好である。

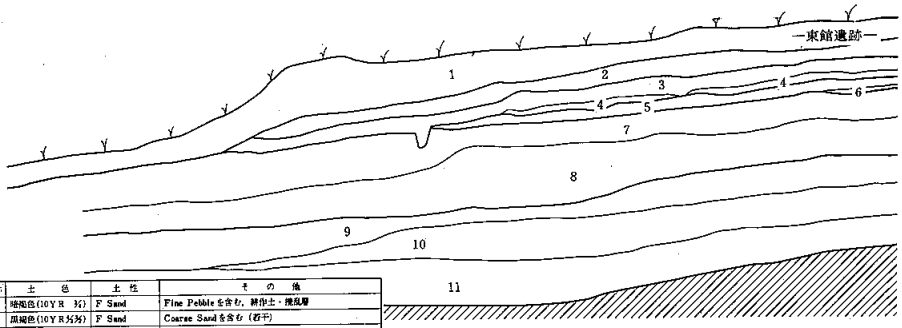
第1層出土遺物

〔土師器〕

坏

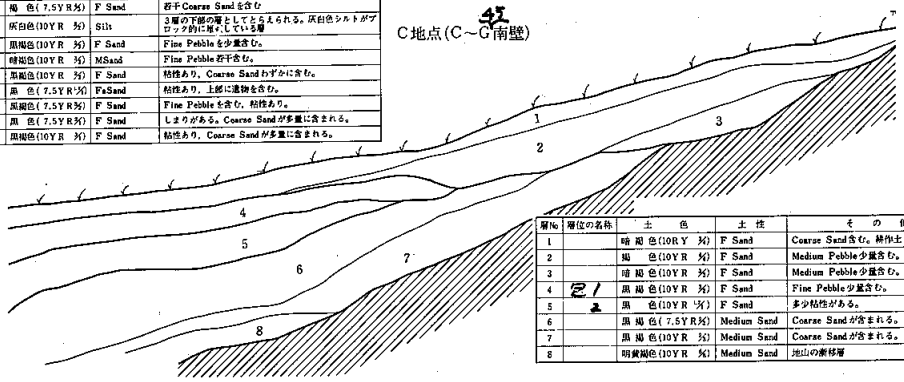
坏a（41・42）：底部にムシロ状圧痕が認められる。口縁部を欠き、体部はわずかに丸味を


東館地区
住居跡
方形周溝墓
堀1
堀2
堀3
堀4
堀5
堀6
包A
包B
包C
372.6km
372.74km
372.8km
372.86km
372.92km
372.98km
X−149.8
X−149.7
X−149.6
X−149.5
X−149.3
Y+16.3
Y+16.4
Y+16.5
Y+16.6
0
50m



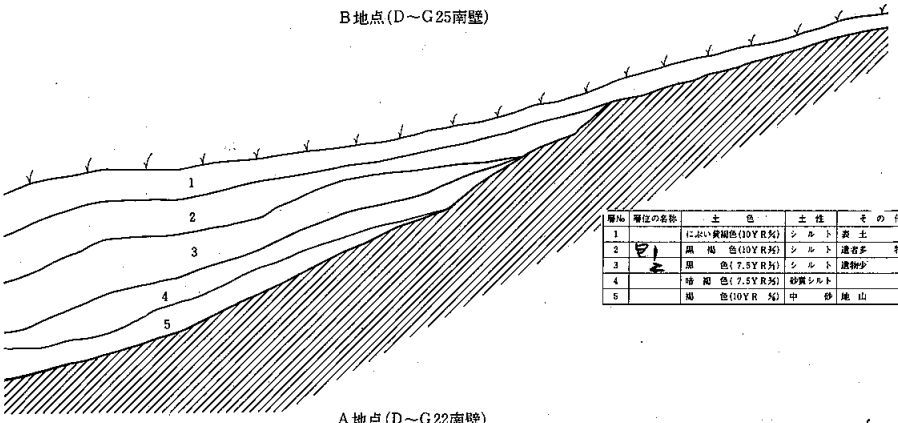
層No	層位の名称	土　色	土 性	そ の 他
1		暗褐色(10YR　½)	F Sand	Fine Pebbleを含む，耕作土・撹乱層
2	包1	黒褐色(10YR½½)	F Sand	Coarse Sandを含む（若干）
3	2	褐　色(7.5YR½)	F Sand	若干Coarse Sandを含む
4	3	灰白色(10YR　½)	Silt	3層の下部の層としてとらえられる。灰白色シルトがブロック的に層をしている層
5	4	黒褐色(10YR　½)	F Sand	Fine Pebbleを少量含む。
6	5	暗褐色(10YR　½)	MSand	Fine Pebble若干含む。
7	6	黒褐色(10YR　½)	F Sand	粘性あり，Coarse Sandわずかに含む。
8	7	黒　色(7.5YR½)	FaSand	粘性あり，上部に遺物を含む。
9		黒褐色(7.5YR½)	F Sand	Fine Pebbleを含む，粘性あり。
10		黒　色(7.5YR½)	F Sand	しまりがある。Coarse Sandが多量に含まれる。
11		黒褐色(10YR　½)	F Sand	粘性あり，Coarse Sandが多量に含まれる。

C地点(C～G45南壁)



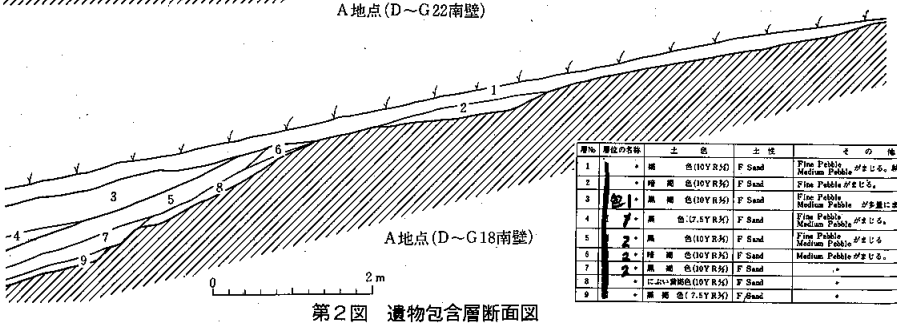
層No	層位の名称	土　色	土 性	そ の 他
1		暗 褐 色(10RY　½)	F Sand	Coarse Sand含む。耕作土
2		褐　色(10YR　½)	F Sand	Medium Pebble少量含む。
3		暗 褐 色(10YR　½)	F Sand	Medium Pebble少量含む。
4	包1	黒 褐 色(10YR　½)	F Sand	Fine Pebble少量含む。
5	2	黒　色(10YR　½)	F Sand	多少粘性がある。
6		黒 褐 色(7.5YR½)	Medium Sand	Coarse Sandが含まれる。
7		黒 褐 色(10YR　½)	Medium Sand	Coarse Sandが含まれる。
8		明黄褐色(10YR　½)	Medium Sand	地山の漸移層

B地点(D～G25南壁)



層No	層位の名称	土　色	土 性	そ の 他
1		に ぶ い 黄褐色(10YR½)	シ ル ト	表 土
2	包1	黒 褐 色(10YR½)	シ ル ト	遺物多 物
3	2	黒　色(7.5YR½)	シ ル ト	遺物少
4		暗 褐 色(7.5YR½)	砂質シルト	
5		褐　色(10YR　½)	中　砂	地 山

A地点(D～G22南壁)



層No	層位の名称	土　色	土 性	そ の 他
1	＊	暗　色(10YR½)	F Sand	Fine Pebble Medium Pebble がまじる。耕作土
2	＊	暗 褐 色(10YR½)	F Sand	Fine Pebble がまじる。
3	包1 ＊	黒 褐 色(10YR½)	F Sand	Fine Pebble Medium Pebble が多量にまじる。
4	1 ＊	黒　色(7.5YR½)	F Sand	Fine Pebble Medium Pebble がまじる。
5	2 ＊	黒　色(10YR½)	F Sand	Fine Pebble Medium Pebble がまじる
6	2 ＊	暗 褐 色(10YR½)	F Sand	Medium Pebble がまじる。
7	2 ＊	黒 褐 色(10YR½)	F Sand	＊
8	＊	に ぶ い 黄褐色(10YR½)	F Sand	＊
9	＊	黒 褐 色(7.5YR½)	F Sand	＊

A地点(D～G18南壁)

第２図　遺物包含層断面図

もって立ち上がる。底部は平底である。調整は体部外面にヘラケズリ、内面にヘラミガキ･黒色処理が施されている。

坏b：製作にロクロを使用している。器形は体部から口縁部までわずかに丸味をもって立ち上がり、口縁部が外反気味のものもある。口縁部から体部の外面にはロクロ調整痕がみられ、内面にはヘラミガキ･黒色処理が加えられている。底部の切り離し技法と外面の再調整の有無によって①～③に分けられる。

①（1～3）：底部が回転糸切り技法によって切り離され、体部下端に手持ちヘラケズリが加えられている。

②（4～38）：底部が回転糸切り技法によって切り離され、再調整は加えられていない。なお、33には墨書がみられるが、墨痕うすく判読できない。

③（39・40）：再調整が加えられて,底部の切り離し技法が不明である。体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施されている。

耳皿（63）：製作に際しロクロを使用している。口縁部を欠くが、体部は相対する位置で途中から上方に折り曲げられている。高台が付けられており、その際の調整で底部の切り離し技法は不明である。内面中央部に丸く沈線が引かれている。調整は内外面ともヘラミガキ・黒色処理が施されており、部分的にその前段階のロクロ調整痕が観察される。

高台付坏（43）

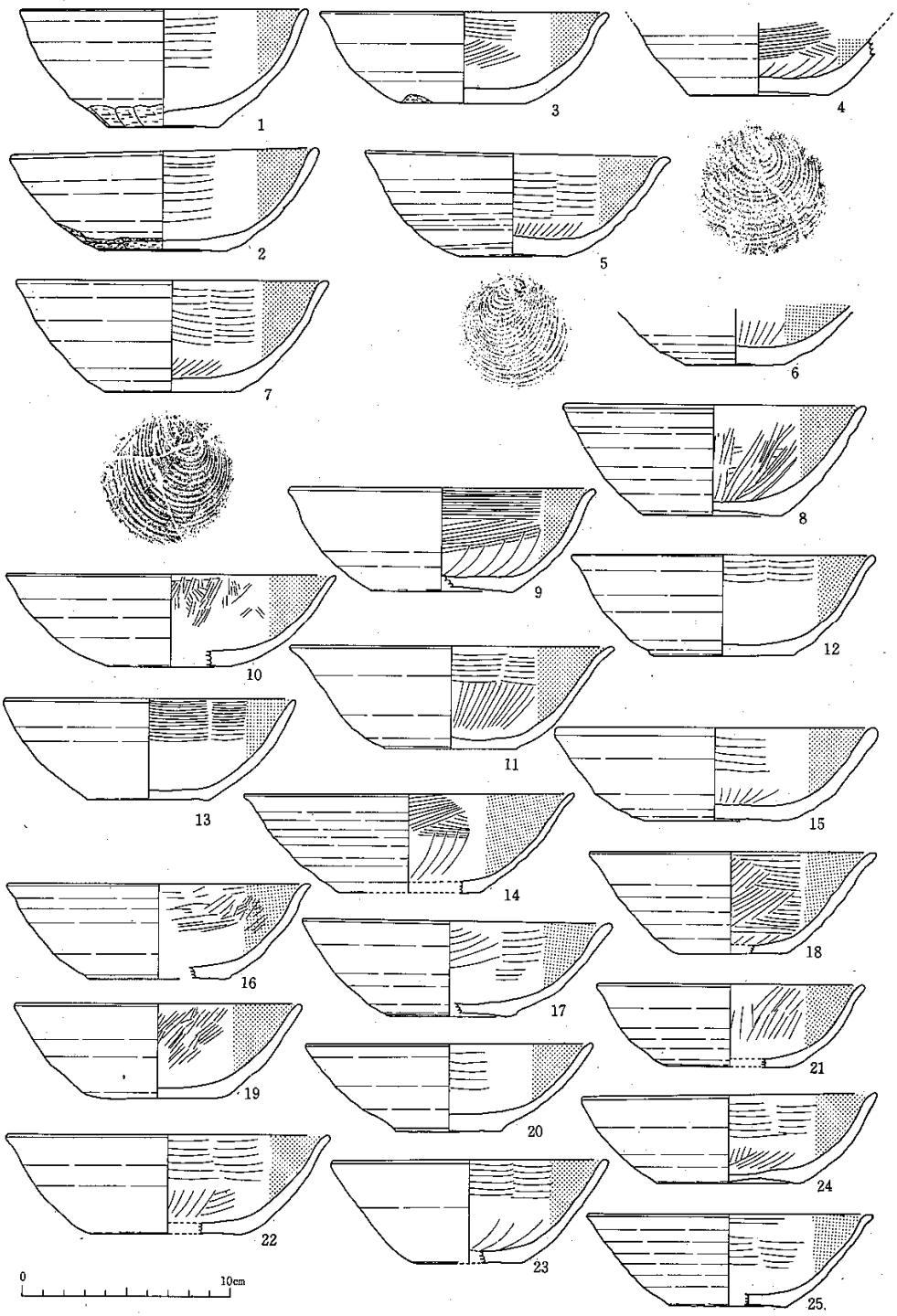
製作に際し、ロクロを使用している。体部はわずかに丸味をもって立ち上がり、口縁部で外反気味となる。高台は強く開き、先端がうすくなる。坏底面に回転糸切り痕を残す。坏部内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。他に破片では坏底面に放射状ナデツケのみられるもの、全面がロクロ調整されるものがある。

甕

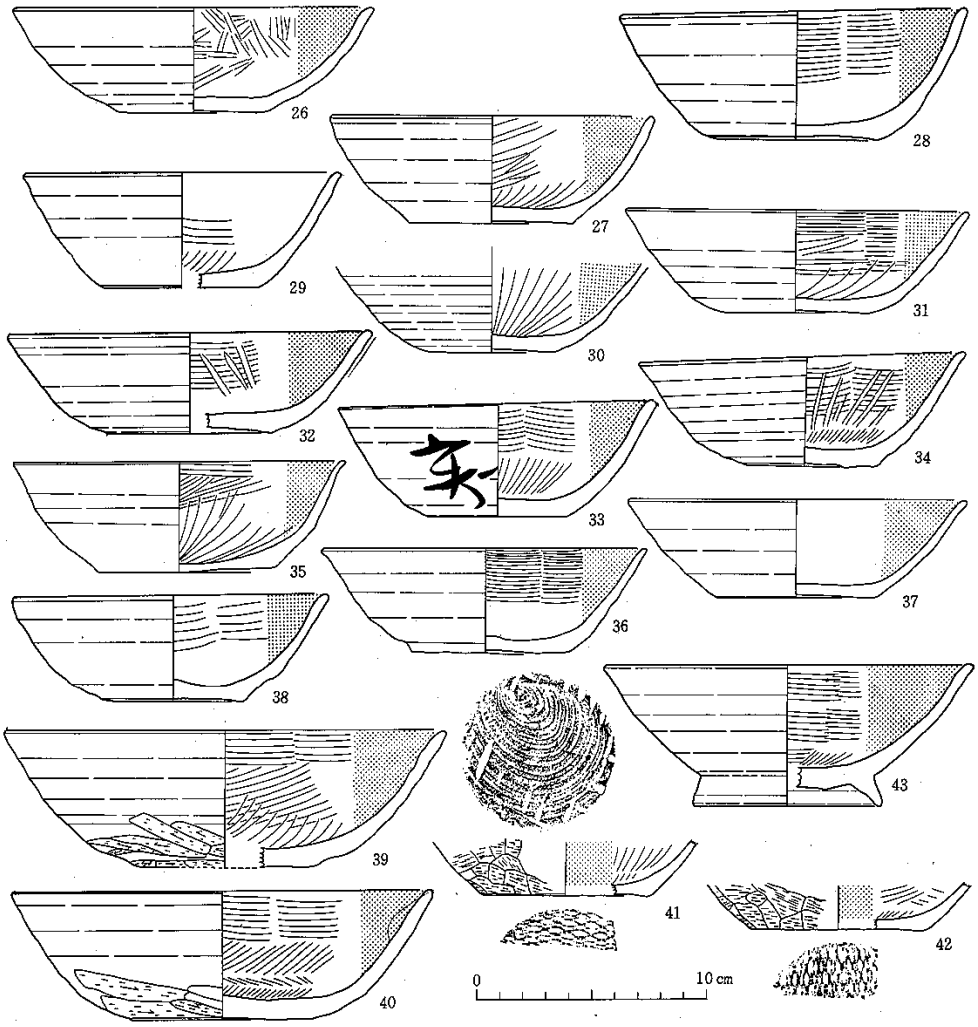
甕a（44）：口径より器高が大きいものである。最大径は口縁部に位置する。口縁部は外傾し、体部上半がわずかに丸味をもつ、調整は口縁部外面に横ナデ、内面に刷毛目、体部外面に刷毛目、内面にナデが施されているが、口縁部外面と体部内面には一部に刷毛目が観察される。

甕b（45･46）：口径より器高が小さい。最大径は、口縁部に位置し、体部上半がほぼ直立するものである。口縁部はわずかに外反し、頚部に軽い段のつくものもある。調整は口縁部内外面に横ナデ、体部外面にヘラケズリ、内面にナデが施されている。

甕c（47～49）：製作に際しロクロを使用している。最大径は口縁部に位置する。口縁部は外反あるいは外傾し、体部はわずかにふくらみをもつ。大形と小形がある。調整は、外面にはロクロ調製がみられるが、その後、体部下半にヘラケズリの加えられるものが多い。内面はロクロ調整、ロクロ調整後ナデ、ヘラミガキ、黒色処理などが施されている。

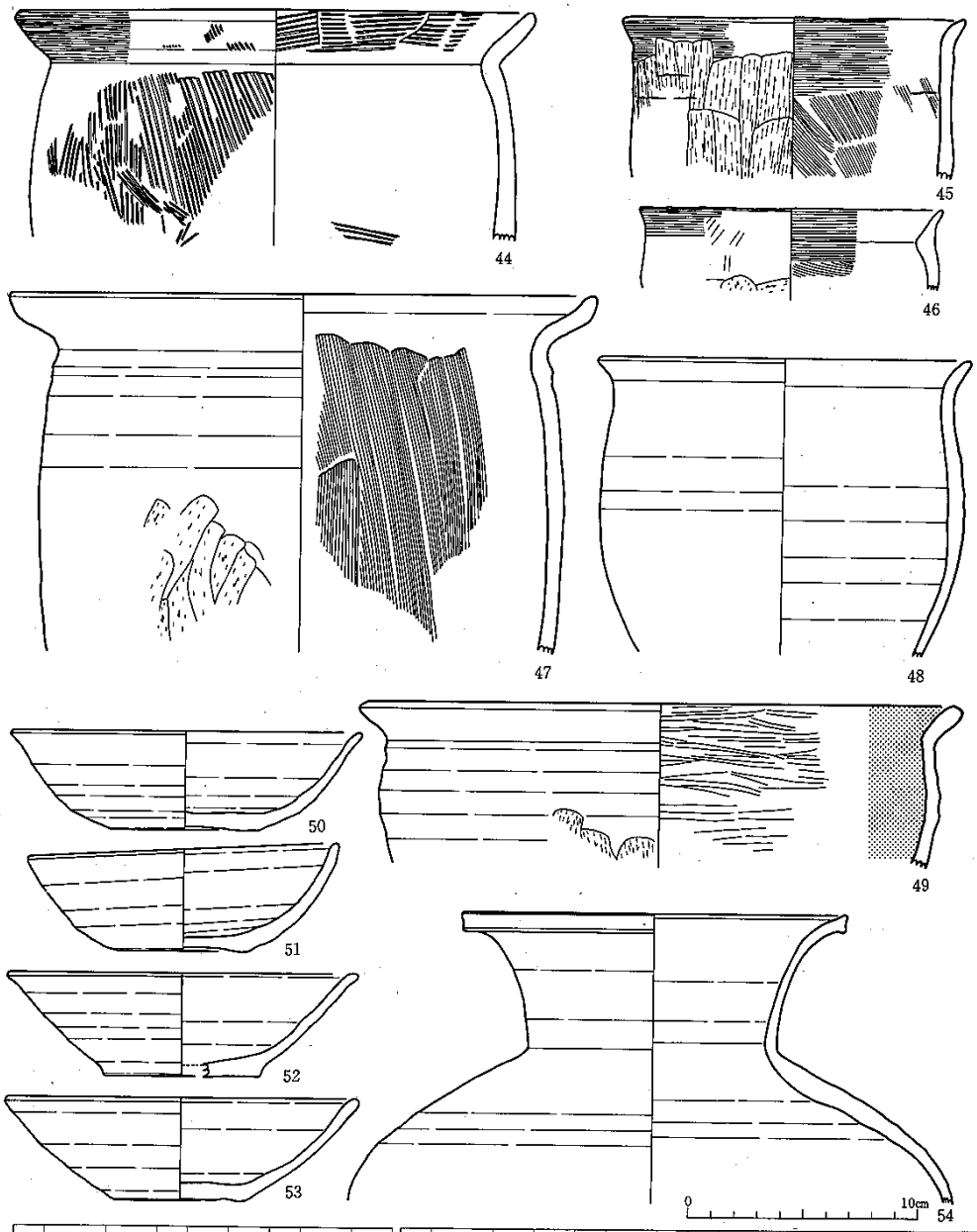


第３図　遺物包含層Ａ地点出土遺物 (1)



番号	種別・器形	出土位置	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	登録番号	分類	番号	種別・器形	出土位置	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	登録番号	分類
1	土師器 坏	包含層A1層	13.9	5.7	5.4	17	BⅠa(i)	23	土師器 坏	包含層A1層	13.4	5.0	4.9	112	BⅠb
2	〃 〃	〃	14.8	4.8	6.1	91	BⅠa(i)	24	〃 〃	〃	14.3	4.3	7.0	89	BⅠb(i)
3	〃 〃	〃	13.9	4.3	5.9	53	BⅠa(i)	25	〃 〃	〃	13.8	4.4	5.7	12	BⅠb
4	〃 〃	〃		(2.9)	6.6	102	BⅠb(i)	26	〃 〃	〃	15.7	4.6	5.7	61	BⅠb(i)
5	〃 〃	〃	14.7	4.9	5.0	140	BⅠb	27	〃 〃	〃	14.1	4.7	7.1	18	BⅠb(i)
6	〃 〃	〃		(2.9)	4.8	44	BⅠb(i)	28	〃 〃	〃	15.2	5.6	6.9	93	BⅠb(i)
7	〃 〃	〃	15.1	5.5	7.4	96	BⅠb(i)	29	〃 〃	〃	13.9	5.0	6.4	43	BⅠb
8	〃 〃	〃	14.6	5.3	6.7	87	BⅠb	30	〃 〃	〃	(13.6)	(3.9)	5.4	4	BⅠb(i)
9	〃 〃	〃	14.7	5.0	6.7	106	BⅠb(i)	31	〃 〃	〃	14.9	4.5	5.9	99	BⅠb(i)
10	〃 〃	〃	15.8	4.5	5.8	40	BⅠb	32	〃 〃	〃	15.9	4.4	7.1	41	BⅠb(i)
11	〃 〃	〃	15.7	5.0	6.4	38	BⅠb(i)	33	〃 〃	包含層A3層	14.0	4.9	6.0	19	BⅠb(i)
12	〃 〃	〃	14.6	5.0	7.0	86	BⅠb(i)	34	〃 〃	包含層A1層	14.3	4.7	5.7	25	BⅠb(ii)
13	〃 〃	〃	14.0	4.9	5.8	136	BⅠb(i)	35	〃 〃	〃	14.5	4.8	7.7	116	BⅠb(i)
14	〃 〃	〃	15.9	5.0	6.8	118	BⅠb(i)	36	〃 〃	〃	14.2	4.6	7.0	119	BⅠb(i)
15	〃 〃	〃	15.5	4.5	5.4	32	BⅠb(i)	37	〃 〃	〃	14.8	4.3	7.0	103	BⅠb(i)
16	〃 〃	〃	14.6	4.6	6.9	146	BⅠb	38	〃 〃	〃	13.8	4.6	5.7	92	BⅠb(i)
17	〃 〃	〃	15.0	4.6	5.2	95	BⅠb(i)	39	〃 〃	〃	19.3	6.0	7.4	115	BⅡa
18	〃 〃	〃	13.8	4.9	5.2	117	BⅠb	40	〃 〃	〃	18.4	5.6	7.2	90	BⅡa
19	〃 〃	〃	13.9	4.6	5.3	56	BⅠb(ii)	41	〃 〃	〃		(2.3)	7.2	144	AⅦ
20	〃 〃	〃	13.9	4.2	5.1	35	BⅠb(ii)	42	〃 〃	〃		(2.0)	7.6	145	AⅦ
21	〃 〃	〃	12.9	4.0	6.0	81	BⅠb	43	〃 高台付坏	〃	16.1	6.2	7.6	1	Ⅱ
22	〃 〃	〃	15.7	4.8	7.2	72	BⅠb(i)			〃					

第４図　遺物包含層Ａ地点出土遺物 (1)

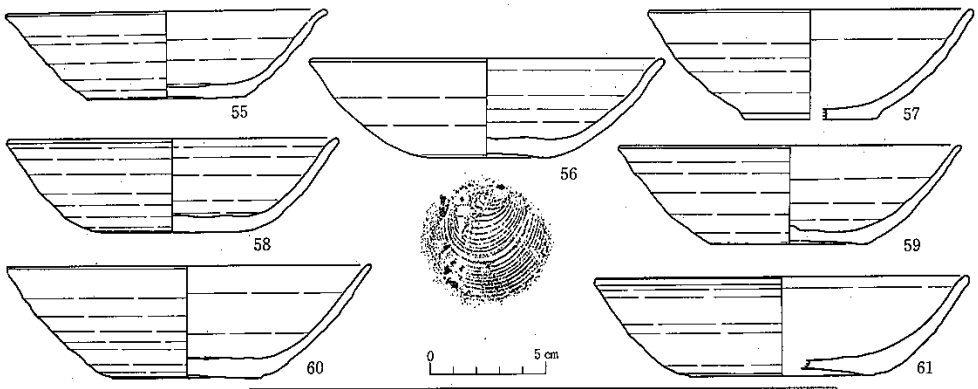


番号	種別・器形	底面調整	口径(cm)	体部径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	登録番号	分類
44	土師器 甕	22.7	21.2	(10.0)		76	76	A I
45	〃 〃	15.0	14.1	(15.6)		126	126	A III
46	〃 〃	13.2	13.0	(7.0)		138	138	A
47	〃 〃	25.6	23.0	(3.5)		66	66	B(a)
48	〃 〃	16.2	15.9	(12.9)		108	108	B(b)
49	〃 〃	26.3	24.6	(7.0)		62	62	B(a)

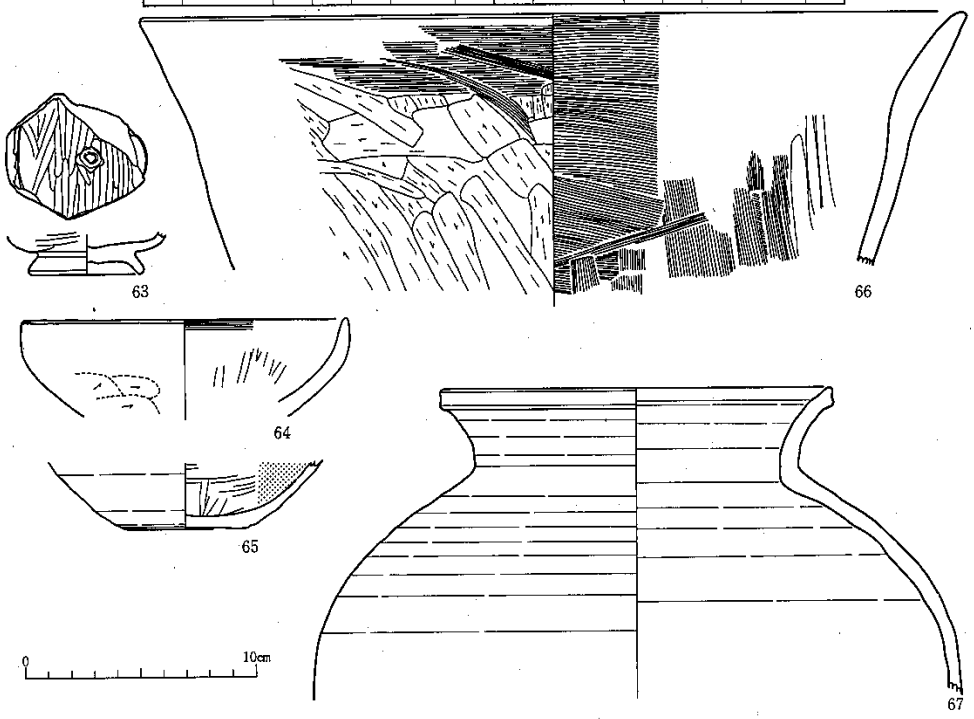
番号	種別・器形	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	登録番号	分類
50	須恵器 坏	15.4	4.3	6.5	65	I(ii)
51	〃 〃	13.6	4.4	5.6	23	I(i)
52	〃 〃	15.3	4.5	6.8	5	II

番号	種別・器形	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	登録番号	分類
53	須恵器 坏	15.5	4.5	5.7	85	I(i)
54	〃	16.8	(12.6)		28	I

第５図　遺物包含層Ａ地点出土遺物 (3)

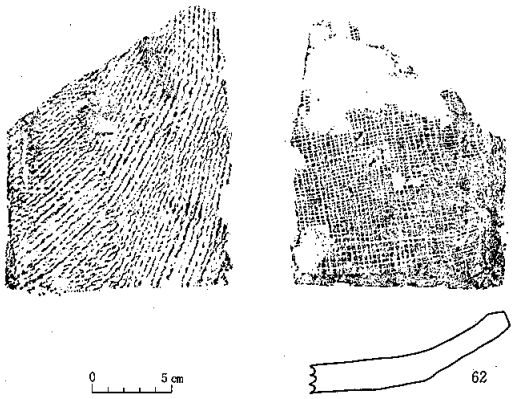


番号	種別・器形	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	登録番号	分類	番号	種別・器形	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	登録番号	分類
55	赤焼土器　坏	14.0	3.8	6.8	100		59	赤焼土器　坏	14.8	4.3	6.7	107	
56	〃　〃	15.5	4.4	5.0	50		60	〃　〃	15.9	4.9	6.4	111	
57	〃　〃	14.1	4.8	5.7	101		61	〃　〃	16.2	4.3	8.0	97	
58	〃　〃	14.5	4.1	5.7	58								



番号	種別・器形	口径(cm)	体部径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	登録番号	分類
63	土師器耳皿				5.0	149	
64	〃　坏	14.2		(4.2)		10	AⅦb(i)
65	〃　〃			(2.8)	4.3	42	BⅠa(iii)
66	〃　甕	35.6		(11.0)		21	AⅢa
67	須恵器　甕	17.0	28.1	(13.0)		74	Ⅱ

第６図　遺物包含層Ａ地点出土遺物 (4)



第７図　遺物包含層Ａ地点出土遺物 (5)

〔赤焼土器〕

坏（55～61）

製作に際しロクロを使用しており、体部から口縁部までわずかに丸味をもって立ち上がる。

口縁部が外反気味になるものもある。底部は回転糸切り技法によって切り離され、再調整は、みられない。ロクロは右回転である。

〔須恵器〕

坏ａ（50･51･53）：底部が回転糸切り技法によって切り離されている。体部から口縁部までわずかに丸味をもって立ち上がる。再調整はみられない。

坏ｂ（52）：底部に回転ヘラケズリが加えられ、切り離し技法は不明である。体部から口縁部まで直線的に立ち上がり、口縁部は外反気味となる。

甕（54）：最大径は体部に位置している。口頸部は長く、頸部は「く」字状に屈折して立ち上がり、口縁部は外反して、口縁端がわずかにふくらむ。内外面にロクロ調整痕がみられる。

〔瓦〕平瓦の破片が2点出土している（62）。凸面に縄叩き目、凹面に布目がみられる。木骨痕は観察されない。

甕（66）：口径より器高が小さい。口縁部は体部からわずかに屈曲して外傾する。調整は口縁部内外面に横ナデ、体部は外面にヘラケズリ、内面にナデがみられる。

〔須恵器〕

甕（67）：最大径が体部に位置する。口頸部は短く外反し端部がわずかにふくらむ。体部上半は丸い。内外面にロクロ調整痕がみられる。

第2層出土遺物

〔土師器〕

坏ａ（64）：体部から口縁部まで丸味をもって立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。底部を欠いでいる。調整は外面にヘラケズリののちヘラミガキ、内面口縁部に横ナデ、体部にヘラミガキが施されている。

坏ｂ（55）：製作に際しロクロを使用している。底部は回転糸切り技法によって切り離され、底部周縁に手持ちヘラケズリが加えられている。口縁部を欠く。体部はわずかに丸味をもって

立ち上がる。内面はヘラミガキ･黒色処理されている。ロクロは右回転である。

Ｂ地点－貯水施設の北側斜面下半で確認された。面積は調査範囲内で約60m^{2}である。

包含層は2層に分かれる。第1層は黒褐色･第2層は黒色でいずれも砂質土である。第1・2層とも東側に傾斜し、ほぼ同じ範囲に分布するが、東方は調査区外までのびる。遺物は層中と第2層上面から出土しており、第1層出土のものが大半を占め、第2層上面･第2層は少ない。遺物には土師器･須恵器･赤焼土器などがあり、保存状態は良好である。

第1層出土遺物

〔土師器〕坏・高台付坏・甕がある。

坏（1～3）：製作に際しロクロを使用している。体部から口縁部までわずかに丸味をもって立ち上がる。口縁端が外反気味のものもある。内面はヘラミガキ･黒色処理されている。底部は回転糸切り技法によって切り離され、再調整はみられない。ロクロは右回転である。

高台付坏（4）：ロクロを使用している。体部は直線的に立ち上がる。口縁部を欠く。内面はヘラミガキ･黒色処理されている。高台は強く開き、先端は丸くおさまる。坏底部に回転糸切り痕を残す。

甕（5）：口径より器高が大きく、最大径が体部に位置する。口頸部は短く「く」字形に屈折して外傾する。体部はほぼ球形を呈するが、上半は丸味が弱い。底部を欠いでいる。体部調整は外面にヘラケズリ、内面に刷毛目が施されている。

〔須恵器〕

甕　6は口頸部は短く外反し、口縁端部がふくらむ、体部上端は張る。内外面ともロクロ調整されているが、体部外面にはロクロ調整前の平行叩き目が観察される。7･8は口縁部破片である。波状文がみられる。

長頸部（9）：頸部はわずかに外反する。口縁部を欠く。体部上端はなだらかな丸味をもつ。

〔赤焼土器〕

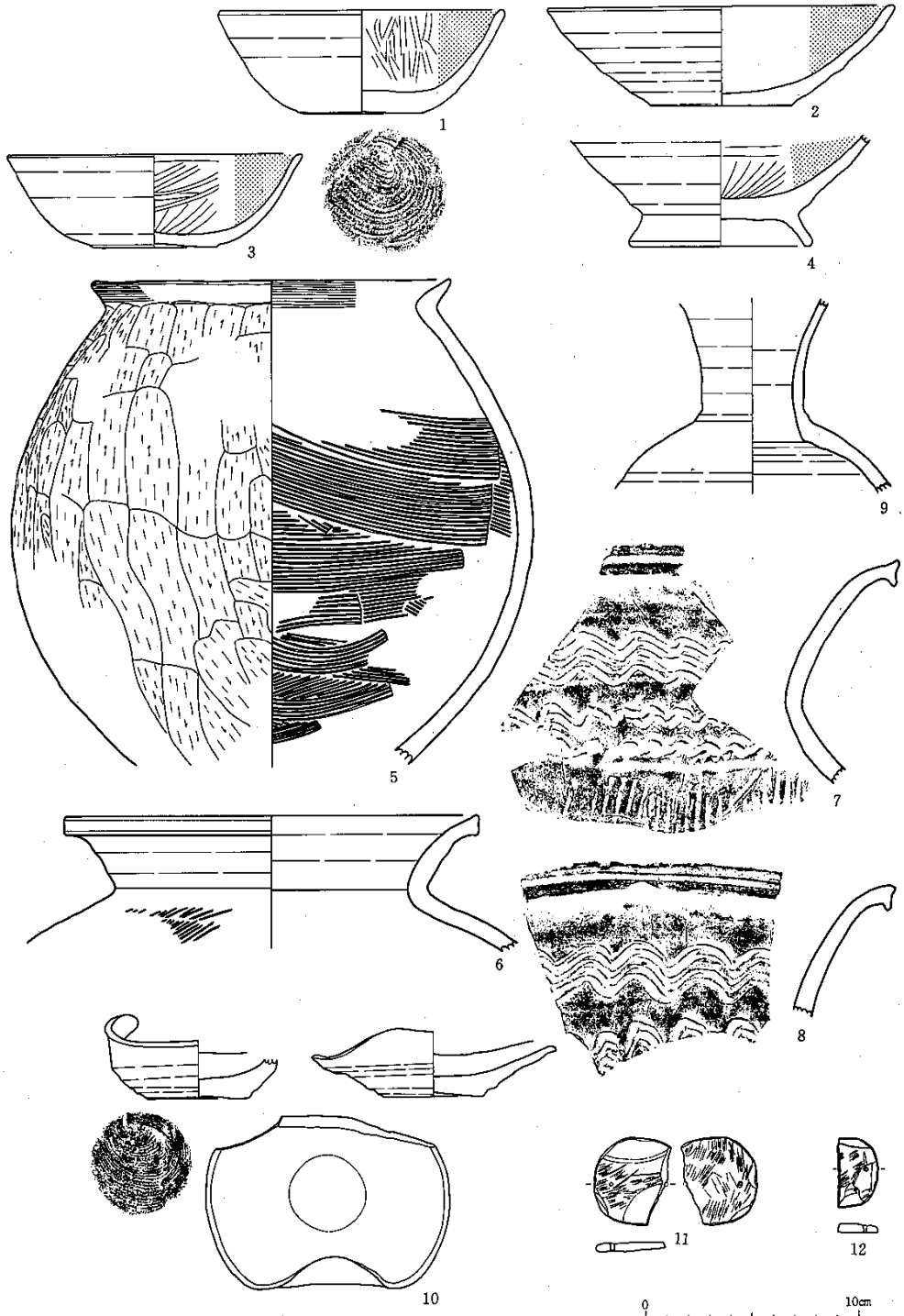
耳皿（10）：浅い坏形のものの側面を相対する位置で、内側に折り曲げている。底部は回転糸切り技法によって切り離され、再調整はみられない。

石製模造品　2点出土している。11は2孔をもつ有孔円盤である。平面形はゆがんだ円形を呈す。両面に製作時の擦痕がみとめられる。孔は一方の縁に剥落がみられ、片側から穿たれたものと考えられる。12は半欠品であるが11と同様の形態のものと思われる。

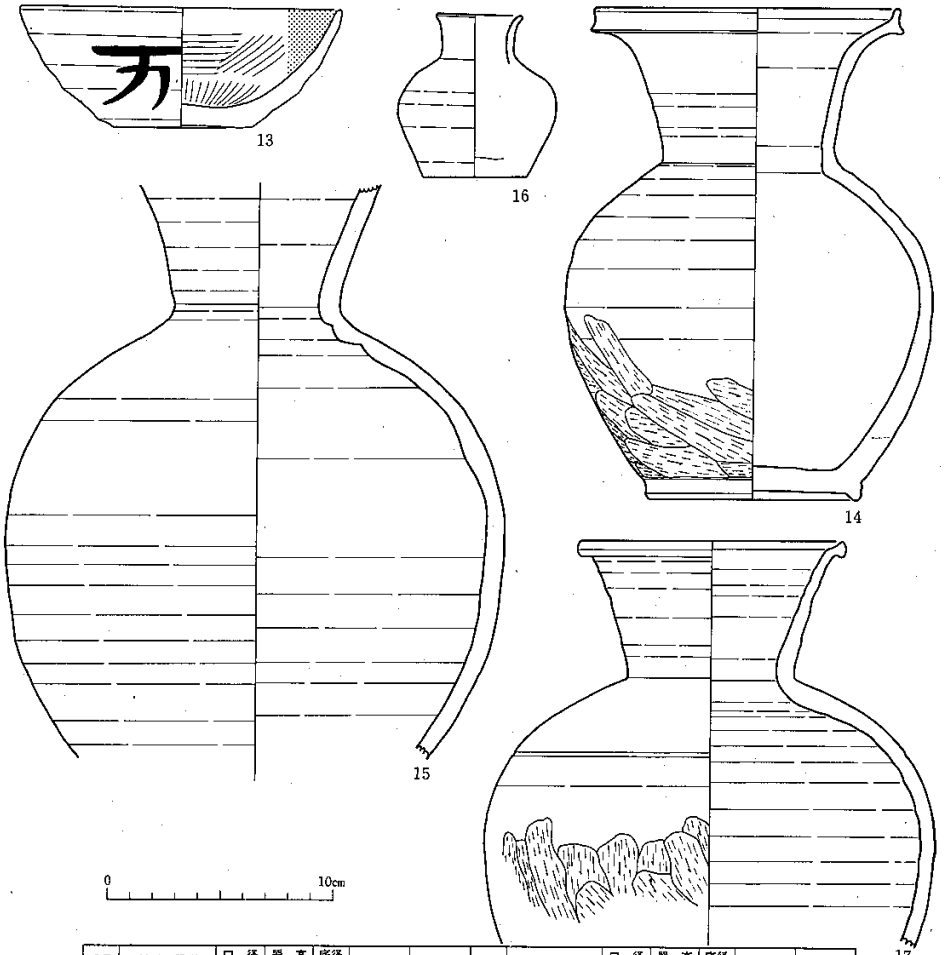
第2層上面出土遺物

〔土師器〕

坏（13）：製作にロクロを使用している。底部は回転糸切り技法で切り離され、再調整はみ



第８図　遺物包含層Ｂ地点出土遺物（1）



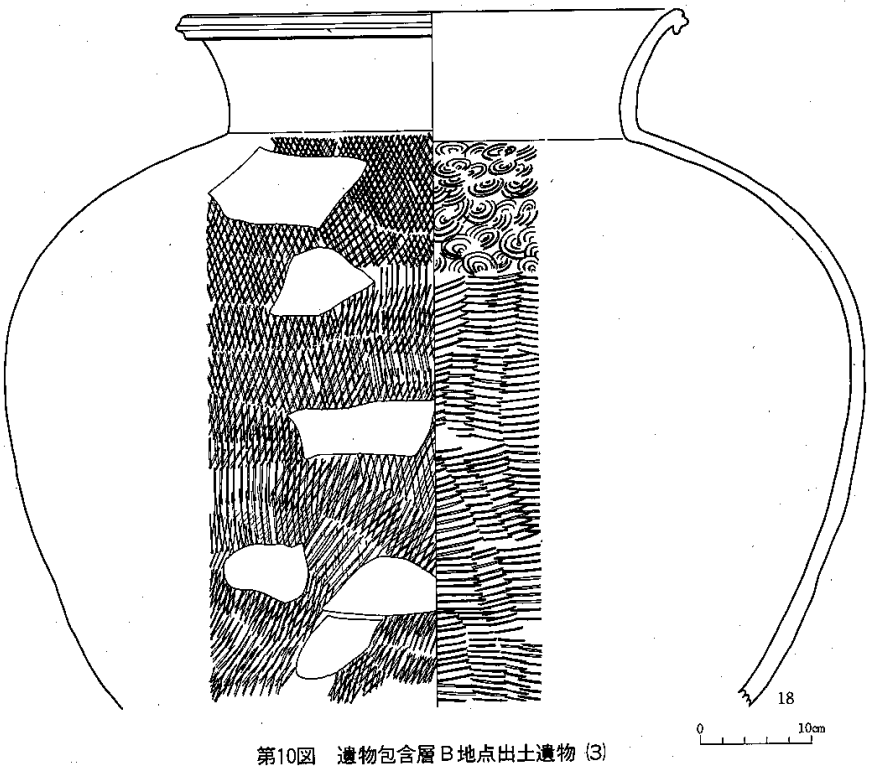
番号	種別・器形	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	登録番号	分類	番号	種別・器形	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	登録番号	分類
1	土師器　坏	13.5	4.8	5.2	82	BⅡb(i)	13	土師器　坏	14.4	5.4	6.2	24	BⅠb(i)
2	〃　〃	16.3	4.7	6.6	3	BⅠb(i)	14	須恵器　壺	13.9	21.9	9.3	20	
3	〃　〃	13.9	4.4	5.8	13	BⅠb(i)	15	〃　〃		(25.4)		39	
4	〃　高台付坏	(14.0)	(5.0)	7.4	2	Ⅱ	17	〃　小形壺	3.8	7.2	4.1	77	
5	〃　甕	16.8	(22.8)		9	AⅡa	16	〃　〃	12.0	(18.1)		22	
6	須恵器　甕	19.5	(6.4)		71	Ⅱ	18	〃　大甕	46.2	(63)		150	

第９図　遺物包含層Ｂ地点出土遺物 (2)

られない。内面はヘラミガキ・黒色処理され、外面に「万」の墨書がみられる。

〔須恵器〕

大甕(18)：体部径が77cmほどの大甕である。底部を欠く。最大径は体部に位置する。口頸部は「く」字状にくびれて外反し、口縁端は外方につまみ出されている。体部は上半が丸味をもち体部最大径も上半に位置する。体部外面に平行叩き目、体部内面に円心円・平行あて目が



第10図　遺物包含層Ｂ地点出土遺物 (3)

みられる。

壺

14：頚部は外傾し、口縁部は外傾して端部が上･下方につまみ出されている。体部は最大径が中央に位置してなだらかな丸味をもつ。底部は高台が付けられている。内外面ともロクロ調整されているが、外面体部下半にヘラケズリが加えられている。

15：頚部は直線的に外傾し、口縁部を欠く。体部は最大径が中央部に位置し、全体になだらかな丸味をもち、紡錘形を呈する。底部を欠く。内外面ともロクロ調整されている。

小形壺（16）

口頚部はわずかに外反する。体部最大径は上半に位置し、上半は丸く、下半は直線的である。内外面ともロクロ調整されているが、底部の調整は不明である。

第2層出土遺物

〔須恵器〕

壺（17）：口頚部は直線的に外傾し、口縁端部が外傾に折れた先端はふくらむ。体部は上半

が球形を呈し、下半はなだらかである。内外面ともロクロ調整されているが外面体部下半にはヘラケズリが加えられている。

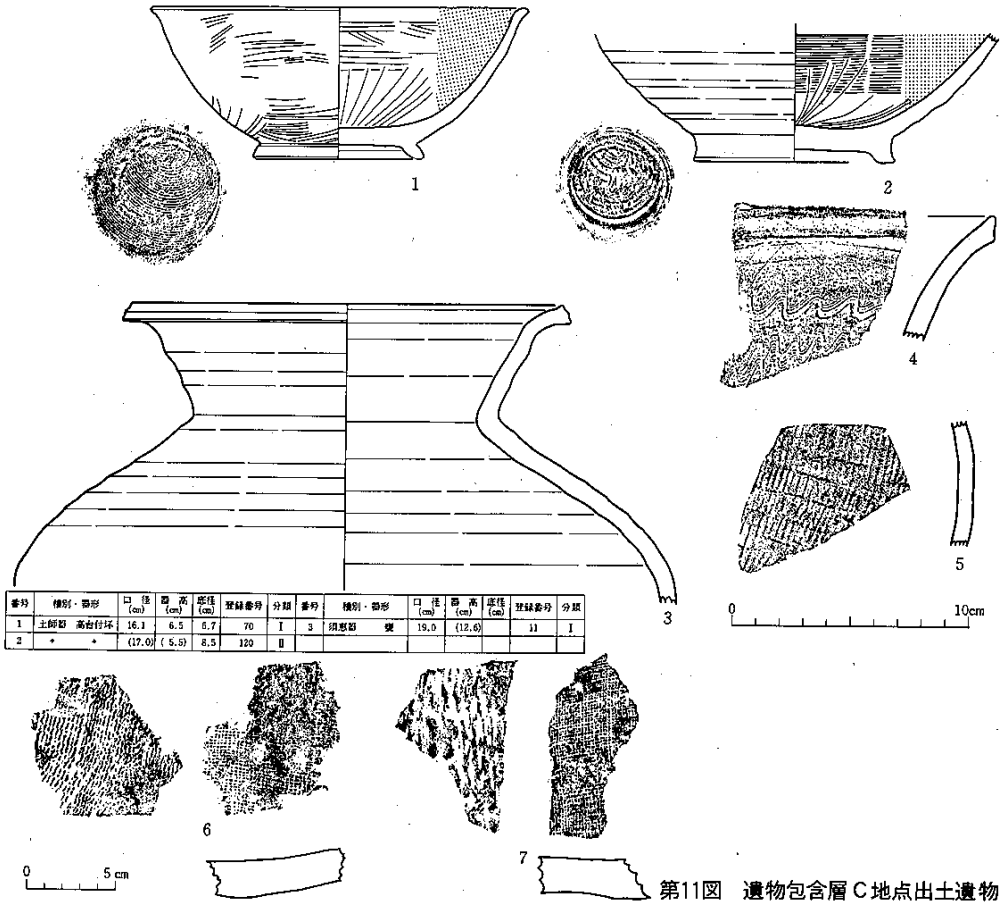
C地点－第1地区平坦部の南側にあたる傾斜面下半の表土下で検出された。面積は約110m^{2}である。包含層は5層に分かれる。第1層黒褐色・第2ａ層褐色・第2ｂ層灰白色・第3ａ層黒褐色第3ｂ暗褐色・第4層黒褐色・第5層黒色であり、第2ｂ層がシルトであるほかはすべて砂質土である。

第1層から第4層までは斜面途中で分布が途切れ、第5層は調査区外まで続く。

遺物はすべて層中から出土しており、各層とも出土量は少い。土師器・須恵器・赤焼土器などがあり、保存状態は良くない。

〔土師器〕

高台付坏ａ（1）：坏部外面に再調整の施されているものである。坏部は体部から口縁部ま



番号	種別・器形	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	登録番号	分類	番号	種別・器形	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	登録番号	分類
1	土師器　高台付坏	16.1	6.5	8.7	70	Ⅰ	3	須恵器　甕	19.0	(12.6)		11	Ⅰ
2	〃　〃	(17.0)	(5.5)	8.5	120	Ⅱ							

第11図　遺物包含層Ｃ地点出土遺物

でわずかな丸味をもって立ち上がり、口縁端が外反気味となる。高台は短く、強く開き、下端は丸くおさまる。坏底部に回転糸切り痕を残す。坏口縁部・体部は内外面ともヘラミガキ、黒色処理が加えられている。

高台付坏ｂ（2）：球部外面に再調整の施されていないものである。内面はヘラミガキ･黒色処理され、底部に回転糸切り痕を残す。

〔須恵器〕

甕（3～5）：最大径は体部に位置する。口縁部が外反し口縁端は内・外側ともわずかにつまみ出されている。体部上半はなだらかで、中央が丸味をもつ。体部下半以下を欠く直内外面ともロクロ調整痕が認められる。

4は口縁破片である。波状文がみられる。5は体部破片である。格子叩き目がみられる。

〔瓦〕（6・7）：第3・5層から平瓦の破片が1点づつ出土している。凸面に縄叩き目、凹面に布目が観察される。7は縄目の条の間隔が開いている。

2. 方形周溝墓

〔遺構の確認〕第1地区、平坦部の地山面で確認された。

〔重複〕ピットに切られており、また耕作によってかなり撹乱されている。

〔平面形･規模〕長軸15.4m×短軸13.2mの隅丸長方形に溝がめぐる。溝が途切れることはない。東辺は張り出している。長軸の方向はN－88°－Wである。

〔溝の形態･規模〕各辺の溝はほぼ直線的であるが、東辺は外側が張り出している。壁面は平坦な部分が多いが、東辺南半と、南西隅から西辺･北辺の西半になけての外側の壁は段がついている。底面は狭く平坦であるが、南辺の東よりは段がついて部分的に深くなる。東辺北半は段がついて南半より深くなり、その底面1なく北辺の底面に続く。溝の断面形は各辺ともほぼ逆台形を呈する。規模は、幅が1.1～2.5m、深さが約70cmである。

〔溝内堆積土〕構内堆積土は6層に大別される。各層ともほぼ各辺全体に分布している。流入方向は辺によって偏りはなく、溝の両側から交互に流入している。第6層は地山崩壊土であり、第1次の堆積土である。

〔台状部〕長軸正11.3m×短軸10.2mの長方形で、盛土、土壙などは検出されなかった。

〔出土遺物〕構内堆積土第1～4層、第5層上面から縄文土器、弥生土器、土師器、石器などが出土している。遺構に伴出した遺物はないが、地山の崩壊土である第6層の上面から出土した体部に穿孔のある土師器壺（28）、遺構の年代に近いものと思われる。

縄文土器　いずれも小破片で、器形の判明するものはない。

口縁部－1・2・3は胎土に繊維を含んでいる。4は波状口縁で、外面に貝殻背面で押圧し

た後、波状口縁の頂部から方射状に7本の沈線を引いている。中央には丸いくぼみがみられる。内面上端に貝殻腹縁文が施文されている。5・6は平縁で、斜行縄文（ＬＲ）を地文として横位2列に鋸歯状の沈線文が施文されている。7・8は平縁であるが2個1対の突起がつく。地文として縄文（原体不明）が施されるが、痕跡をとどめてすり消されている。

体部－9・10・11は胎土に繊維を含んでいる。このうち9・10は斜行縄文を伴ったループ文（ＲＬ）が施文されている。11は特殊結縄文がみられる。12・13は斜行縄文（ＬＲ）を地文として横位に鋸歯状の沈線文が施文されている。

これらの縄文土器の所属時期1～3、9～11が前期初頭、4が早期大寺上層式、5～8、12、12　13が前期中葉と思わる。

弥生土器　小破片が多いため器形の判明するものは少い。

口縁部－14は平縁で口縁部が肥厚し、撚糸文（R）を地文として上に開く2条1対の沈線が弧状に描かれている。頚部には交互刺突文がみられる。15は平縁で口縁部に撚糸文（R）がみられる。16は平縁で口縁部から体部にかけて撚糸文（R）がみられる。17は平縁で口縁部に撚糸文（L）を地文として下に開く弧状の撚糸圧痕が施され、頚部には刺突文が施文されている。
体部には撚糸文（L）がみられる。

体部－18・19は弧状の沈線が描かれている。20は撚糸文（R）がみられる。

これらの弥生土器の所属時期は14～17が天王山式、18・19が大泉式と思われる。

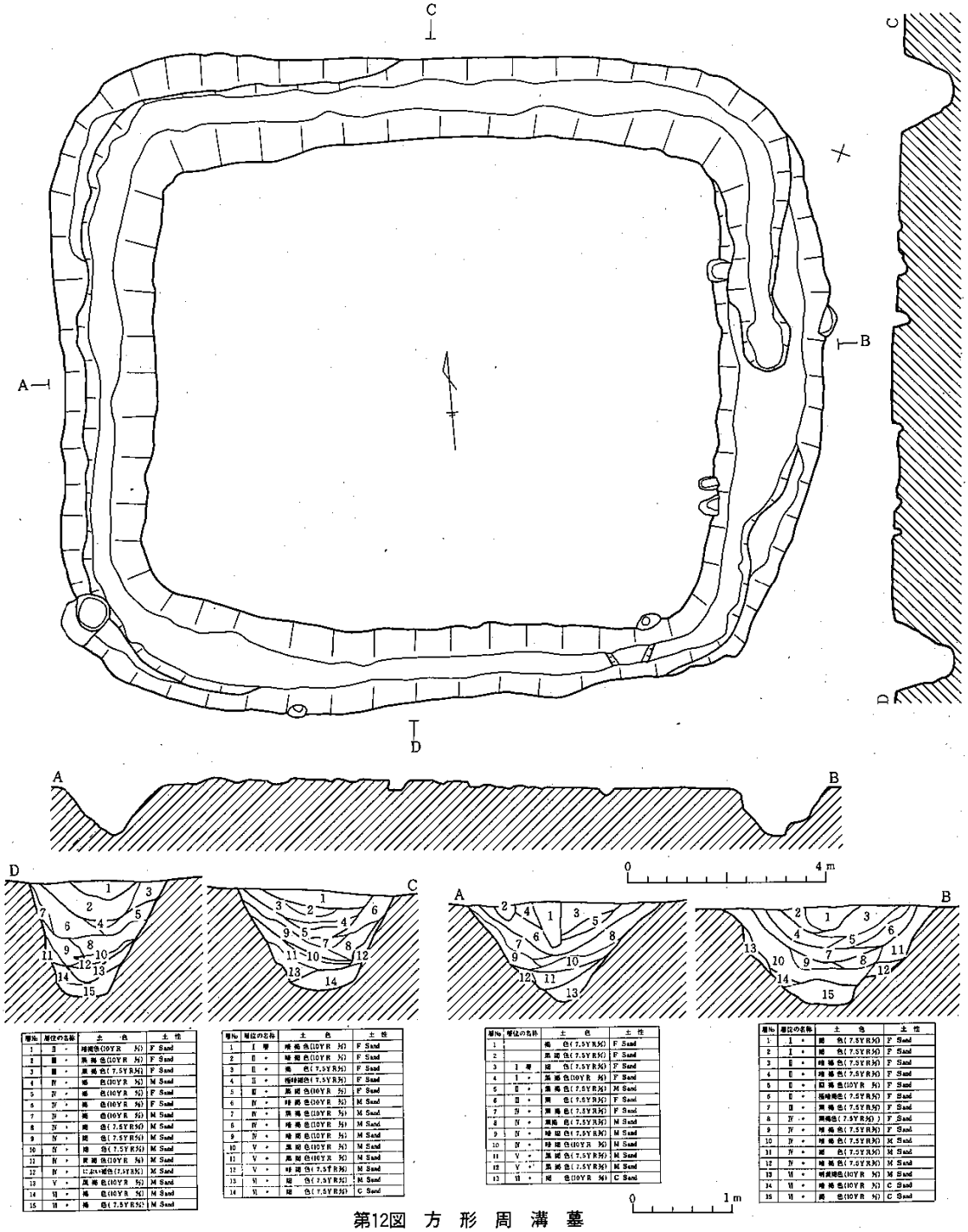
土師器　坏、高坏、壺、甕、甑がある。

坏ａ（21）：口縁部がわずかにくびれて外傾し、内面に稜がつく。体部は丸味をもち、底部は丸底である。調整は外面の口縁部から体部上半まで横ナデ、体部下半から底部にヘラケズリののちヘラミガキが、内面の口縁部から体部上半に横ナデ、体部下半から底部にナデが施され、また内外面に丹塗りがみられる。

坏ｂ（22～26）：体部から口縁部までさほど変化せず立ち上がる。口縁部は内弯気味のもの(b1－22・23)と外傾するもの（b2－24～26）とがある。体部はいずれも丸味をもち、底部は平底と丸底がある。調整は外面の口縁部に横ナデ、体部にヘラケズリ、ヘラミガキ、内面の口縁部に横ナデ･体部にナデ、ヘラナデが施されている。また、丹塗りの認められるものがみられる。

高坏（27）：脚部下半が残存する。「八」字状に反りながら開き、外面に横ナデののちヘラミガキ、内面にヘラナデ･横ナデが施されている。また内外に丹塗りがみられる。

壺ａ（28）：頚部のくびれが弱く小形である。口縁部は外傾し、体部は丸味をもつ。底部は小さく、あげ底風の平底である。体部下半の一部を欠損しているが、この部分の内面に敲打痕が認められることから、焼成後人為的に穿孔されたものと思われる。調整は内外面ともに緻密



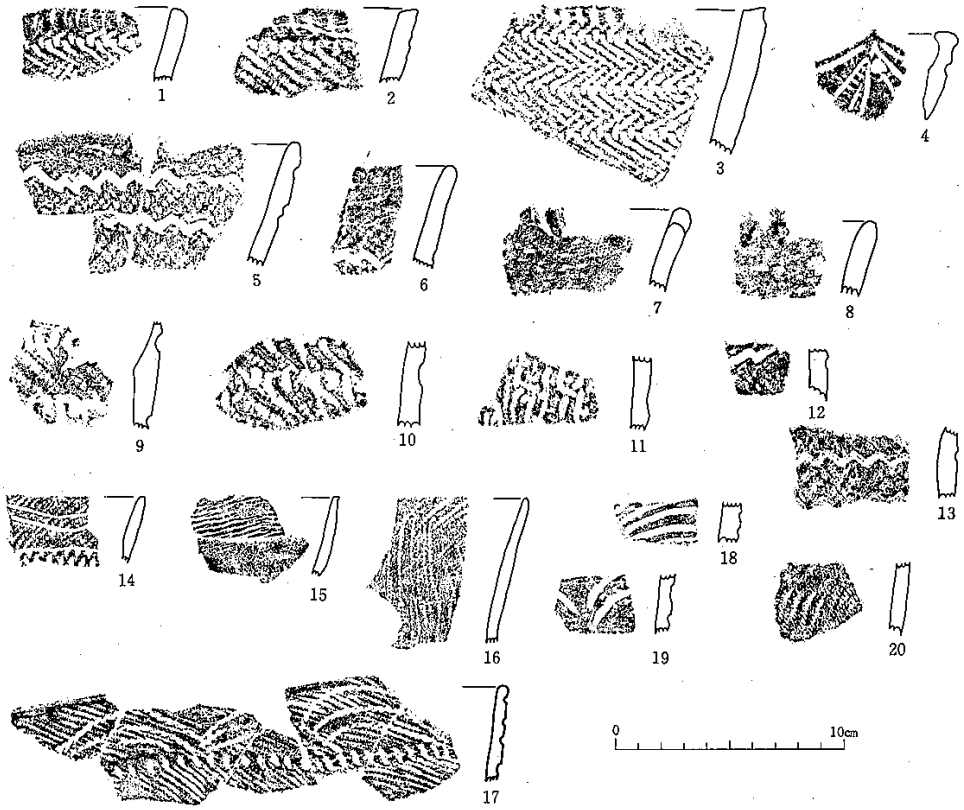
層No.	層位の名称	土色	土性
1	Ⅱ・	暗褐色(10YR 3/3)	F Sand
2	Ⅲ・	黒褐色(10YR 3/2)	F Sand
3	Ⅲ・	黒褐色(7.5YR3/4)	F Sand
4	Ⅳ・	褐 色(10YR 5/3)	M Sand
5	Ⅳ・	褐 色(10YR 5/3)	F Sand
6	Ⅳ・	褐 色(10YR 5/3)	F Sand
7	Ⅳ・	褐 色(10YR 5/3)	M Sand
8	Ⅳ・	褐 色(7.5YR5/3)	M Sand
9	Ⅳ・	褐 色(7.5YR5/3)	M Sand
10	Ⅳ・	褐 色(7.5YR5/3)	M Sand
11	Ⅳ・	黒褐色(10YR 3/2)	M Sand
12	Ⅳ・	にぶい褐色(7.5YR5/3)	M Sand
13	Ⅴ・	黒褐色(10YR 3/2)	M Sand
14	Ⅵ・	褐 色(10YR 5/3)	M Sand
15	Ⅵ・	褐 色(7.5YR5/3)	M Sand

層No.	層位の名称	土色	土性
1	Ⅰ 層	暗褐色(10YR 3/3)	F Sand
2	Ⅱ・	暗褐色(10YR 3/3)	F Sand
3	Ⅱ・	褐 色(7.5YR3/3)	F Sand
4	Ⅱ・	褐赤褐色(7.5YR3/3)	F Sand
5	Ⅲ・	黒褐色(7.5YR 3/2)	F Sand
6	Ⅳ・	暗褐色(10YR 3/3)	M Sand
7	Ⅳ・	黒褐色(10YR 3/2)	M Sand
8	Ⅳ・	暗褐色(10YR 3/3)	M Sand
9	Ⅳ・	暗褐色(10YR 3/3)	M Sand
10	Ⅳ・	暗褐色(10YR 3/3)	M Sand
11	Ⅴ・	黒褐色(10YR 3/2)	M Sand
12	Ⅴ・	暗褐色(7.5YR3/3)	M Sand
13	Ⅵ・	褐 色(7.5YR3/3)	M Sand
14	Ⅵ・	褐 色(7.5YR3/3)	C Sand

層No.	層位の名称	土色	土性
1		褐 色(7.5YR5/3)	F Sand
2		黒褐色(7.5YR3/3)	F Sand
3	Ⅰ 層	褐 色(7.5YR5/3)	F Sand
4	Ⅰ・	黒褐色(10YR 3/2)	F Sand
5	Ⅱ・	黒褐色(7.5YR3/3)	M Sand
6	Ⅲ・	黒 色(7.5YR3/2)	F Sand
7	Ⅳ・	黒褐色(7.5YR3/3)	F Sand
8	Ⅳ・	黒褐 色(7.5YR3/3)	M Sand
9	Ⅳ・	暗褐色(7.5YR3/3)	M Sand
10	Ⅳ・	暗褐色(10YR 3/3)	M Sand
11	Ⅴ・	黒褐色(7.5YR3/3)	M Sand
12	Ⅴ・	黒褐色(7.5YR3/3)	M Sand
13	Ⅵ・	褐 色(10YR 3/3)	C Sand

層No.	層位の名称	土色	土性
1	Ⅰ・	褐 色(7.5YR3/3)	F Sand
2	Ⅰ・	褐 色(7.5YR3/3)	F Sand
3	Ⅱ・	暗褐色(7.5YR3/3)	F Sand
4	Ⅱ・	暗褐色(7.5YR3/3)	F Sand
5	Ⅱ・	褐褐色(10YR 3/3)	F Sand
6	Ⅱ・	暗褐色(7.5YR3/3)	F Sand
7	Ⅱ・	黒褐色(7.5YR3/3)	F Sand
8	Ⅳ・	黒褐色(7.5YR3/3)	F Sand
9	Ⅳ・	暗褐色(7.5YR3/3)	M Sand
10	Ⅳ・	暗褐色(7.5YR3/3)	M Sand
11	Ⅳ・	褐 色(7.5YR3/3)	M Sand
12	Ⅳ・	暗褐色(7.5YR3/3)	M Sand
13	Ⅵ・	明黄褐色(10YR 3/3)	M Sand
14	Ⅵ・	暗褐色(10YR 3/3)	C Sand
15	Ⅵ・	褐 色(10YR 3/3)	C Sand

第12図　方 形 周 溝 墓



第13図　方形周溝墓出土遺物（1）

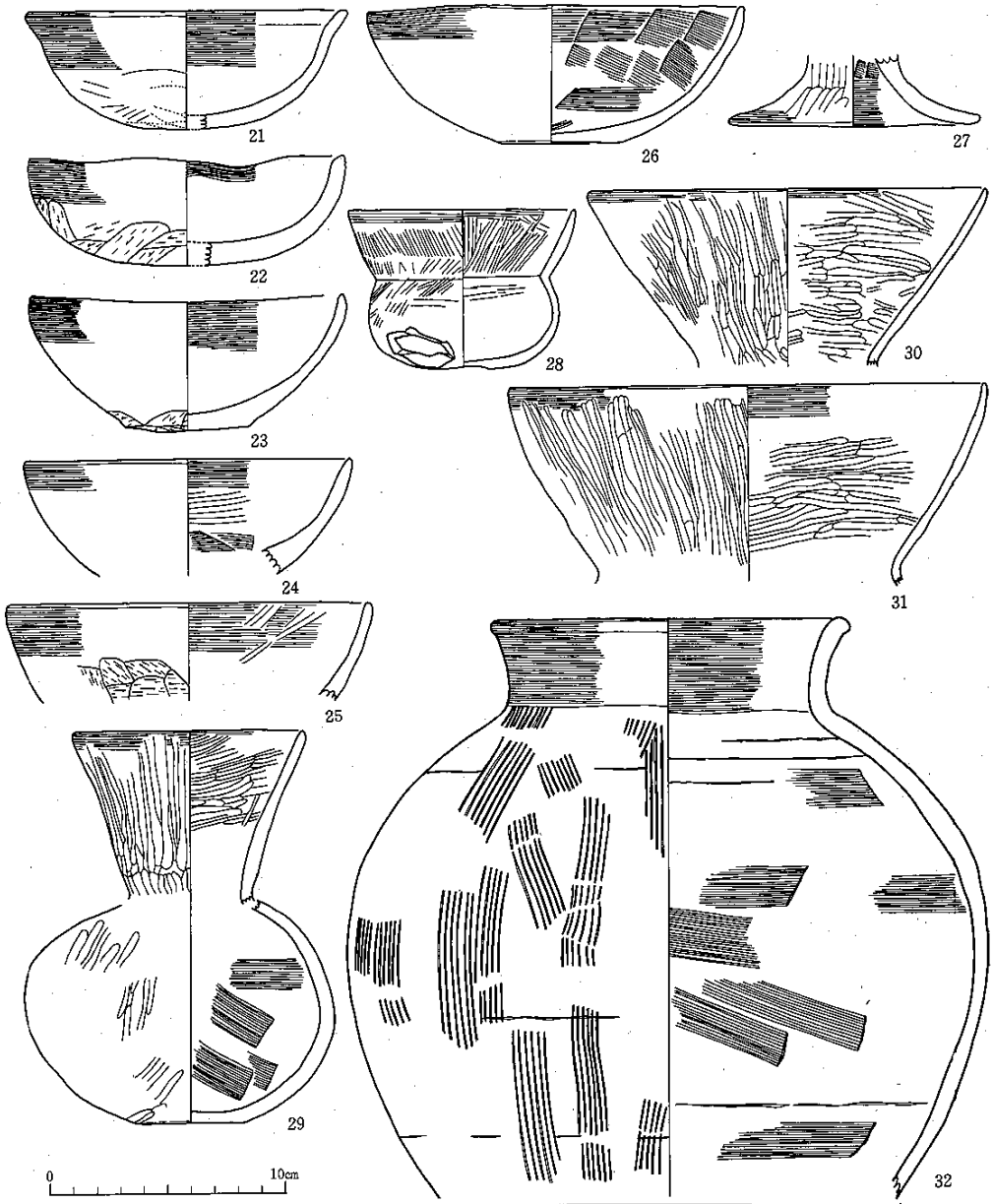
なヘラミガキが施されている。

壺b（29）：頸部が強くくびれ、口縁部は弱く外傾する。体部はゆがんだ球形を呈する。底部は平底である。外面全体と内面口頸部にヘラミガキ、内面体部にヘラナデがみられる。

壺c（30・31）：頸部が強くくびれ、口縁部が強く外傾して上半は内弯気味となる。体・底部を欠いている。口縁端部内外面に横ナデがみられ、他は緻密なヘラミガキが施されている。

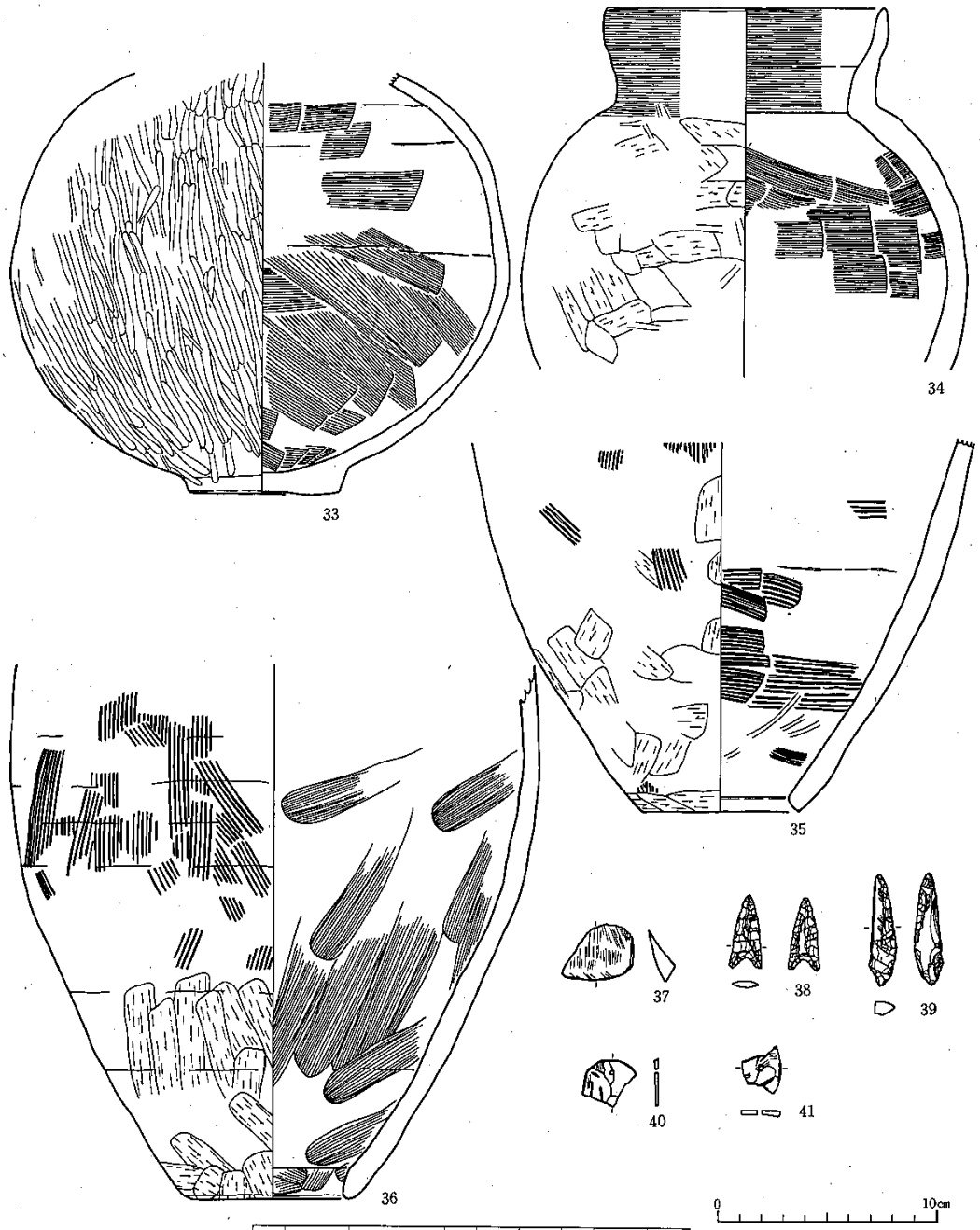
甕（32～34）：口径より器高が大きく、最大径が体部に位置する。頸部がするどくくびれ口縁部が外反あるいは外傾する。体部は球形で、底部はいくぶん下方に突き出した平底のものがある。33は内外面とも一部に丹塗りがみとめられ、底部には木葉痕がみられる。

甑（35・36）：体部下半以下が残存する。無底式の甑である。器形は長胴形を呈するものと思われ、下半は丸味をもつ。底部の内側面はそがれたような形態である。調整は外面に刷毛目ののちヘラケズリが施され、内面に刷毛目、底部内側面にナデがみられる。



番号	種別・器形		出土位置	底面調整	口径(cm)	体部径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	整録番号	分類
21	土師器	坏	方周東側あぜ埋1		13.7		5.0		36	AⅠ(ⅰ)
22	〃	〃	〃 R～S 1層埋1		13.4		4.6		45	AⅦb(ⅰ)
23	〃	〃	〃 Q～R 1層	ヘラケズリ	13.3		5.8	5.3	14	AⅦb(ⅰ)
24	〃	〃	〃 R 埋1層		13.9		(4.9)		54	AⅦb(ⅱ)
25	〃	〃	〃 〃 〃		15.6		(4.0)		128	AⅦb(ⅱ)
26	〃	〃	〃 C－1	手持ちヘラケズリ	16.1		6.0	5.0	122	AⅦb(ⅱ)
27	〃	高坏	〃 H－72－1						133	
28	〃	甕	〃 北側溝6層上		9.6	8.1	5.8	3.3	30	Ⅰ
29	〃	〃	〃 A・BE-73-4		9.9	13.0	16.6	3.5	129	Ⅱb
30	〃	〃	〃 J 埋3		17.0		(7.5)		130	Ⅱa
31	〃	〃	〃 I・J畔埋3		20.4		(8.9)		125	Ⅱa
32	〃	壺	〃 H－72 1層		15.3	27.2	(24.6)		147	AⅡa

第14図　方形周溝墓出土遺物 (2)



番号	種別・器形	出土位置	口径(cm)	体部径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	整録番号	分類
33	土師器 甕	方周 南部畔埋4		23.0	(19.3)	6.9	131	AⅡa
34	〃 〃	〃 I～J畔一1	13.1	20.5	(16.5)		123	AⅡa
35	〃 鉢	〃 埋 1			(17.1)	7.2	124	
36	〃 〃	〃 R～S一1			(24.6)	7.2	148	

第15図　方形周溝墓出土遺物 (3)

石斧（37）：第3層から磨製石斧の刃部破片が1点出土している。かすかに撚痕がみられ、先端部では斜め方向、他の部分では側縁に平行して走る。

石鏃（38）：第1層から1点出土している。無茎鏃で基部にえぐりが入る。両面に細かな調整が施されているが、片面の一部に自然面を残す。

39は破片のため種類が不明である。

石製模造品（40・41）

第1層から2点出土している。ともに破片である。41は円盤形で1孔をもつ。40は片面に縦方向の稜線がみられることから剣形と思われる。両名とも両面に擦痕がみとめられ、孔は一方から穿たれている。

3. 竪穴住居跡

〔位置･確認面〕東館地区平坦部の方形周溝墓より南側に位置し、地山面で確認された。

〔重複〕溝に切られており、また耕作による撹乱がほとんど床面まで及んでいる。

〔平面形〕5.7×5.7mのわずかにゆがんだ正方形を呈する。南北の軸はN－33°－Wを向く。

〔壁〕地山を直接壁としている。壁高は最も高いところで床面から 10cm ほどにすぎない。立ち上がりはゆるやかである。

〔床面〕ほぼ全体に貼り床が認められる。部分的に硬い面もみられるが、全体的には撹乱が激しいためか軟い。

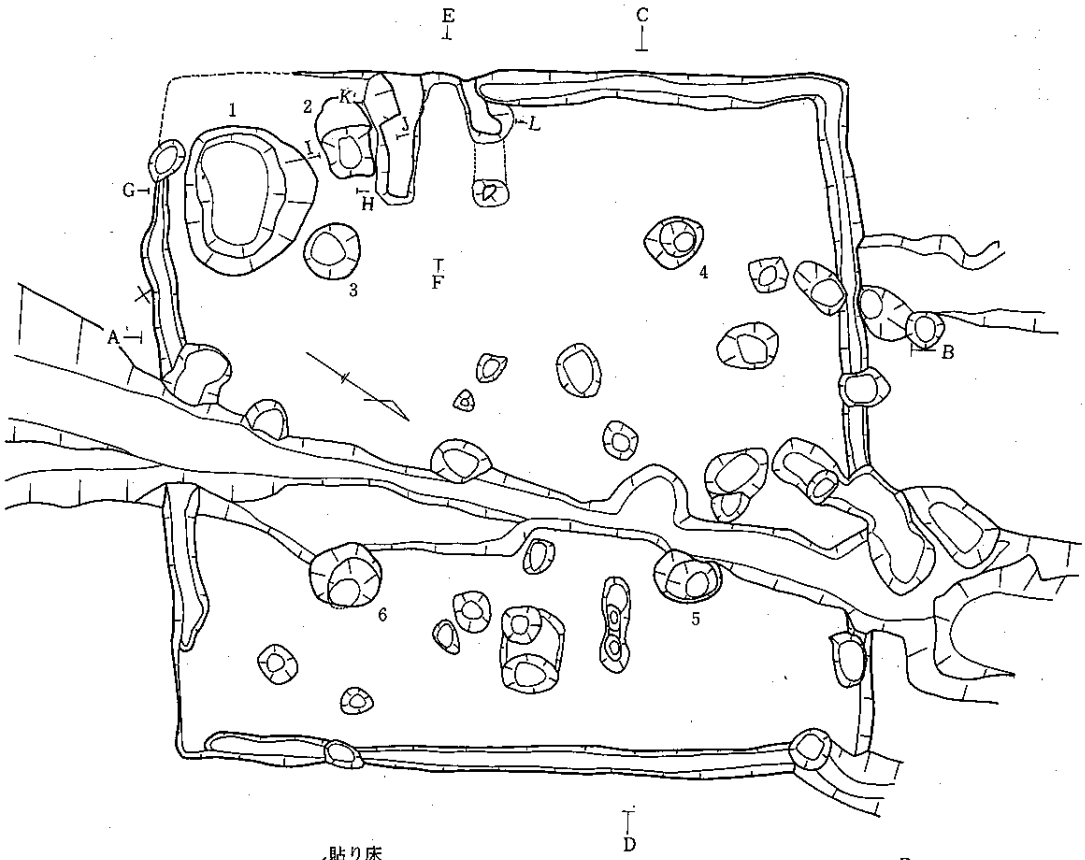
〔柱穴〕部分的に途切れるが、壁直下を巡る。断面形は「U」字形で幅は約 20cm とほぼ一定しており、深さは床面から 20～5cm である。

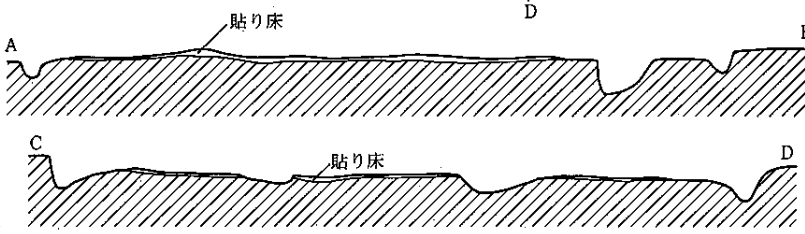
〔カマド〕西壁南よりに付設されている。煙道部は検出されなかった。燃焼部は幅 110cm、奥行 113cm で、側壁は黄色粘土を張付けて構築されている。右側壁中央は撹乱のため残存しない。
燃焼部側面は熱を受けて赤変しているが、底面は焼けた痕跡が顕著でない。カマド下には、燃焼部とほぼ同じ大きさの浅い皿状の掘り込みがみられた。

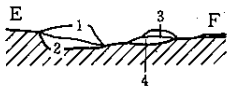
〔貯蔵穴状ピット〕カマド左側に 2 個みられる。大きさに違いはあるが、いずれも堆積土に焼土、炭化物と遺物を含む。

〔出土遺物〕床面上、貯蔵穴状ピット内から土師器･紡錘車が出土している。すべて住居に伴うものである。

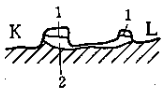
土師器　坏と甕がある。



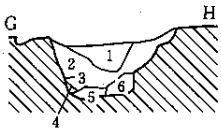


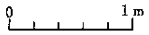


層No	土色	土性
1	褐色(10YR 4/6)	F Sand
2	褐色(10YR 4/6)	F Sand
3	にぶい褐色(10YR 5/4)	F Sand
4	赤褐色(2.5YR 4/6)	F Sand



層No	土色	土性
1	橙色(7.5YR 7/6)	F Sand
2	褐色(10YR 4/6)	F Sand

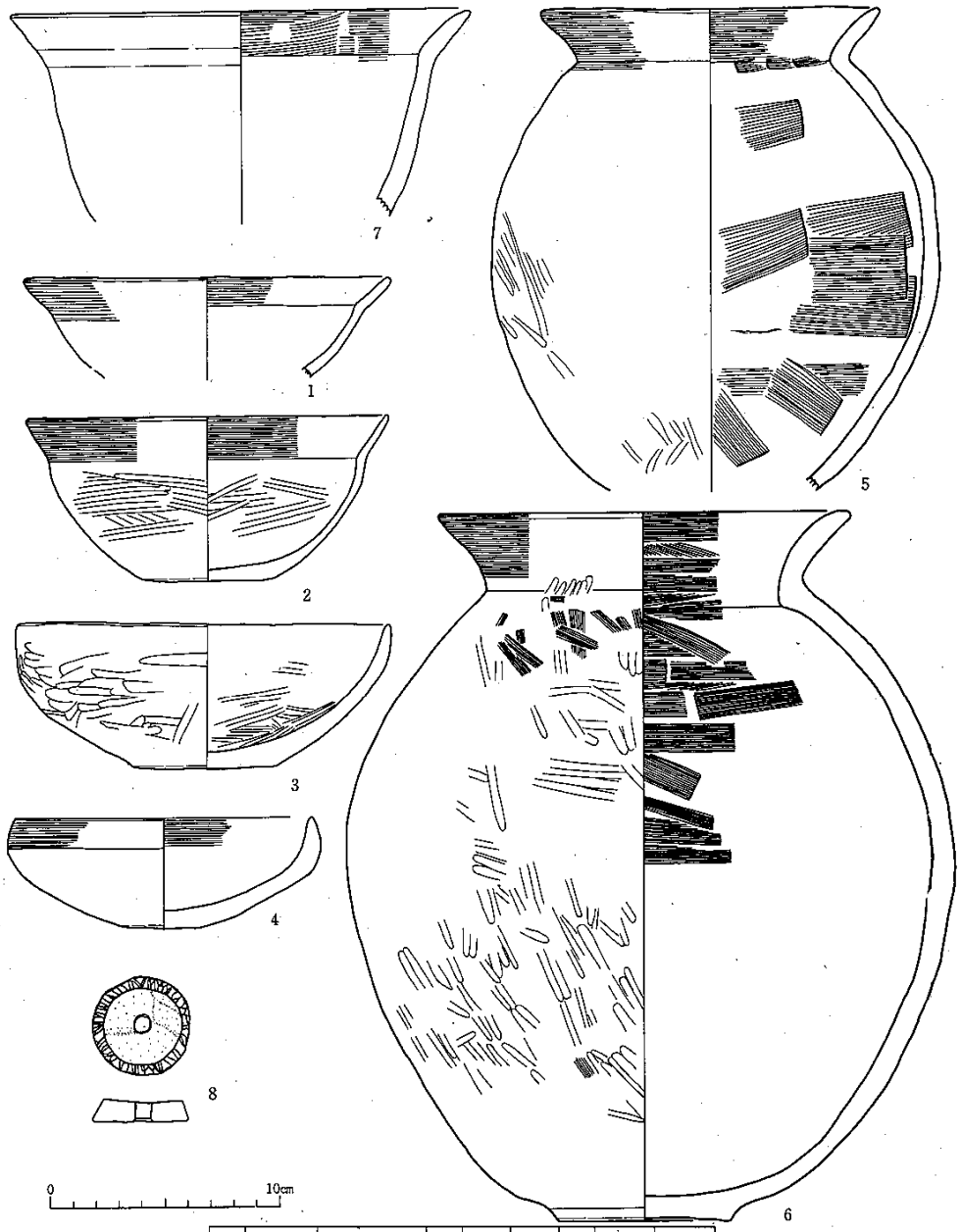




層No	土色	土性
1	褐色(7.5YR 4/6)	F Sand
2	褐色(10YR 4/6)	F Sand
3	明褐色(7.5YR 5/6)	F Sand
4	にぶい黄褐色(10YR 5/4)	F Sand
5	明褐色(7.5YR 5/6)	F Sand
6	にぶい黄褐色(10YR 5/4)	F Sand

層No	土色	土性
1	褐色(10YR 4/6)	F Sand
2	明黄褐色(10YR 6/6)	F Sand

第16図　竪穴住居跡



番号	種別・器形	出土位置	口径(cm)	体部径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	登録番号	分類
1	土師器 坏	1住 床面	16.0		(4.5)		142	A I(ii)
2	〃 〃	〃 〃	15.8		7.2	4.6	59	A I(ii)
3	〃 〃	〃 〃	16.5		6.4	6.2	63	A VI b(i)
4	〃 〃	〃 〃	13.1		4.8		37	A III(i)
5	〃 甕	〃 〃	14.9	19.6	(20.9)		132	A II b
6	〃 〃	〃 Pit1内	18.0	26.6	31.0	7.5	139	A II b
7	〃 〃	〃 床面	20.2	16.3	(9.2)		69	A III a 1

第17図　竪穴住居跡出土遺物

坏ａ（1･2）：口縁部がわずかにくびれて外傾し、内面に明瞭な稜がつく。体部はわずかに丸味をもち、底部は平底のものがある。調整は内外面とも口縁部に横ナデ、体部にヘラミガキが施され、丹塗りが認められる。

坏ｂ（4）：口縁部が屈折して直立し、外面に稜がつく。口縁端はうすくなる。体部は直線的で、底部は小さい平底である。調整は内外面にヘラミガキがみられ、また丹塗りが認められる。

坏ｃ（3）：体部から口縁部までさほど変化せずに立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。底部は平底である。調整は内外面にヘラミガキが施され、丹塗りが認められる。

甕ａ（5・6）：口径より器高が大きく、最大径が体部に位置する。口頸部は「く」字状にくびれて外反あるいは外傾する。体部は中央に最大径をもち、丸味をもって縦に長く、紡錘形を呈する。体部の調整は外面にヘラミガキ、ナデ、内面にヘラナデが施されている。

甕**ｂ**（7）：口径が器高より大きく最大径が口縁部にあり、体部最大径は上端にある。体部内外面にヘラミガキ、丹塗りがみられる。

紡錘車（8）：床面上から1点出土している。粘板岩製で上部を欠く、平面形は円形で、断面形は舌形と思われ、中央に孔がある。側面と下面に削りの痕跡が明瞭に認められる。

4. ピット群

第1地区の平坦部から65個のピットが検出されている。これらのピットは平面形･規模とも多様であり、また、堀り方と柱痕跡とが区別できたものもあるが、いずれもまとまりがなく、性格は不明である。

ピット1出土遺物

土師器坏（1・2）：製作に際しロクロを使用している。体部から口縁部まで丸味をもって立ち上がり、底部に回転糸切り痕を残九ロクロは有回転である。内面にヘラミガキ･黒色処理が施されている。

ピット2出土遺物

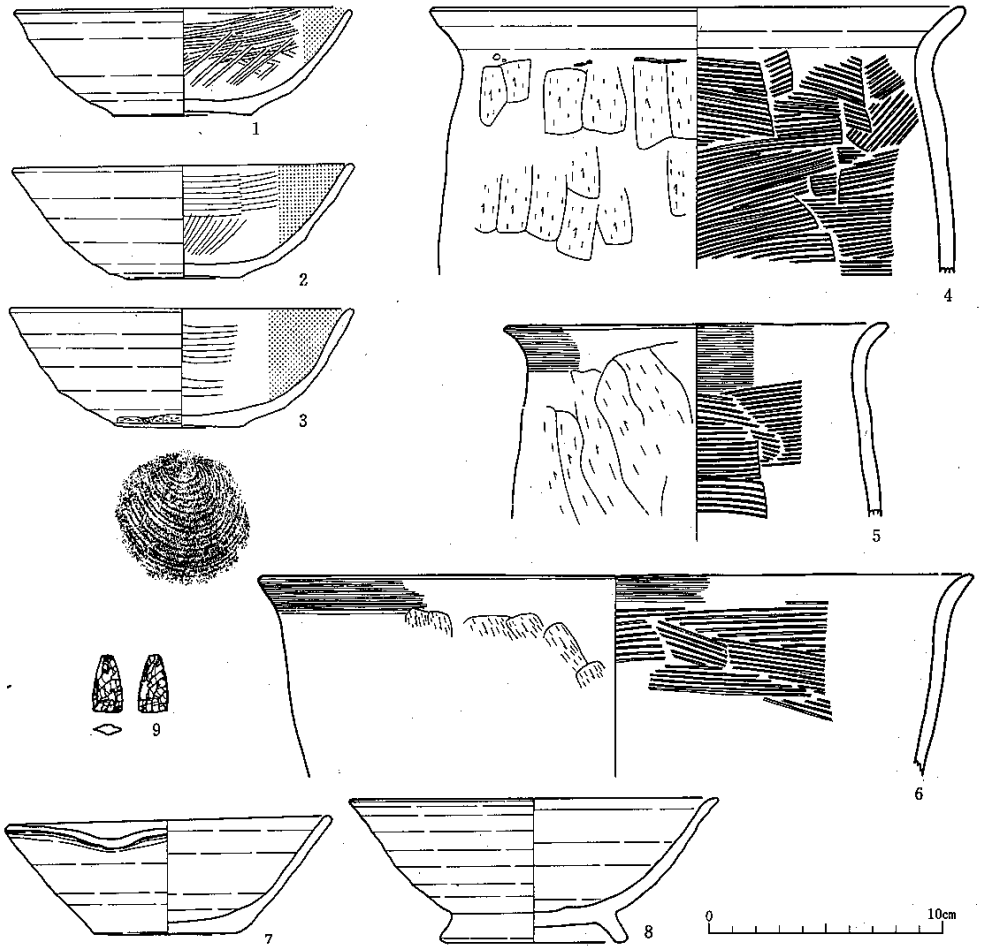
土師器坏（3）：製作に際しロクロを使用している。体部から口縁部まで丸味をもって立ち上がる。底部に回転糸切り痕を残すが、体部下端には手持ちヘラケズリが加えられている。内面にヘラミガキ･黒色処理が施されている。ロクロは右回転である。

ピット4出土遺物

土師器

甕ａ（6）：口径より器高が小さいものである。最大径は口縁部にあり、体部最大径は上端に位置する。調整は口縁部内外面に横ナデ、体部外面にヘラケズリ、内面に刷毛目が施されている。

甕b（4・5）：口径より器高が大きいものである。最大径は口縁部に位置する。口頸部は



番号	種別・器高	出土位置	口径(cm)	体部径(cm)	器高(cm)	底部(cm)	登録番号	分類
1	土師器　坏	Pit1　埋1	14.5		4.7	6.0	27	B Ⅰ b(i)
2	〃　〃	〃　〃	14.7		4.9	5.0	26	B Ⅰ b(i)
3	〃　〃	Pit2　埋1	14.8		5.1	5.6	31	B Ⅰ a(i)
4	〃　甕	Pit4　埋2	23.0		(11.5)		64	A Ⅰ
5	〃　〃	〃　〃	16.5		(8.3)		67	A Ⅰ
6	〃　〃	〃　〃	30.7		(8.7)		68	A Ⅲ a
7	赤焼土器　坏	〃　〃	14.0		5.0		29	
8	〃　高台付坏	〃　〃	15.8		6.2	7.1	34	

第18図　ピット出土遺物

ゆるやかに外傾あるいは外反する。調整は口縁内外面に横ナデ、体部外面にヘラケズリ、内面に刷毛目が施されている。

赤焼土器

坏（7）：製作に際しロクロを使用している。体部から口縁部まで直線的に立ちあがり、口縁部は一部が外側につまみ出され片口状を呈する。底部に回転糸切り痕を残し、再調整は認め

られない。ロクロは右回転である。

高台付坏（8）：坏部は体部が丸味をもって立ち上がり口縁部で外反気味となる。高台は強く開き下端は丸くおさまる。坏底部に回転糸切り痕を残す。ロクロは右回転である。

石鏃（9）：第1層から1点出土している。先端を欠く。基部は平らである。両面に細かな調整が施されている。

5. 堀

堀は第1地区南端で1本(第1堀)第1・第2地区間の沢で4本（第2～第5堀）第2地区で1本（第6堀）の合わせて6本検出されている。

〈第1堀〉

第1地区の南端、丘陵裾部に位置する。地形に沿って東西に1延び、幅約4.2m、深さ約50cmである。遺物は出土していない。

〈第2・第3堀〉

沢の南半で検出された。第2堀は第3堀より南にあり、第1地区北端と接している。第2・3堀とも東西に延びる。

両堀とも堀り下げるに従い湧水が激しくなり、第2堀は南壁を、第3堀は北壁を確認して調査を中止した。そのため規模は不明である。また、第2堀の北壁、第3堀の南壁を確認していをいことから、両者が1本の堀である可能性も残る。

第2堀出土遺物

縄文土器

1：深鉢形土器である。平縁で小さな2個1対の突起がつく。口縁部は狭く、4条の沈線がめぐり、その間に刻目が施されている。体部には斜行縄文（ＬＲ）がみられる。晩期大洞C_2式と思われる。

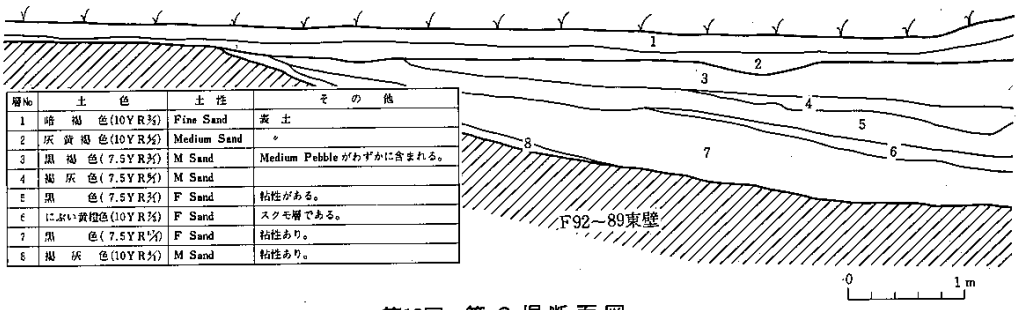
弥生土器

2：体部破片である。斜行縄文（ＬＲ）を地文とし、磨消縄文文様がみられる。大泉式と思われる。

土師器

坏ａ（3）：口縁部が屈折してほぼ直立する。外面にかすかな稜がつく。体部はわずかに丸味をもち、底部は丸底である。調整は口縁部内外面に横ナデ、体部内外面にヘラミガキが施されており、内面の一部には丹塗りが認められる。

坏ｂ（4）：製作にロクロを使用しており、体部から口縁部まで丸味をもって外傾している。底部の切り離しは回転糸切り技法であり、外面に再調整はみられない。内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。ロクロは右回転である。



層No	土色	土性	その他
1	暗褐色(10YR3/3)	Fine Sand	表土
2	灰黄褐色(10YR5/2)	Medium Sand	〃
3	黒褐色(7.5YR3/1)	M Sand	Medium Pebbleがわずかに含まれる。
4	褐灰色(7.5YR5/1)	M Sand	
5	黒色(7.5YR2/1)	F Sand	粘性がある。
6	にぶい黄橙色(10YR7/3)	F Sand	スクモ層である。
7	黒色(7.5YR1/1)	F Sand	粘性あり。
8	褐灰色(10YR5/1)	M Sand	粘性あり。

第19図　第２堀断面図

須恵器

坏（5）：体部から口縁部まで直線的に立ち上がる。内外面ともロクロ調整による凹凸が顕著である。底部は回転糸切り技法によって切り離されており、ロクロは右回転である。

甕（6）：最大径は体部に位置する。口縁部は外反し端部は外面が横につまみ出され、内面に段がつく。頚部は丸味をもつ。体部上半は丸く、等間かくに4条の沈線が引かれている。内外面ともロクロ調整痕が認められるが、体部外面にはロクロ調整前の平行叩き目が観察される。

赤焼土器

坏（7）：体部から口縁部まで丸味をもって立ち上がる。底部は回転糸切り技法によって切り離されており、再調整はみられない。ロクロは右回転である

瓦(11～15)：堆積土第1層から2点、第2層から3点、第4層から1点、計6点出土している。いずれも平瓦の破片で、凸面に縄叩き目、凹面に布目がみられる。第22図11・12は縄目の条の間隔が開いており、凹面は軽くナデ調整が施されている。

石器

石箆（8）：第4層から1点出土している。基部は細く先端に向かって広がる。調整は背面全体に施されており、腹面には縁辺にのみ認められる。基部側面に自然面を残す。

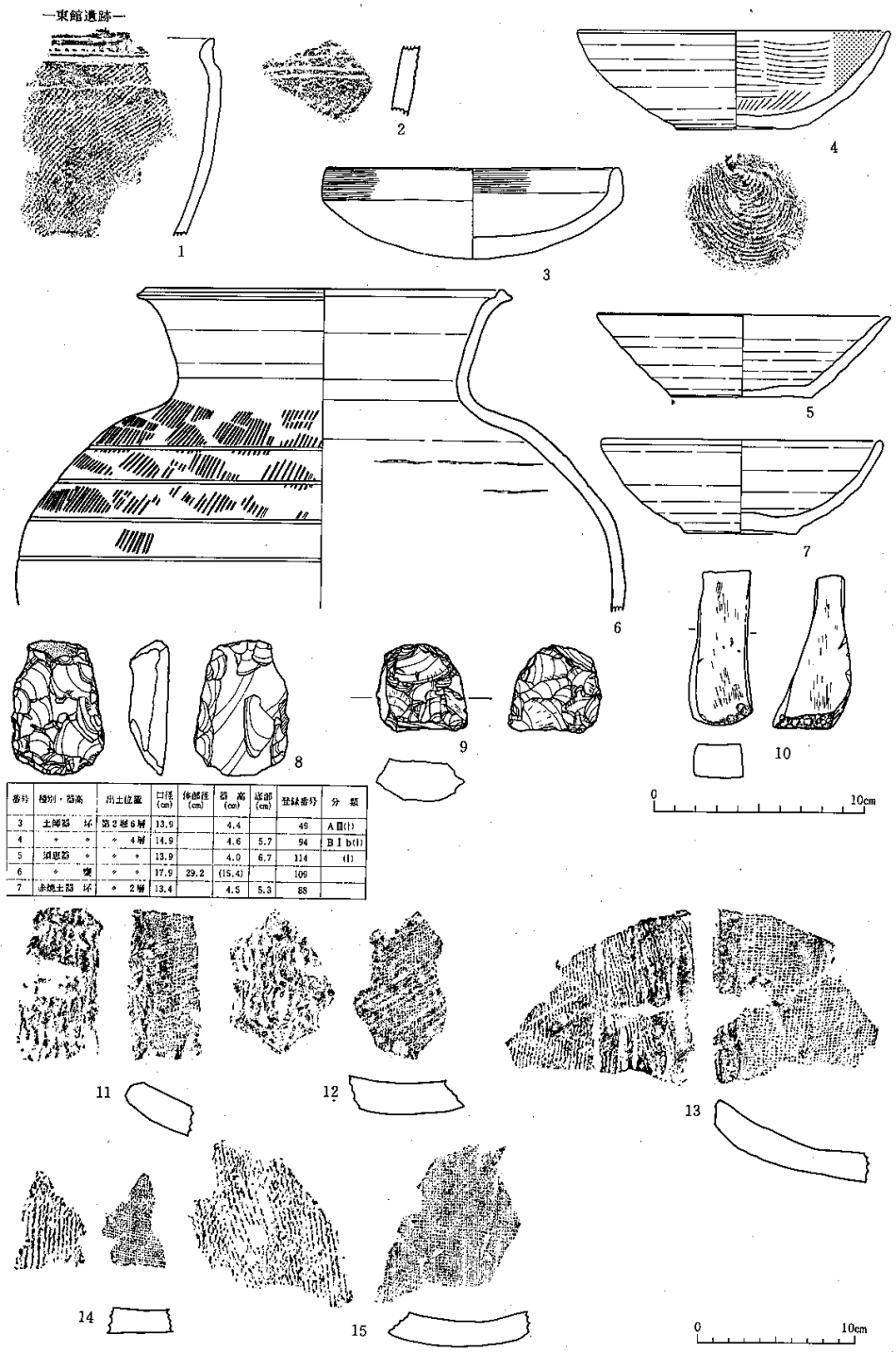
石核（9）：第2層から1点出土している。黒曜石製の石核である。各面に多方向からの剥離痕がみられる。

砥石（10）：第1層から1点出土している。棒状を呈し、磨面は4面に診るれるが、主な使用面は表裏面である。磨面にはかすかに擦痕が認められ、先端には敲打痕が残る。

第3堀出土遺物

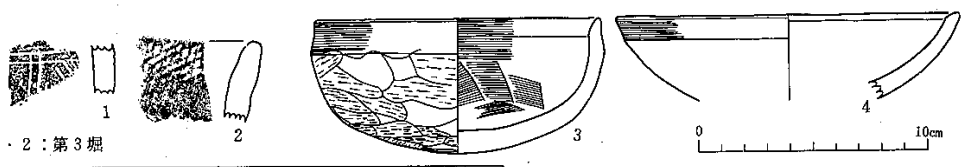
縄文土器

1：体部破片である。半截竹管による「T」字状に直交する沈線と、その交点近くから斜めに沈線が引かれている。前期大木6式と思われる。



番号	種別・器高	出土位置	口径 (cm)	体部径 (cm)	器高 (cm)	底部 (cm)	登録番号	分類
3	土師器 坏	第2層6層	13.9		4.4		49	A Ⅲ(1)
4	〃 〃	〃 4層	14.9		4.6	5.7	94	B Ⅰ b(1)
5	須恵器 〃	〃 〃	13.9		4.0	6.7	114	(1)
6	〃 甕	〃 〃	17.9	29.2	(15.4)		109	
7	赤焼土器 坏	〃 2層	13.4		4.5	5.3	88	

第20図　第２堀出土遺物



1・2：第３堀

番号	種別・器形	出土位置	口径(cm)	体部径(cm)	器高(cm)	底部(cm)	登録番号	分類
3	土師器 坏	第５堀	12.5		5.9		51	AⅡa
4	〃 〃	〃	15.0		(3.7)		57	AⅡb

第21図　第３・５堀出土遺物

弥生土器

2：口縁部破片である。撚糸文（R）がみられる。時期は不明である。

〈第4堀〉

沢の北半で検出された。東西に延びており、幅約3m、深さ約1mである。出土遺物はない。

〈第5堀〉

沢の北端で検出された。東西に延びており、幅約7m、深さ約1.1mである。

〈第5堀出土遺物〉

〔土師器〕

坏a（3）：口縁部は短くわずかに屈折するものである。口縁部はほぼ直立し内面に稜がつき、また外面にも強く横ナデされることによって生じたかすかな稜が認められる。体部は丸味をもち、底部は丸底である。調整は、口縁部内外面に横ナデ、体部以下の外面にヘラケズリ、内面にヘラナデが施されている。

坏b（4）：器形は3と近似するが、口縁部は外傾している。底部を欠く。調整は口縁部内外面に横ナデ、体部内外面にヘラミガキが施され、内面に丹塗りが認められる。

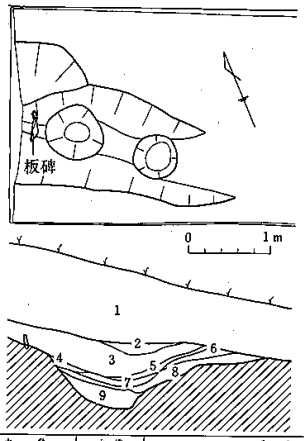
6. 貯水施設

東館地区南部の東を向く斜面（F・G－24・25）に位置し、地山面で確認された。調査区内の斜面上方から幅2.5m程の溝状の落ち込みが傾斜に沿って西から東へ5m程つづく。落ち込み内の西端は底面幅が狭く、この部分に板碑を横に下部を底面下にくい込ませて堰状の施設としている。東に向かって底面幅は広がり、途中には底面からさらに径1.5、深さ1mほどの円形の落ち込みが2ヶ所にみられる。

出土遺物　遺構の構築に使用された板碑と、堆積土から出土した土師器、須恵器、赤焼土器瓦がある。図示できなかったものは破片集計表を作成している。

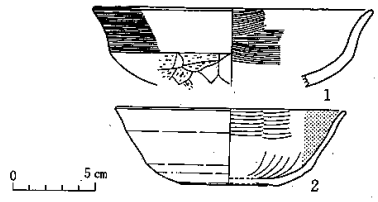
土師器

坏：1は口縁部がゆるやかに屈曲して外反し、体部は丸味をもつ。底部を欠く。調整は外面の口縁部に横ナデ、体部にヘラケズリ、内面にヘラミガキが施されている。また内外面に丹塗

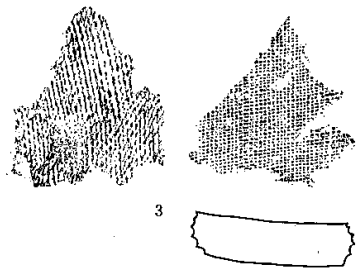


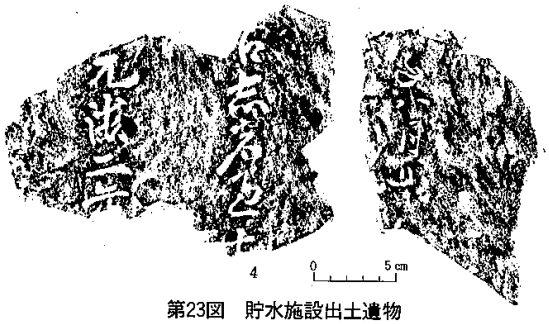
層No.	土色	土性	その他	
1	褐色(10YR5/4)	F Sand	Fine Pebbleを多量に含む。	貯水施設埋積土
2	にぶい黄橙色(10YR6/4)	M Sand		貯水施設埋積土
3	暗褐色(10YR3/4)	F Sand	Medium Pebbleを含む。	貯水施設埋積土
4	黄褐色(10YR5/6)	M Sand	礫(大きな)を含む。地山の土をしいたものが崩壊したもの。	貯水施設埋積土
5	黒褐色(10YR3/2)	M Sand	Coarse Sandを含む。	貯水施設埋積土
6	にぶい黄褐色(10YR5/4)	M Sand	〃	貯水施設埋積土
7	灰黄褐色(10YR4/2)	Sand	かなり粘性がある。	貯水施設埋積土
8	にぶい黄褐色(10YR5/4)	M Sand	Medium Pebble少量含む。Fine Pebbleまく含む。	貯水施設埋積土
9	暗褐色(10YR3/4)	F Sand	粘性あり。Fine Pebbleわずかに含む。	貯水施設埋積土

第22図　貯　水　施　設



番号	種別・器形	出土位置	口径(cm)	体部径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	登録番号	分類
1	土師器　坏	堆積土	17.0		(4.9)		6	AⅣ
2	〃　〃	〃	14.0		4.7	5.7	104	BⅠb





第23図　貯水施設出土遺物

りが認められる。

2は製作にロクロを使用しており、底部は回転糸切り技法で切り離されている。内面はヘラミガキ、黒色処理されている。

瓦

平瓦の破片である。凸面に縄叩き目,凹面に布目がみられる。

〔板碑〕

破片である。元徳二年（1330年）と記年されている。

7. 溝

第1地区の平坦部から10本の溝が検出されている。遺構に伴う遺物はなく、いずれの堆積土も土性が表土とごく近似したものであり、新しい時期のものと思われる。性格は不明である。出土遺物は各溝の堆積土から土師器、須恵器が出土している。いずれも細片で詳細は不明である。

8. 東舘地区表土および層位不明の遺物

〔縄文土器〕いずれも体部の小破片である。1は胎土に繊維を含み、ループ文がみられる。2は2条の沈線が描かれており、下位の沈線は押し引きによるものである。3は斜行縄文（ＬＲ）を地文として鋸歯状の沈線が施文されている。これらの所属時期は1が前期初頭・2が早期大寺式、3が前期中葉と思われる。

〔弥生土器〕4・5は口縁部破片である。平縁であるが4には小突起がみられる。口縁部に横走する数条の沈線がみられる。6は体部破片である。弧状の沈線がみられる。これらの所属時期は大泉式と思われる。

〔土師器〕

坏ａ（7）：口縁部がくびれて外傾し、内面に稜がつく。体部は丸く底部は欠損している。調整は口縁部内外面に横ナデ、体部外面にヘラケズリののちヘラミガキ、内面にナデが施されている。内外面とも丹塗りが認められる。

坏ｂ（10）：口縁部は屈折し、反り気味に直立する。先端に向かってうすくなる。外面には明瞭な稜がつく。体部上半は直線的である。体部下半以下を欠く。調整は口縁部内外面に横ナデ、体部内外面にヘラミガキが施されている。内面には丹塗りの痕跡が認められる。

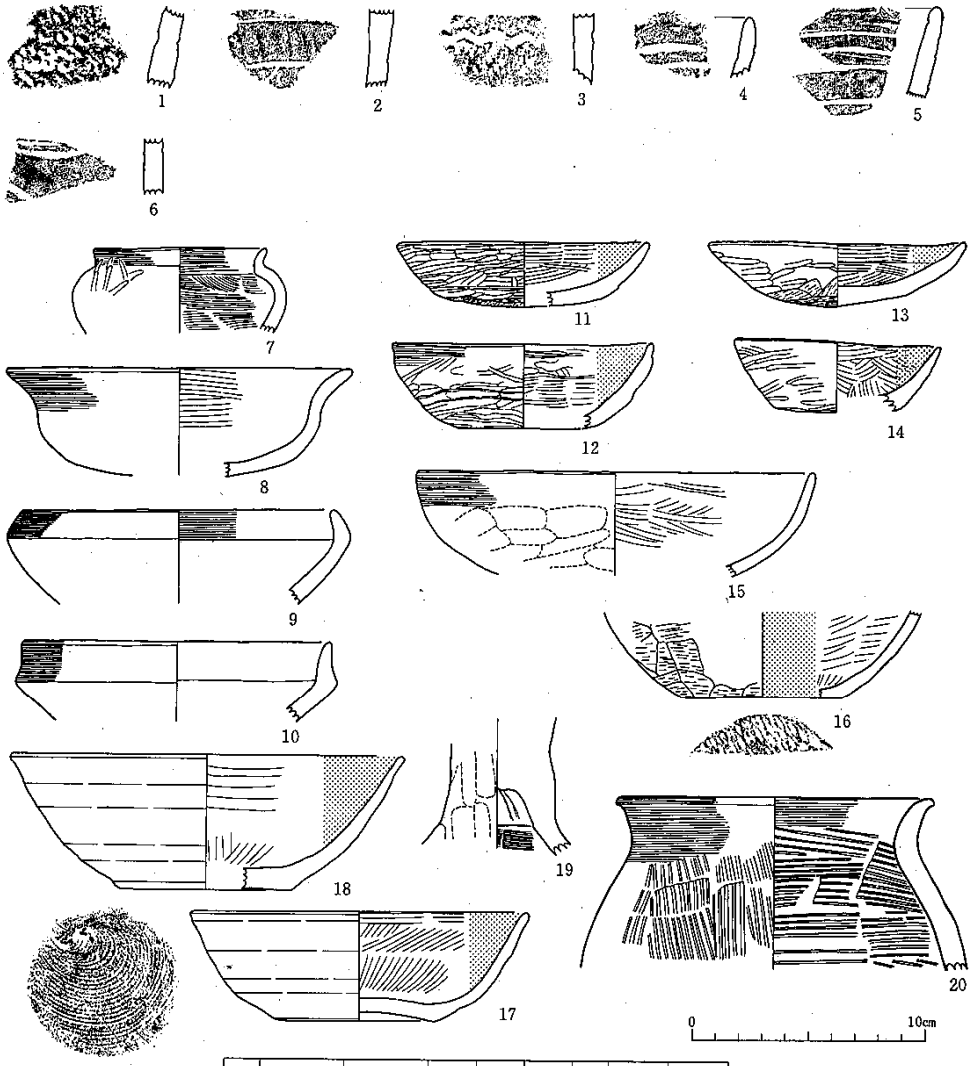
坏ｃ（9）：口縁部が屈折して内弯し、先端はうすくなる。口縁部の外面には稜がつく。体部はわずかに丸味をもつ。調整は口縁部内外面に横ナデ、体部内外面にヘラミガキが施されている。また内外面とも丹塗り認められる。

坏ｄ（8）：口縁部がゆるやかに屈曲して外反し、内外面とも稜は認められない。体部は丸味をもち、底部を欠く。調整は口縁部内外面に横ナデ、体部内外面にヘラミガキが施されており、また、内外面とも丹塗り認められる。

坏ｅ（15）：体部から口縁部まで丸味をもって立ち上がる。底部を欠く。調整は口縁部外面に横ナデがみられるほかは内外ともヘラミガキか施され、丹塗り認められる。

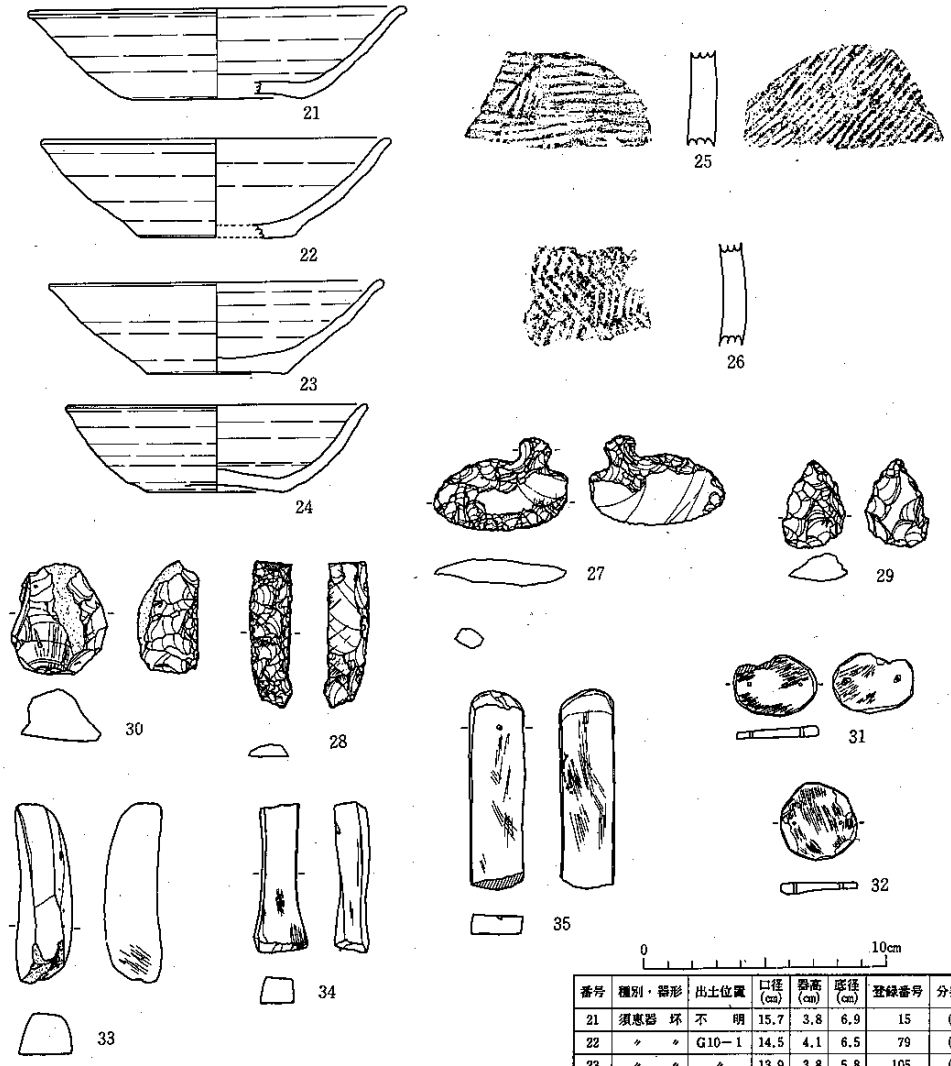
坏ｆ（16）：口縁部を欠き体部はわずかに丸味をもつ。底部にムシロ状圧痕が認められる。

坏g（17・18）：製作に際しロクロを使用しているものである。体部から口縁部までわずかに丸味をもって立ち上がり、口縁端が外反気味のものもある。底部は回転糸切り技法によって



番号	種別・器形	出土位置	口径 (cm)	体部径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	登録番号	分類
7	土師器　坏	G70－1	7.5		(3.5)		127	AⅠ(i)
8	〃　〃	E72～75 1層	15.0		(4.7)		52	AⅣ
9	〃　〃	不　明	13.5		(4.0)		141	AⅢ(ii)
10	〃　〃	F70　1層	13.3		(3.5)		48	AⅢ(i)
11	〃　〃	D－3	10.9		(2.8)		121	AⅤ
12	〃　〃	〃	11.3		(3.7)		134	AⅥ
13	〃　〃	〃	11.0		2.7		110	AⅦa(ii)
14	〃　〃	〃	8.8		(3.0)		98	AⅦa(ii)
15	〃　〃	F54－1	17.1		(4.5)		47	AⅦb(ii)
16	〃　〃	不　明	(13.6)		(3.7)	7.0	143	AⅧ
17	〃　〃	D－20－1	14.7		4.7	6.7	33	BⅠb(i)
18	〃　〃	G10－1	17.0		5.8	7.4	73	BⅠb
19	〃　高坏	E71－1					135	
20	〃　甕	D20－1	13.5		(7.4)		75	AⅡb

第24図　表土および層位不明の遺物 (1)



番号	種別・器形	出土位置	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	登録番号	分類
21	須恵器　坏	不　明	15.7	3.8	6.9	15	(1)
22	〃　〃	G10－1	14.5	4.1	6.5	79	(1)
23	〃　〃	〃	13.9	3.8	5.8	105	(1)
24	〃　〃	不　明	12.4	3.6	5.4	16	(1)

第25図　表土および層位不明の遺物 (2)

切り離されており、再調整はみられない。内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。ロクロは右回転である。

高坏（19）：脚部上半の破片である。柱状部は短く、裾部は大きく開くものと思われる。外面にはヘラミガキ、内面柱状部にシボリ目、裾部にヘラナデが施されている。

壺（20）：口径より器高が大きく、最大径が体部に位置するものである。口頸部はゆるやかに立ち上がり外反する。先端はうすくなる。体部は紡錘形を呈するものと思われる。調整は口縁部内外面に横ナデ、体部内外面に刷毛目が施されている。

〔須恵器〕

坏（21～24）：体部から口縁部まで直線的に立ち上がる。口縁端部が外反気味のものもある。底部は回転糸切り技法によって切り離されており、再調整は認められない。

甕（25・26）：体部破片である。

〔中世陶器〕

擂鉢の破片が3点出土している。外面にナデがみられ、内面はすりへっている。筋目はない。

〔瓦〕平瓦の小破片が4点ある。いずれも凸面に縄叩き目、凹面に布目がみられる。

〔石器品〕

石匙：28は基部を欠くが石匙と思われる。縦長剥片を使用している。背面は全体に細かな調整が施されており、腹面の調整は荒い。27は縦長剥片を使用し、バルブ側にえぐりを入れるつまみとしている。調整は背面縁辺とつまみの部分に、腹面はつまみの部分に加えられている。

不定形石器(29)：逆三角形を呈する。両面に荒い調整施され、厚い。

石核（30）：黒曜石製の石核である。剥離は一方の面と側面で行われ、他方の面は自然面を残す。

砥石：35は短柵形を呈する。磨面は2面あり、擦痕がみとめられる。片面の基部近くに小さなくぼみ（盲孔）がみられる。34は断面四角形の棒状である。磨面は4面ある。33は片面がふくらんで舟底状を呈している。磨面は4面にあるが、主な使用面は1面である。基部に自然面を残す。

石製模造品（31・32）：2孔をもつ有孔円盤である。平面形は楕円形と円形がある。孔は片側から穿たれている。両面に製作の際の擦痕がみとめられる。

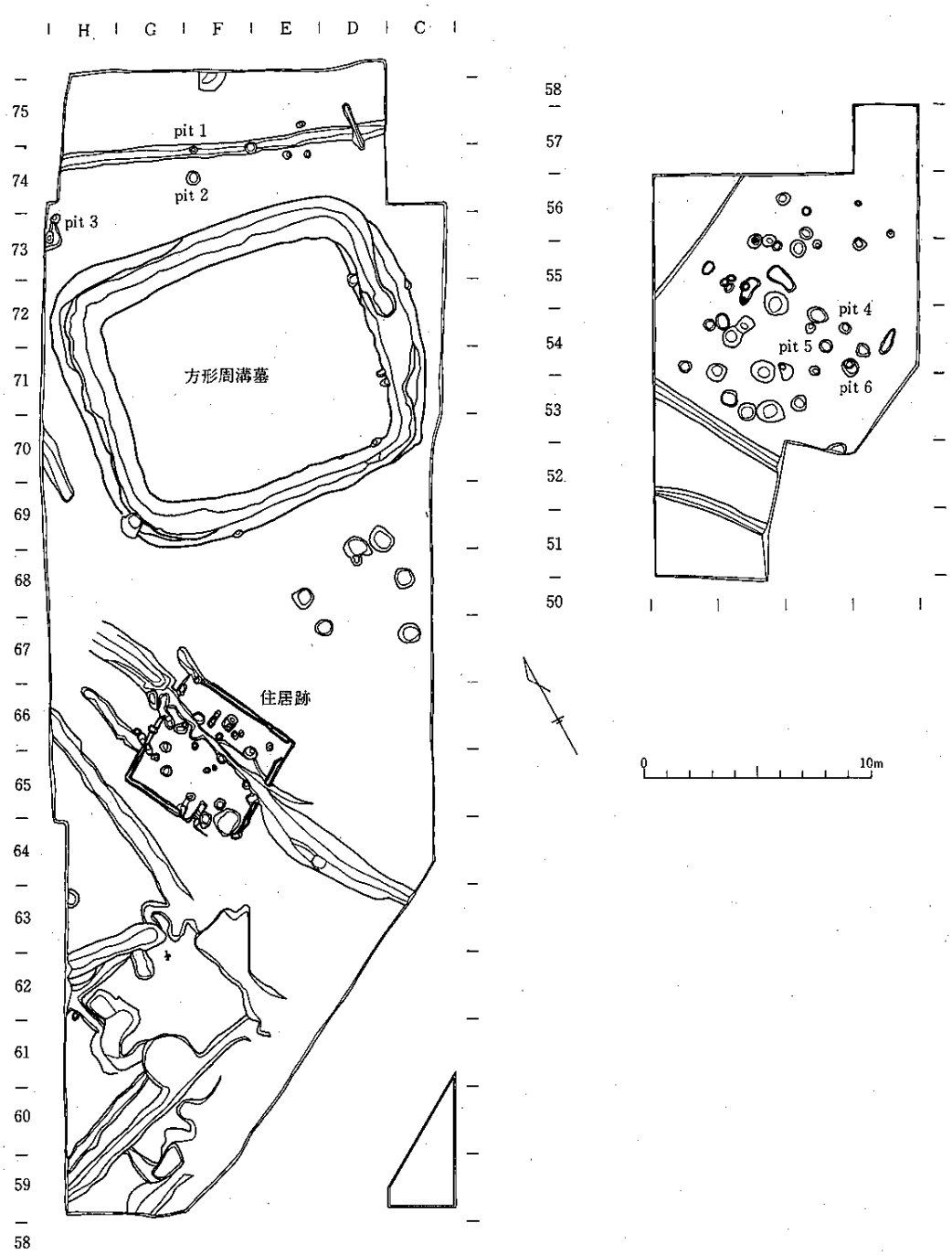
9. 筒ノ池地区表土出土の遺物

土師器坏－体部の段･沈線の有無によって3種類（ａ・ｂ・ｃ）に分かれる。

a（13・14）：体部から口縁部までわずかにふくらみをもって立ち上がるものである。底部は平底と丸底とがある。器面調整は、外面体部から口縁部までヘラミガキ、底部にヘラケズリがみられる。内面はヘラミガキ･黒色処理が施されているが、14では黒色処理の痕跡が一部にのみ認められ、再酸化を受けたものと思われる。

b（11）：体部に軽い段のづくものである。段から上は外傾し、底部は丸底である。調整は外面、段から上にヘラミガキ、下にヘラケズリ、内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。

c（12）：体部に沈線の巡るものである。体部から口縁部まで丸味をもって外傾し、口縁部でわずかにくびれる。調整は、外面口縁端に横ナデを残し、他は内外ともヘラミガキされ、内面は黒色処理が施されている。



第26図　東館地区遺構配置図

Ⅳ 考　　察

1. 出土土器の分類

本遺跡出土の土器には縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、赤焼土器、中世陶器がある。このうち、縄文土器、弥生土器、中世陶器については前項ですでに述べているので、ここでは除外する。

土師器

器種は坏・高坏・高台付坏・壺・甕・甑がある。数量は坏が最も多く、これに次ぐ甕とを合わせると土師器の大半を占め、高坏・高台付坏・甑はごくわずかである。

坏

坏には製作に際しロクロを使用していないもの（A類）と、使用しているもの（B類）とがあり、さらに前者は器形によって、後者は器形調整によって分類され、第1表のように構成される。

Ａ類　製作にロクロを使用していないもの。

ＡⅠ類：口縁部がくびれて外傾し、内面に稜がづくものである。体部上半は内弯するもの（ｉ）と外傾するもの（ⅱ）とがみられる。底部形態は丸底のものがある。

器面調整－口縁部は内外面とも横ナデ、体部は外面にヘラミガキ、内面にナデあるいはヘラミガキが施され、内外面とも丹塗りが認められる。

ＡⅡ類：口縁部が短く屈折し、内外面に稜がつくものである。稜はわずかに認められる。体部上半は内弯気味のもの（ｉ）と外傾するもの（ⅱ）とがみられる。底部は丸底のものがある。

器面調整－口縁部は外面に横ナデ、内面に横ナデあるいはヘラミガキ、体部は外面にヘラケズリあるいはヘラミガキ、内面にヘラナデ･ヘラミガキが施され丹塗りのみられるものもある。

ＡⅢ類：口縁部が屈折し、外面に稜のつくものである。口縁部は直立するもの（ｉ）と内傾するもの（ⅱ）とがみられる。底部は丸底と平底とがある。

器面調整－内外面とも口縁部に横ナデ、体部にヘラミガキが施され、丹塗りのみとめられる、ものが多い。

ＡⅣ類：口縁部がゆるやかに屈折して外反するものである。稜はつかない。体部は丸味をもつ。底部形態は不明である。

器面調整－外面は口縁部に横ナデ、体部にヘラケズリあるいは刷毛目・ヘラケズリ、内面にヘラミガキが施され、内外面とも丹塗りがみられる。

ＡⅤ類：体部に段がつくものである。段はわずかであり、体部から口縁部までわずかに丸味をもって立ち上がる。底部は丸底である。

器面調整－外面は口縁部と体部にヘラミガキ、底部にヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

ＡⅥ類：体部に沈線が巡るものである。体部から口縁部までわずかに丸味をもって立ち上がり、口縁端がうすくなる。底部は平底である。

器面調整－外面は口縁部に横ナデ・体部にヘラミガキ、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

ＡⅦ類：体部から口縁部まで丸味をもって立ち上がるものである。内黒（ａ）と非内黒（b）とがある。口縁部が直立するもの（ｉ）と外傾するもの（ⅱ）とがみられる。底部は丸底と平底の両方がある。

器面調整－ＡⅦａ類は外面口縁部から体部にヘラミガキ、底部にヘラケズリ、内面ヘラミガキ・黒色処理されている。ＡⅦｂ類は内外面全体がヘラミガキのもの、内外面とも口縁部が横ナデ、体部がヘラミガキのもの、外面の口縁部が横ナデ、体部がヘラケズリ、内面がヘラミガキ・ヘラナデのものがある。

ＡⅧ類：底部にムシロ状圧痕のみられるものである。いずれも口縁部を欠いており、全体の器形は不明であるが、他の類の坏にはみられないので分類した。体部はわずかに丸味をもって立ち上がる。底部は平底である。調整は外面体部にヘラケズリがみられ、内面はヘラミガキ・

第１表　土師器坏の分類

	口縁部		体部	底部	器面調整
Ａ ロクロ不使用	Ⅰくびれて外傾、内面に稜		(i)上半内弯 (ii)上半外傾		
	Ⅱ短かく屈折、内外面に稜	(i)内弯気味 (ii)外　傾			
	Ⅲ屈折、外面に稜	(i)直　立 (ii)内　傾			
	Ⅳゆるやかに屈曲、稜なし				
	Ⅴ		段		
	Ⅵ		沈　線		
	Ⅶ（体部～口縁部）変化なし外傾	(i)内弯気味 (ii)外　傾			a 内　黒 b 非内黒
	Ⅷ			ムシロ状圧痕	
Ｂ ロクロ使用	底部切り離し技法	外面再調整			
	Ⅰ 回転糸切り	a 有一手持ヘラケズリ―(i)体部下端(ii)底部の一部(iii)底部周縁 b 無（ロクロ回転　(i)右　(ii)左）			
	Ⅱ 不　明	有一手持ヘラケズリ―体部下端～底部			

黒色処理されている。

Ｂ類　製作に際しロクロを使用しているもの。器形は体部から口縁部までわずかに丸味をもって立ち上がり、口縁端が外反気味のものもある。内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

ＢⅠ類：底部が回転糸切り技法によって切り離されているものである。外面に再調整の加えられているもの(ＢⅠa)とみられないもの（ＢⅠｂ）とがある。

ＢⅠａ類は手持ちヘラケズリの再調整が加えられており、その位置は（ｉ）体部下端、（ⅱ）底部の一部、（ⅲ）底部周縁の3種類がある。

ＢⅠｂ類は再調整がみられない。ロクロの回転方向は、（ｉ）右回転と（ⅱ）左回転があり、前者が大半を占める。

ＢⅡ類：再調整が加えられ、底部の切り離し技法が不明なものである。再調整は体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施されている。

高坏

図示できたものは脚部の柱状部と裾部が1点ずつであり、破片数も少ないため分類は行えない。

高台付坏

製作に際してロクロを使用している。図示できたものはすべて坏底部が回転糸切り技法によって切り離され、その後に高台が付けられている。内面にはヘラミガキ･黒色処理がみられる。
外面にヘラミガキ･黒色処理が加えられているもの（Ⅰ類）と、ロクロ調整痕がみられ、再調整のないも（Ⅱ類）とがある。なお、破片ではこのほかに、坏底部が回転糸切り技法で切り離され菊花文（放射状ナデツケ）のみられるもの（Ⅲ）、切り離しが不明で菊花文がみられるもの（Ⅳ）、ロクロ調整されているもの（Ⅴ）がある。

甕

製作に際しロクロを使用していないもの（A類）と、使用しているもの（E類）とがあり、前者は口径と器高の比較、最大径の位置によって分類される。

Ａ類　製作にロクロを使用していないもの。

ＡⅠ類：口径より器高が大きく、最大径は口縁部に位置するものである。いわゆる長胴形を呈している。底部形態は不明である。

器面調整－口縁部は外面に横ナデ、刷毛目、体部は外面にヘラケズリ・刷毛目、内面に刷毛目・ナデが施されている。

ＡⅡ類：口径より器高が大きく、最大径が体部に位置するものである。体部が球形を呈すもの（ＡⅡａ）と、紡錘形を呈するもの（ＡⅡｂ）とに分かれる。底部は下方にいくぶん突き出しており、木葉痕がみられる。

器面調整－口縁部は内外面とも横ナデがみられる。体部外面はヘラミガキのみられるものが多いが、刷毛目あるいはヘラケズリの施されているものもある。体部内面は刷毛目あるいはヘラナデがみられる。

ＡⅢ類：口径より器高が小さく、最大径が口縁部に位置するものである。体部最大径が上端に位置するもの（ＡⅢａ）と中央に位置するもの（ＡⅢｂ）とがある。ＡⅢａ類は鉢形を呈するものであり、ＡⅢｂはＡＩ類に類似した器形である。ＡⅢａ類には丹塗りの認められるもの（1）とみられないもの（2）とがある。

器面調整－ＡⅢａ１類は内外面ともヘラミガキ・丹塗りがみられる。他の類は口縁部の内外面に横ナデ、体部外面にヘラケズリ、内面にナデあるいは刷毛目が施されている。

Ｂ類　製作に際しロクロを使用しているもの。器高が不明であり、口径との比較はできない。最大径はいずれも口縁部に位置している。大形（ｉ）小形（ⅱ）がある。器面調整は内外面にロクロ調整痕がみられるものと、外面にロクロ調整ののちヘラケズリが加えられ、内面にナデあるいはヘラミガキ・黒色処理の施されているものがある。

第２表　土師器甕の分類

Ａ　ロクロ不使用	Ⅰ　口径＜器高	最大径口縁部	
	Ⅱ　口径＜器高	体　部	a　体部球形 b　体部紡錘形
	Ⅲ　口径＞器高	口縁部	a　体部最大径上端 b　体部最大径中央
Ｂ　ロクロ使用		最大径口縁部	(i)　大形　(ii)　小形

甑

実測図の作製できたものは無底式の甑が2点だけあり、分類は行えない。現存部からみて甕ＡＩに類似した器形のものと思われる。

耳皿

１点だけ出土している。

壺

すべて製作にロクロを使用していない。頚部のくびれの度合によってＩ・Ⅱの２類に分かれ

る。

Ⅰ類　頚部のくびれが弱いものである。Ⅱ類より小形で、いわゆる小形坩である。

Ⅱ類　頚部のくびれが強いものである。口頚部は大きく開き、口縁部が内弯気味のもの（Ⅱａ）と、外反気味に立ち上がり開きの小さいもの（Ⅱｂ）とがある。

〔赤焼土器〕

坏

色調が赤褐色あるいは褐色を呈し,製作に際してロクロを使用しており、底部は回転糸切り技法によって切り離され、内外面とも再調整のみとめられないものである。体部から口縁部まで外傾するが、直線的に立ち上がるもの、丸味をもって立ち上がるもの、体部が丸味をもち口縁部で外反気味になるものなどがある。片口状の口縁部をもつものが1点ある。ロクロの回転方向は右回転と左回転があり、前者が多い。

高台付坏

図示できたのは1点だけである。

〔須恵器〕

坏・甕・長頚壺・小形壺がある。

坏

体部から口縁部まで外傾するが、直線的に立ち上がるものと、わずかに丸味をもっものとがある。底部が回転糸切り技法によって切り離されているものである。再調整はみられない。
ロクロは（ｉ）右回転のものと、（ⅱ）左回転のものがあり前者が多い。

甕

口縁部、あるいは口縁部から体部上半が残存するものである。最大径は体部に位置している。
口頚部の器形により2つに分かれる。

Ⅰ類　口頚部は長く、頚部が直線的に立ち上がり口縁部で外反するものである。

Ⅱ類　口頚部は短く外反するものである。

なお、これら以外に口縁部破片では波状文のみられるものもある。また、体部破片に施された調整は格子叩き目･平行叩き目、ヘラケズリ、青海波文あて目、ナデなど多様である。

壺・長頚蓋・小形壺

これらの壺類については実測図を製作できたものがごく少ないので分類は行えない。

2. 出土土器の組み合わせとその年代

土師器･須恵器･赤焼土器について遺構および遺物包含層における共伴関係は第3表に示したとおりである。この表をもとに土器の組み合わせを検討する。

〔土師器〕

坏－坏は製作にロクロを使用しないもの（A類）と使用するもの（B類）に大きく分かれている。A類は遺構や包含層において他の類との共伴関係の判明するものは少なく、わずかにＡⅠ、ＡⅢ、、ＡⅦ類が第1住居跡で共伴している。B類はそのすべてが遺物包含層（南）第1層で共伴関係にあり、さらにロクロ不使用のＡⅧ類が加わっている。このように坏は1：ロクロ不使用のものと2：大半がロクロ使用のものとの2つのグループがみとめられる。

甕－ロクロ不使用（A類）とロクロ使用（B類）とに大きく分かれている。遺構、包含層で地区･層位ごとに検討すると、甕相互で伴出関係にあるものは少ない。そのため坏との組み合わせをみるとＡⅢａ・ＡⅡｂは第1住居跡で、ＡⅠ、ＡⅢｂ・B類は遺物包含層（A）第1層で共伴し、さらに前者は坏の第1グループと、後者は第2グループと組み合っている。また、ＡⅡａ類は包含層（B）第1層で、ＡⅢaは包含層（A）第2層でそれぞれ坏の第2グープと組み合っている。また、ＡⅡa類は包含層（B）第1層で、ＡⅢａ類は包含層（A）第2層でそれぞれ坏の第2グループと組み合っている。

高台付坏－Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ類が包含層（A）第1層で、Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ類が包含層（B）で坏の第2グループと共伴している。

壺－壺はⅠ類が方形周溝墓に伴って出土している以外は遺構や包含層から伴出したものはない。

甑・高坏は表土、あるいは方形周溝墓の堆積土から出土しており、他の土器との共伴関係が不明である。

〔須恵器〕

坏・甕・壺・長頸壺・小形壺があるが、すべて遺物包含層において土師器坏の第2グループに伴っている。

〔赤焼土器〕

坏・高台付坏・耳皿があり、すべて土師器坏の第2グループに伴っている。

以上のように、土師器、須恵器、赤焼土器の組み合わせを検討してきたが、土師器の坏の他

第3表　図示土器集計表

出土地区＼分類	土師器																							須恵器						赤焼土器耳皿	
	坏											甕						壺		高台付坏耳皿		高坏	甑	坏	甕		壺	長頸壺	小形壺	坏	高台付坏
	AⅠ	AⅡ	AⅢ	AⅣ	AⅤ	AⅥ	AⅦ	AⅧ	BⅠa	BⅠb	BⅡ	AⅠ	AⅡa	AⅡb	AⅢa	AⅢb	B	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ				Ⅰ	Ⅱ					
1 住床 貯蔵穴	2		1				1							2	1																
包含層A 1 層								2	3	35	2	1				2	3				1			4	1					7	
2 層							1		1						1											1					
包含層B 1 層										3			1				3				1					1	2	1			
2層上面										1							1										1		1		
2 層																															
包含層C 3 層																															
4 層																				1	1				1						
方形周溝墓1 層	1						5						1	1								1	2								
3 層																			2												
4 層													1						1												
6層上面																		1													
ピット 1										2																					
ピット 2										1																					
ピット 4												2			1															1	1
第 2 堀			1							1														1	1					1	
第 5 堀		2																													
貯水遺構				1						1																					
表土・他	1		2	1	1	1	3	1		2				1								1		4							

には種別ごとに組み合わせの大別を行うことができなかった。そのため土師器坏において設定したグループを基準とし、それと他の種別との伴出関係によって組み合わせを考えると3つの群に分けることができる。

第I群は土師器坏の第1グループおよびこれと伴出関係にある土師器甕（AⅢａ、AⅡb）である。南小泉式と考えられる。

第Ⅱ群は土師器坏の第2グループおよびこれと伴出関係にある土師器甕（AⅠ、AⅡａ、AⅢａ、AⅢｂ、B）高台付坏（Ⅰ，Ⅲ，Ⅳ，Ⅴ）耳皿，須恵器と赤焼土器のすべてが含まれる。土師器は表杉ノ入式と考えられる。

第Ⅲ郡は他の類との共伴関係が不明で、第Ⅰ・Ⅱ群のいずれにも属さないものである。土師器坏A類の過半数と甕AⅠａ類、壺、高台付坏Ⅱ類であるが、高台付坏Ⅱ類はロクロを使用しているものであり、第Ⅱ群に含めてさしつかえないものと思われる。他は個別に時期を検討する。

土師器坏

AⅡ－岩切鴻ノ巣遺跡（白鳥・加藤）に類例がみられる。南小泉式と考えられる。

AⅣ－他に類例はみられないが、内面は黒色処理されておらず、住社式以前と思われる。

AⅤ・AⅥ・AⅦb_1－糠塚遺跡（小井川・手塚：1978）に類例が求められ、国分寺下層式と思と思われる。

AⅧｂ－同様な器形はロクロ使用以前の各時期にみられるが、内面黒色処理されておらず栗囲式より古い。

土師器甕

AⅡａ－岩切鴻ノ巣遺跡に類例がみられる。南小泉式と考えられる。

土師器壺

Ⅰ・Ⅱa・Ⅱｂ－小牛田町山前遺跡（町教委：1976）に類例がある。塩釜式と考えられる。

高坏・甑は不明である。

第4表　出土土器の組み合わせ

	土師器																														須恵器							赤焼土器	
	坏												甕						壺		高台付坏					高坏	甑	坏	甕		壺	長頸壺	小形壺	坏	高台付坏
	AⅠ	AⅡ	AⅢ	AⅣ	AⅤ	AⅥ	AⅦ	AⅧ	BⅠa	BⅠb	BⅡ	AⅠ	AⅡa	AⅡb	AⅢa	AⅢb	B	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ				Ⅰ	Ⅱ					
第Ⅰ群土器	○		○				○							○	○																			
第Ⅱ群土器								○	○	○	○	○	○		○	○	○			○		○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○
(第Ⅲ群土器)		○		○	○	○												○	○						○	○								

3, 出土土器の問題点

〔第Ⅰ群土器〕

第I群土器は土師器だけで構成され、南小泉式と考えられる。器形は坏と甕だけである。坏は口縁部がくびれて外傾し、内面に稜がつくもの（ＡⅠ類）、口縁部が屈折して直立あるいは内傾し外面に稜がつくもの、体部から口縁部まで変化なく外傾し内面が黒色処理されていないものである。甕は口径より器高が大きく最大径が体部にあり、体部が紡錘形を呈す長胴形のものと、口径より器高が小さく最大径が口縁部にあり、体部最大径が上端に位置する鉢形のものである。

同時期の土師器は南小泉遺跡（伊東信雄：1950）、岩切鴻ノ巣遺跡などで出土している。本遺跡の土器は、これらの遺跡と比較すると器形の種類、類別がともに不足しており、内容の検討を行うには不十分である。

なお、坏ＡⅠ類の特徴は、引出式のものとも共通するが、岩切鴻ノ巣遺跡の報告では引出式が南小泉式と識別できないことから南小泉式に包括されるものとしており、本遺跡でもその見解に従いたい。

〔第Ⅱ群土器〕

第1群は土師器、須恵器、赤焼土器で構成され、土師器は表杉ノ入式と考えられる。

土師器の器形は坏と甕がある。坏は製作にロクロを使用したものが主体で、底部の切り離しは回転糸切り技法によるものと手持ちヘラケズリが加えられて不明なものとがある（B類）。この他に、ロクロ調整痕が認められず底部にムシロ状圧痕のみられるもの（AⅧ）がある。甕はロクロ不使用とロクロ使用の両方があり、前者には体部が球形のもの（AⅡa類）、長胴形のもの（ＡⅠ類）、鉢形のもの（AⅢ類）が含まれる。後者は器高の不明なものが多いため口径との比較はできず、最大径は口縁部に位置する。なお、AⅢａ類は第Ⅰ群土器にも含まれている。

同時期の土師器は表杉ノ入遺跡（加藤：1954）をはじめ糠塚遺跡･青木脇後遺跡など数多くの遺跡が発見されている。これらと本遺跡の第Ⅱ群土器を比較すれば、器形の組み合わせや特徴はほぼ共通する。

しかし、坏のAⅧ類の存在はこれまで類例がみられず特異なものといえる。ただし、AⅧがすべて口縁部は欠く破片であり、器形や内面調整の特徴はロクロ使用の坏と近似しているのでその製作技法については今後完形品の発見例を持ってさらに検討する必要がある。

またＢ類に回転ヘラケズリの加えられたものが含まれていないことは、第Ⅱ群の土師器が、表杉ノ式の中でも限定された期間のものと考えられる。

須恵器は、坏・甕・長頸壺・小形壺がある。坏は底部の切り離しが回転糸切り技法によるも

のだけである。

甕・壺類については、いまだ明確な編年がなされていないのでここでは第Ⅰ群に含まれるとするにとどめる。なお、第Ⅱ郡土器は遺物包含層の各層から出土しており、時間的な差が存在するものと考えられるが、すでに見てきたように土器の組み合わせとその特徴からみる限り、第Ⅱ耕土師器を細分する根拠を抽出することはできない。

以上のように第Ⅰ・Ⅱ群土器についてみてきた。これらの土器の絶対年代については推定できる資料がなく不明であるが、おおまかに第Ⅰ群土器を古墳時代中期、第Ⅱ群土器を平安時代としておきたい。

4. 遺物包含層と遺構の年代

1. 遺物包含層

遺物包含層はA・B・Cの3地点から発見されており、それぞれ2～3枚の層に分かれている。各地点各層から出土した土器は、すべて第Ⅱ群に含まれ表杉ノ入式に属するものである。

また、層位的には組み合わせに多少の違いは認められるものの、第Ⅱ群土器が細分される可能性は少ないことからみて、層によって類別の欠落があると理解され、各層ともさほど時間的差がなく堆積したものと考えられる。

2. 方形周溝墓

方形周溝墓は1基発見されている。遺物は大半が堆積土から出土しており、遺構に伴うことが明確なものはない。

その中で、地山崩壊土である堆積土最下層（第4層）上面から出土し先土師器壺は、遺構の年代にごく近いものと思われ、また体部下端に焼成後の穿孔がみられることから供献用土器と考えられる。

遺構の年代は、この土師器壺の所属時期からみて古墳時代前期－塩釜式期と思われる。

3. 竪穴住居跡

竪穴住居跡は1軒発見されている。その年代は、床面上カマド内、貯蔵穴状ピットから出土した遺物が第Ⅰ群土器であることから古墳時代中期－南小泉式期と考えられる。

4. 堀の年代

堀は6本発見されている。いずれも遺物は堆積土から出土しており、年代を推定することはできない。

4本の堀のうち堀3・4は調査区外へどのように続くかを現地表で観察すると、西方は東舘遺跡の西隣りにある高清水城跡の北辺の外堀に接続する。東方は湿地が広がっているため不明である。

5. 貯水施設

遺構の年代は、板碑を転用していることから西暦1330年以降であるが、他に遺物が出土しておらず、時期を限定することはできない。

また、この遺構は、発掘時にも相当量の湧水がみられることから、湧水をためる施設と考えられ、堰状にした板碑によって砂の流下を防ぎ、円形の落ち込みに貯水して利用したものであろう。

Ⅴ　ま　と　め

東舘遺跡は地形的にみて丘陵上は第1地区と第2地区、およびその間の沢とから構成されている。調査の対象となった新幹線の路線は遺跡を南北に縦断している。

調査の結果、縄文時代･弥生時代･古墳時代･奈良･平安時代･中世の遺構･遺物が発見された。

1. 縄文時代－表土・堀内堆積土などから土器・石器が少量出土している。土器は早期・前期・晩期のものがある。
2. 弥生時代－表土・堀内堆積土・方形周溝墓内堆積土などから土器が少量出土している。土器は大泉式･天王山式のものがある。
3. 古墳時代－前期の方形周溝墓、中期の竪穴住居跡、および各時期の遺物が発見されている。方形周溝墓、竪穴住居跡は1基（棟）ずつ検出されたに過ぎず、その位置が丘陵の東端部であることからみても、さらに西側に集落の大部分が存在するものと思われる。
4. 奈良・平安時代－奈良時代の遺物としては、土師器が少量出土している。平安時代には3地点に遺物包含層が形成されている。
5. 中世－表土から中世陶器が数点出土している。

また、堀のなかには高清水城の外堀と接続しそうなものがあり（第2・3堀）、第1地区は高清水城の範囲内に含まれることが考えられる。ただし、今回の発掘範囲内では、丘陵上に高清水城と関連しそうな遺構はみられなかった。

引用・参考文献

阿部　義平（1968）：「東国の土師器と須恵器－多賀城外の出土土器をめぐって－」帝塚山考古学No.1

伊東　信雄（1950）：「仙台市内の古代遺跡」仙台市史3

氏家　和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」歴史第14輯

（1961）：「土器」『陸奥国分寺』所収陸奥国分寺跡発掘調査委員会編

（1967）：「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって－奈良・平安期土師器の諸問題－」柏倉亮吉教授還暦記念論文集

岡田　茂弘
桑原　滋郎（1974）：「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要Ⅰ

小笠原好彦（1976）：「東北における平安時代の土器についての二、三の問題」東北考古学の諸問題

加藤　　孝（1954）：「塩釜市表杉ノ入貝塚の研究」宮城学院女子大学研究論文集

桑原　滋郎（1976）：「須恵系土器について」東北考古学の諸問題

（1970）：「ロクロ土師器坏について」歴史第38輯

工藤　雅樹
桑原　滋郎（1972）：「東北地方における古代土器生産の展開」考古学雑誌代57巻3号

小井川和夫
手塚　　均（1978）：「糠塚遺跡」宮城県文化財調査報告書第53集

小牛田町教育委員会（1976）：「山前遺跡」

白鳥　良一
加藤　道男（1974）：「岩切鴻ノ巣遺跡」宮城県文化財調査報告書第35集

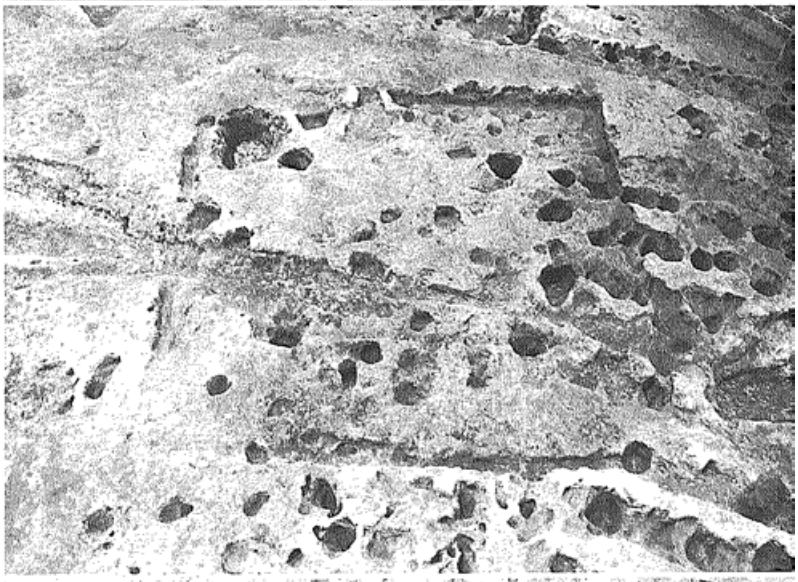
第5表 破片集計表

種別	器形	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	方形周溝墓 第1層	方形周溝墓 第2層	方形周溝墓 第3層	方形周溝墓 第4層	第1住居跡 床面	第1住居跡 ピット1	第1住居跡 ピット2	第1住居跡 ピット5	ピット3	ピット4	ピット6	ピット7	ピット8	ピット12	溝	第2堀 第1層	第2堀 第2層	第2堀 第3層	第2堀 第4層	第2堀 第5層	第2堀 第6層	第2堀 第9層	第5堀	包含層(C) 第1層	包含層(C) 第2層	包含層(C) 第3層	包含層(C) 第3・4層	包含層(C) 第4層	包含層(C) 第5層	包含層(C) 第6層	包含層(B) 第2層	包含層(B) 第3・上層	包含層(B) 第3層	包含層(A) 第2層	包含層(A) 第3層	貯水施設	表土	計
土師器		口縁部	ロクロ	ミガキ・黒色	1						1			1				7		30	40	15	15		7	3		3	11	42	33	2	15	2	218	27	3	613	12	16	164	1,281
			〃	ミガキ																	1										5							14			3	23
			ロクロ ミガキ 黒色	ミガキ・黒色										1																					3						3	7
			横ナデ	横ナデ		1											2		1														1			1		3	1		14	24
			〃	〃(丹)	11	2	4	2											4	2	2	1	3			1			6			1			6		1	20	2	1	37	106
			〃	ミガキ																																					1	1
			ナデ	不明																																					1	1
			ミガキ	ミガキ																																					3	3
			〃 黒色	ミガキ・黒色																														3			2				5
			〃(丹)	横ナデ(丹)																																					1	1
			不明	不明																																					6	6
		体部	ロクロ	ミガキ・黒色									1	3				2		61	122	17	21		6			8	25	36	41		26	3	259	28	6	943	13	36	354	2,011
			〃	ミガキ													2				4										2							15			4	27
			ロクロ ミガキ 黒色	ミガキ・黒色										1							1															1		4				7
			ナデ	ミガキ(丹)																																					1	1
			ミガキ	ミガキ	5	2				1									1																						3	12
			〃	ナデ																																					1	1
			〃	ヘラナデ																																			1		3	4
			〃	ミガキ(丹)	7		17											3	1	5	4				2				1	1	1	3	1		13			35	3	2	57	156
			〃(丹)	ナデ(丹)															1																						1	2
			〃(丹)	ミガキ																																						
			ミガキ・黒色	ミガキ・黒色																																						
			ヘラミガキ	〃																																						
			ケズリ	ミガキ・黒色																		1													6			13			8	28
			〃	ミガキ																																1					1	2
			〃	〃(丹)																					1																	1
			〃	ナデ																																					3	3
			〃	ナデ(丹)																																				5	11	16
			不明	ミガキ・黒色																								5							1			2				8
			〃	ナ(丹)																															1						1	2
			〃	不明															1			1	3		1	1												5			26	38
			〃	〃・黒色																																		2			6	8
			回転糸切り	ミガキ・黒色									1			1			1	18	55	15	9	2	4			4	5	16	21	2			136	18	3	543	6	27	162	1,049
			〃	ミガキ																																		12				12
			〃	不明																															4			1				5
			手持ちケズリ	ミガキ・黒色																	2														2			12			6	22
			ケズリ	ヘラナデ																																					1	1
			〃	〃(丹)																																					1	1
			〃	不明																																					1	1
			ミガキ(丹)	ミガキ(丹)		4																																3				7
			不明	ミガキ・黒色																									1						4			6			4	15
			〃	不明																																				1	2	3
	高坏	坏部	ミガキ(丹)	ミガキ(丹)			1																									1									1	3
			刷毛目(丹)	〃(丹)																															1							1
		脚部																2			1																				1	4
	高台付坏	高台	回転糸切り																	1	3	1								3	2	2			9	1		29		3	9	63
			ロクロ調整																		2	1													1			8			1	13
			黒色 ロクロ ミガキ	黒色 ロクロ ミガキ												1																										1
			菊花文																	1	1														2			6				10
			糸切り・菊花文																																1							1
			不明																	3	2							2		1	2	1			15	1		25		1	10	63
赤焼	坏	口縁部												2						10	15	6	2		1			3		9	9				68	6		109	5	5	54	304
		体部												4						14	12	3	3		2	1		10		8	13				61	1	7	181	8	6	90	424
		底部																		5	3	1	1					3	1		7		2	1	30		1	85	2	4	55	201
	高台付坏																				1		1							1					1						3	7
土師器		口縁部	ロクロ	ロクロ											1						7	1			1						1	2	2		6			29		1	15	66
			〃	ミガキ・黒色																																		4			1	5
			横ナデ	横ナデ	23	1	5			1	5								3	2	24	11	10		5			1	3	2	3	5		1	15	2		31	4		59	216
			〃	ミガキ・黒色																																		4				4
			〃	刷毛目																															3							3
			〃(丹)	横ナデ(丹)																	1		1								3							2			4	11
			ミガキ	ミガキ	1																				1																2	4
			〃	横ナデ																																					1	1
			不明	横ナデ																																					1	1
			〃	不明																															1			1			10	12
		体部	ロクロ	ロクロ											1					7	20	5			4			1	3		5		3		21	2	3	90	1	3	41	210
			〃	ミガキ・黒色																								2			3				4			3			7	19
			〃	刷毛目																															2							2
			ナデ	ナデ																											1					1		2		5	1	17
			〃	ヘラナデ																																						4
			〃	不明																																						
			ケズリ	ミガキ	38	2	3		4	3		3								1	3	1	1		1										1	3		3	3	5	41	116
			〃	ナデ	8	1				6											1		1		1							3			3		1				15	40
			〃	ヘラナデ	10		1		1	4	12																3			2		10									10	53
			〃	刷毛目																																					2	2
			〃	不明																															1						1	2
			〃(丹)	ミガキ(丹)																													1								3	4
			〃(丹)	ナデ(丹)	6	1														4												1			1				3		2	18
			ケズリ	ロクロ										1						4	19	5	2						5			6	8		15	1	1	57		3	18	145
			〃	刷毛目	4	1								4						1	14	2	6							1	5		1		19	1		17		1	32	109
			〃	ナデ	48	3					1			4					1	19	2	1	24	72	10		3	4	12	7	16	10	16		44	2	5	96	3	19	131	556
			〃	ヘラナデ	19		1	1													20	3	3		3			1	1		4	6	2	1	11		1	23	4	7	50	161
			〃	ミガキ・黒色																1	10							1	4	2	2		1		10	1		24	1		14	71
			〃	ミガキ															2		3				1							1			2			5			19	33
			〃	不明	15		3							2					1	3	8	3	4				3		1			3			10		1	14	4	2	49	126
			刷毛目	刷毛目	3															3	3	1													1		1	59			21	92
			〃	ナデ	27				1										1			1	2		3				1						5			3		2	45	91
			〃	ヘラナデ	6		1																							1		2			2			3	5	1	9	30
			〃	不明	1															1	3	1																			12	18
			平行タタキ目	ミガキ																																					1	1
			〃	ヘラナデ																																					1	1
			不明	ミガキ															1																						4	5
			〃	刷毛目															1						1										1			1			4	8
			〃	ナデ																		1			1										1			1			20	24
			〃	ヘラナデ																															1						1	2
			〃	不明	209	15	28	4		10	4				5			8	3	163	227	27	25		23			35	19	20	53	18	11	4	145		37	447	37	54	918	2,549
		底部	糸切り																		1							1		1					2			1			1	7
			木葉痕		2															1	1																	2			2	8
			ムシロ状圧痕																		1														2			2		1		6
			ケズリ		10					1											2	1			2						2	2	1		7		2	10	1	1	25	67
			〃(内黒)																																1		1					2
			ミガキ(丹)																												1	1										2
			ナデ		3	1															12								1			1						9	1	3	3	34
			台付																																			1				1
			不明																						1							1			2			7	2		4	17
	壷	口縁部	ミガキ(丹)	ミガキ(丹)																																		1			2	3
		体部	ミガキ	ナデ																							2															2
		底部	ミガキ(丹)	ミガキ(丹)																																					1	1
須恵器	坏	口縁部																1		1	16		4					3	1	3	3	2	4		10		2	34			11	95
		体部																		4	15	4	1		3			1	2	1	3		5		6	2		49		3	16	115
		底部	回転糸切り																	1	11										1	2	3		4	1		19		1	12	55
			不明																																1							1
	壷	口縁部	ロクロ																	4	8	1			1					1	2	1			5			13	1	1	8	46
			(波状文)																																4							4
		体部	ロクロ	ロクロ														2	1	12	21	4	2		1			4	2	4	4		4		12			37		2	34	146
			平行	平行																3	2		2		1			1							3			4		2	11	28
			〃	凹																1	5								1		1				1			16		3	3	31
			〃	青海波																	3										1				3		1	6			4	18
			〃	ロクロ																		1			1										6			24		1	16	49
			〃	刷毛目											1																										1	2
			〃	花文																								1										1				2
			〃	ナデ																12	35	3						7	3	5	7	7	3		12			27		1	35	157
			〃	不明																1													1		1			12			2	17
			ケズリ	ロクロ																	7	9	1		1						2		2		5			15			8	50
			〃	ナデ																5	20		2					4	3		2		5		2			18			13	74
			〃	刷毛目																																				1		1
			〃	不明																																		1	1			2
			格子	ナデ																										1											2	3
			〃	不明																																					3	3
			波状文	ロクロ																																		1				1
			不明	ロクロ																																					2	2
			〃	ナデ																															3							3
			〃	不明																	6							2		2	2	1			6	3		16	2	4	29	73
		底部	ケズリ	ナデ																	4										1		1					2			1	9
			不明																	1																1		5				7
	壷	口縁部																																							1	1
		口頸部	ロクロ	ロクロ																	3		1									1			1		2	4		1	1	14
		体部	ロクロ	ロクロ																	5											1	1		2			8	1		4	22
			ケズリ	ロクロ																	2																					2
		底部	高台																	1	3							1					2								4	11
			菊花文																																						1	1
			不明																																			1			1	2
			計																																							11,934

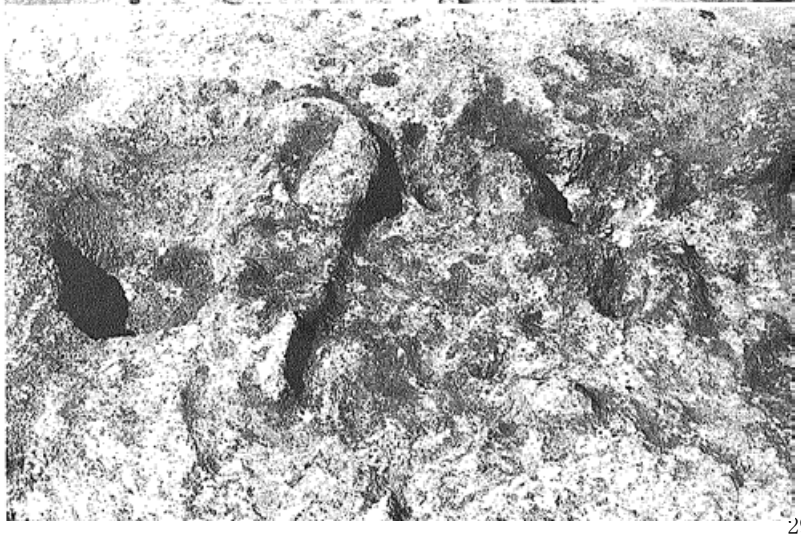
図　　版

遠　景（空中写真）

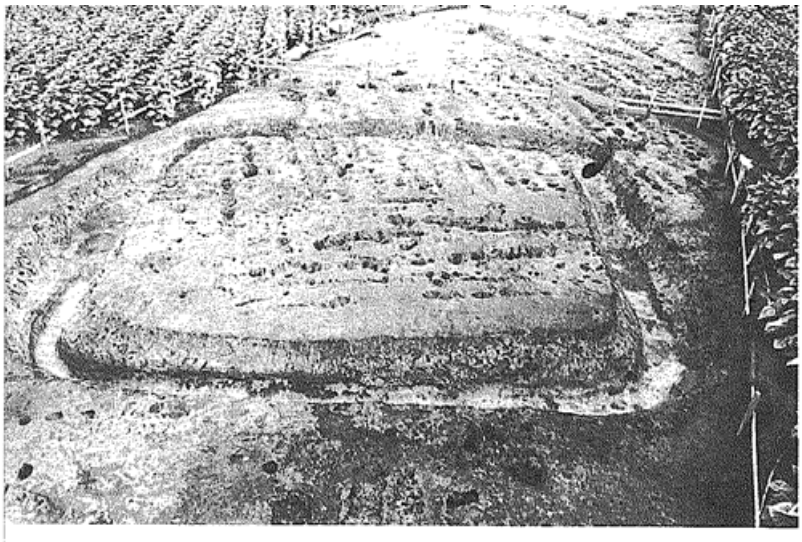
竪穴住居跡



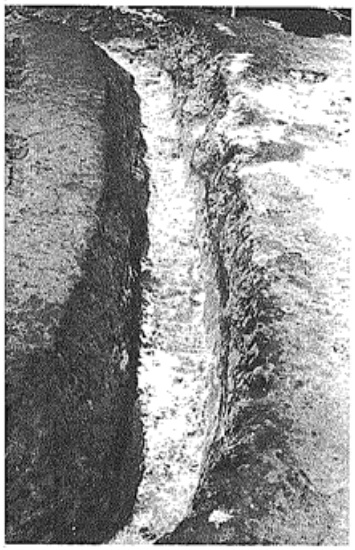
同上カマド



図版１　遠景・住居跡



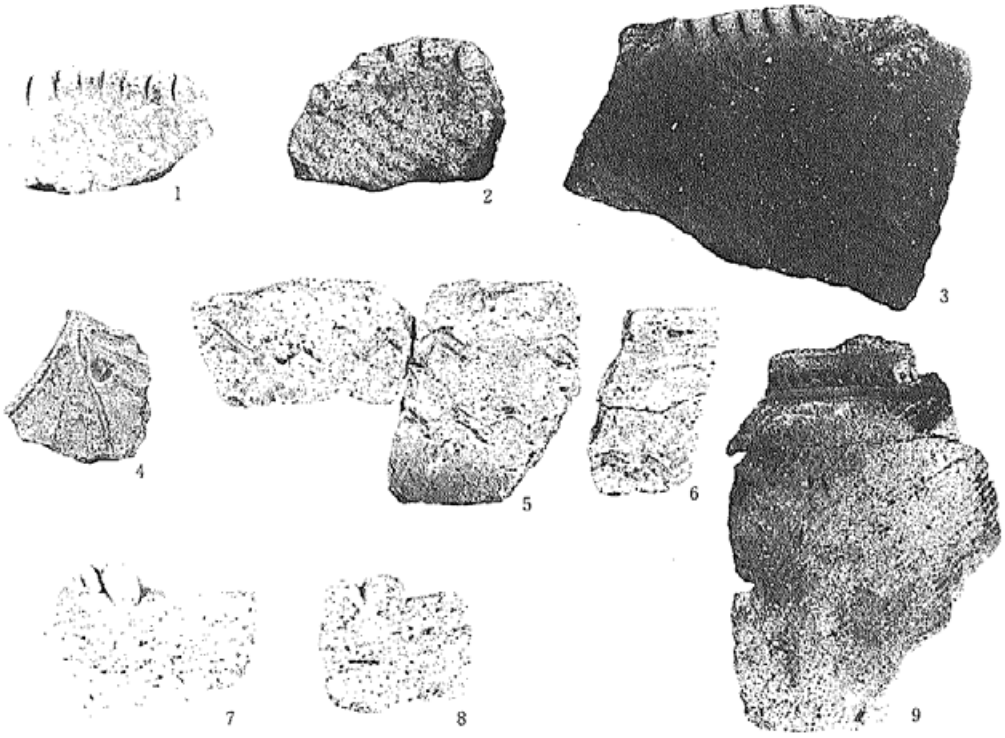
全　体



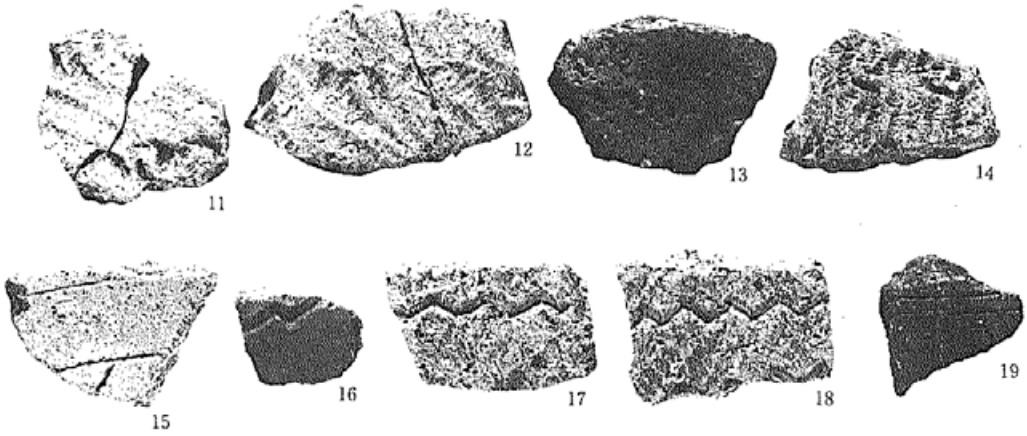
左：北　辺
右：東　辺

左：西　辺
右：南　辺

図版２　方形周溝墓

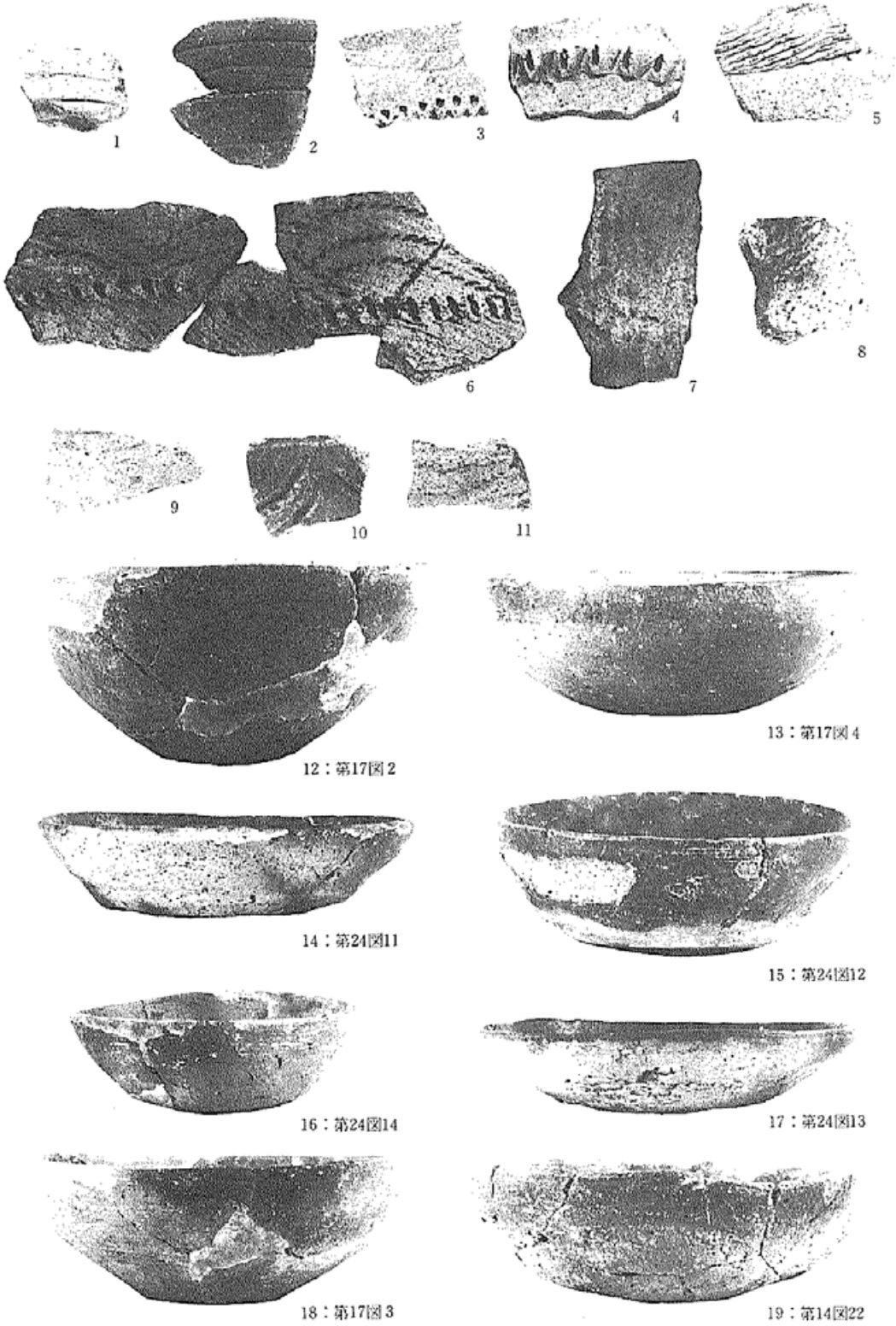


1：第13図1　6：第13図6
2：第13図2　7：第13図7
3：第13図3　8：第13図8
4：第13図4　9：第20図1
5：第13図5



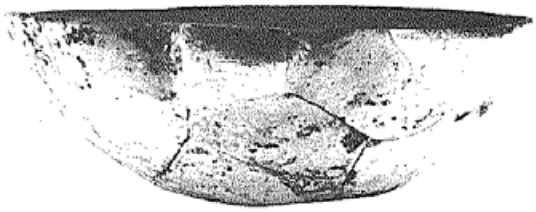
11：第13図9　16：第13図12
12：第13図10　17：第13図
13：第24図1　18：第13図13
14：第13図11　19：第21図1
15：第24図2

図版3　縄　文　土　器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12：第17図2
13：第17図4
14：第24図11
15：第24図12
16：第24図14
17：第24図13
18：第17図3
19：第14図22

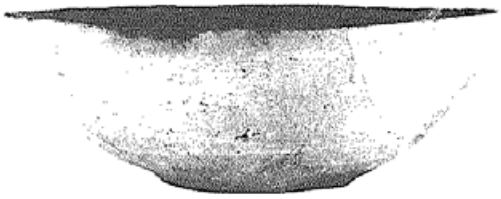
図版４　弥生土器、土師器

1 ：第14図26



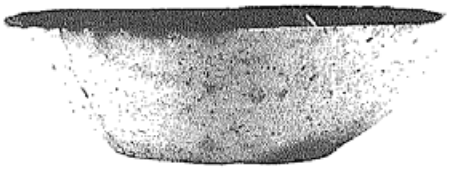
2 ：第３図２

3 ：第３図１



4 ：第18図３

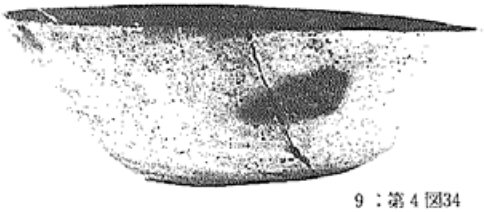
5 ：第４図33



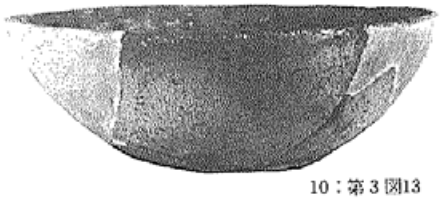
6 ：第３図24

7 ：第４図36

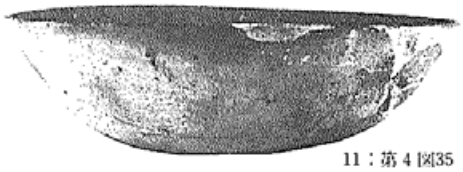
8 ：第18図２



9 ：第４図34



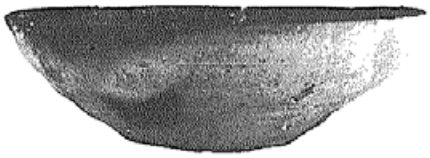
10：第３図13



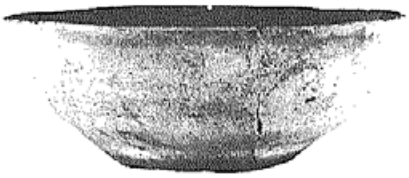
11：第４図35

12：第３図17

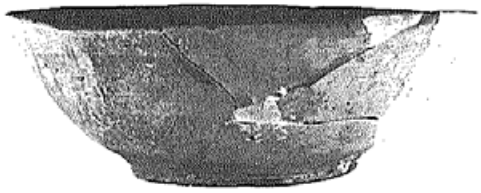
図版５　土　師　器



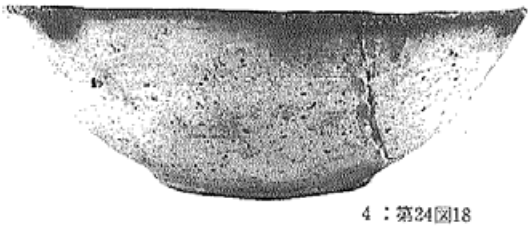
1：第20図4



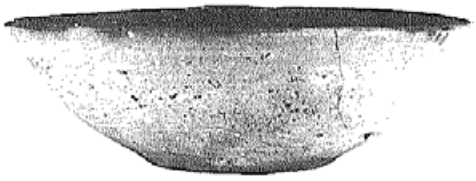
2：第19図13



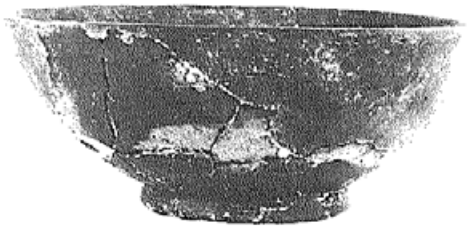
3：第4図38



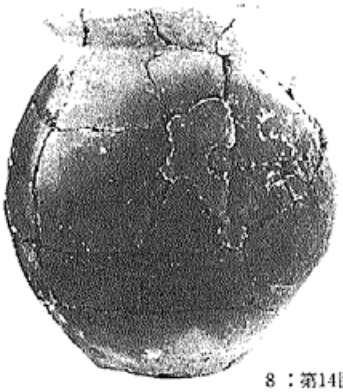
4：第24図18



5：第18図1



6：第11図1



8：第14図28

7：第17図5

9：第14図32

10：第17図6

図版6　土　師　器

1：第5図51

2：第9図14

3：第18図7

4：第18図8

5：第8図10

1：第7図62

2：第20図15

3：第20図13

4：第20図12

5：第20図14

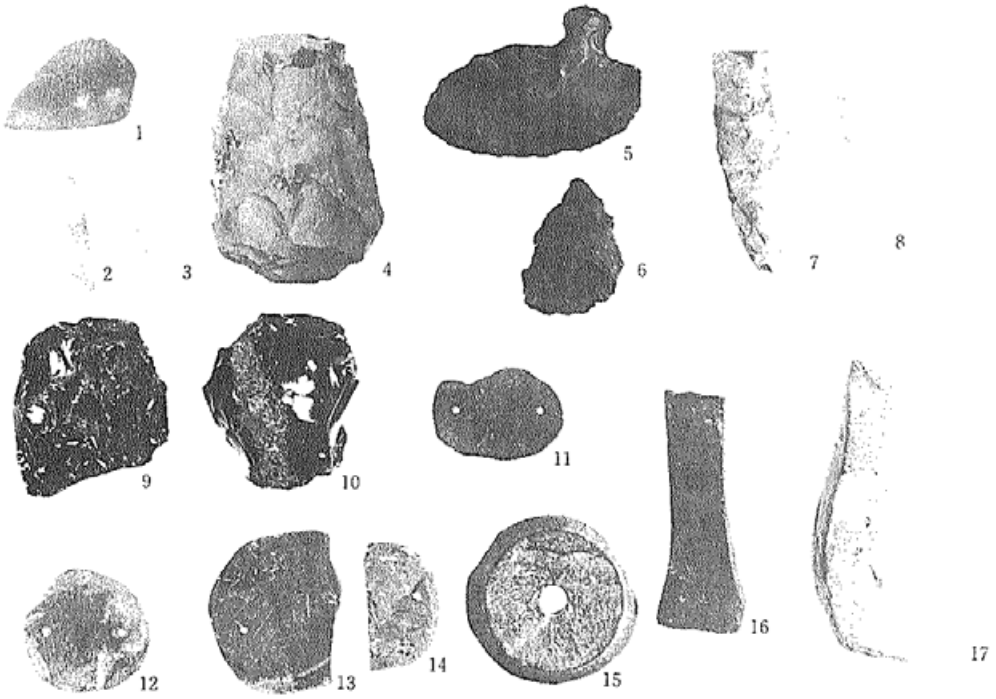
6：第23図3

7：第11図7

8：第11図6

9：第20図11

図版7　須恵器、赤焼土器、瓦



1 ：第15図37
2 ：第15図38
3 ：第18図9
4 ：第20図8
5 ：第25図27
6 ：第25図29
7 ：第25図28
8 ：第15図39
9 ：第20図9
10：第25図30
11：第25図31
12：第25図32
13：第8図11
14：第8図12
15：第17図8
16：第25図34
17：第20図10

図版８　石　　製　　品

(8) 下折木遺跡（しもおりぎ）

(9) 新庄館跡（しんじょうだて）

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と環境 309
Ⅱ　下折木遺跡 310
1. 調査の方法と経過 310
2. 発見された遺構と遺物 310
(1) 基本層位 310
(2) 竪穴住居跡とその出土遺物 312
(3) 焼土遺構 316
(4) その他の遺構 317
(5) 遺構以外の出土遺物 317
3. 考察 319
(1) 遺物の分類と年代 319
(2) 層の性格 320
(3) 遺構の年代 320
4. まとめ 321
Ⅲ　新庄館跡 322
1. はじめに 322
2. 調査の方法と経過 322
3. 発見された遺構と遺物 322
(1) 館跡の概観 322
(2) 段状遺構 323
(3) 通路状遺構 323
(4) 遺物 324
4. 考　察 328
(1) 発見された遺構について 328
(2) 文献的考察 329
5. まとめ 331

調査要項

下折木遺跡

遺 跡 記 号：ＣＨ（宮城県遺跡地名登載番号：44014）
遺跡所在地：宮城県栗原郡高清水町陰ノ沢
調 査 面 積：約690m^2（発掘面積：約174m^2）
調 査 期 間：昭和49年11月4日～11月20日
調　査　員：宮城県教育庁文化財保護課
小井川和夫・高橋守克・森　貢喜

新庄館跡

遺 跡 記 号：ＣＩ（宮城県遺跡地名表登載番号：44002）
遺跡所在地：宮城県栗原郡高清水町陰ノ沢
調 査 面 積：約2,600m^2（発掘面積：約224m^2）
調 査 期 間：昭和49年11月4日～11月20日
調　査　員：下折木遺跡に同じ

Ⅰ　遺跡の位置と環境

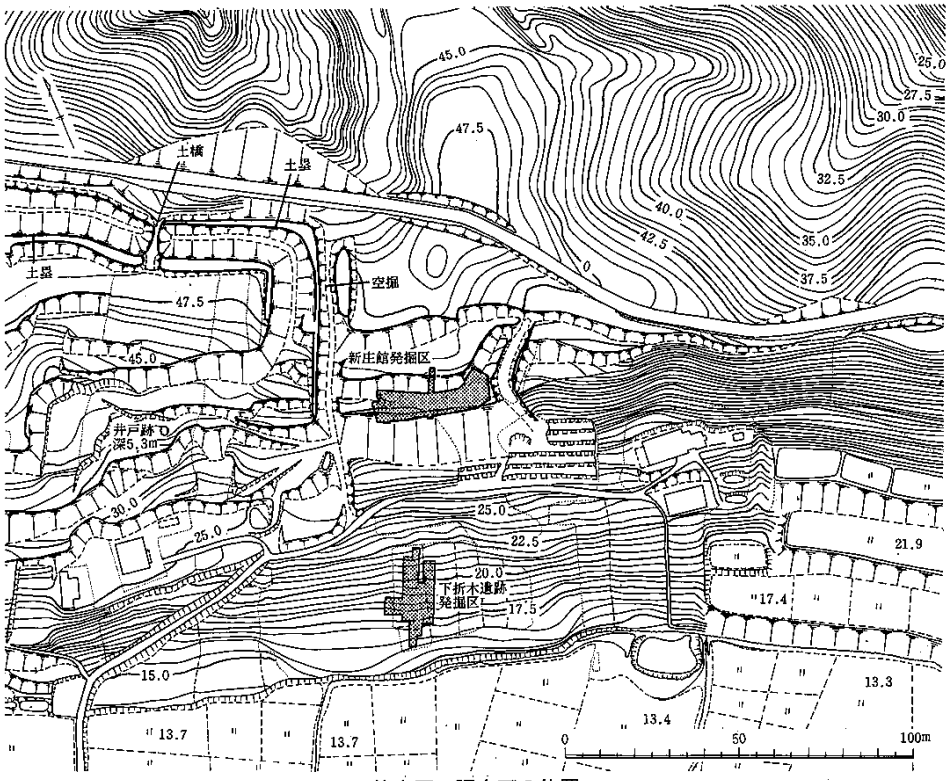
下折木遺跡･新庄館跡は、栗原郡高清水町陰ノ沢に所在する。両遺跡は高清水町の中心部から東へ約1㎞,県道高清水瀬峰線（通称高清水街道）の北側に位置している。

町北部には築館丘陵から派生した標高約50ｍの小起伏丘陵がみられ、善光寺川北岸に沿って南東方向に延び、大小の沢谷によってさらに開析され、その端部は樹枝状をなくしている。

両遺跡は、北部丘陵地区のうち北側にある小起伏丘陵が南東に向って樹枝状に張り出した丘陵上の南端部に立地する。新庄館跡は、樹枝状に張り出した標高約50ｍの丘陵突端部の尾根および斜面を利用して築城されており、その南緩斜面の麓部にあたる標高約20ｍのところに下折木遺跡が立地している。遺跡の現状は、下折木遺跡は野菜畑･新庄館跡は山林となっている。

なお、新庄館跡は旧奥州街道と高清水街道のほぼ交わる地点に位置し、交通要衝の地を占めていたといえる。

（なお、自然環境の詳細、および周辺の遺跡については「中ノＢ・Ｃ・Ｄ遺跡」と内容が重複するため省略している。前掲遺跡の第Ⅰ章を参照されたい。）



第１図　調査区の位置

Ⅱ　下折木遺跡

1. 調査の方法と経過

調査は2度にわたっている。東北新幹線に係る高清水地区の4遺跡について、昭和47年2月28日から3月31日まで、試掘調査を実施した。その際、本遺跡の調査も実施された。地形がほぼ南北に傾斜しているところから、路線のセンター杭373,280㎞（原点Ａ）と373,300㎞（原点Ｂ）を結ぶ軸線を設けた。軸線の西側に幅（東西）2m・長さ（南北）30mのＡトレンチと軸線の東側に幅1m･長さ12mのＢトレンチを設定し、その部分の調査を実施した。その結果、基本層位は2層認められ、第2層から奈良・平安時代の土器が出土した。Ａトレンチの地山上面では焼土遺構1基、数個のピットなどが検出された（宮城県教委：1972）。

続いて、試掘調査の成果を受けて昭和49年11月4日に路線敷にかかる約690m^{2}を対象として調査を開始した。

原点Ａと原点Ｂを結ぶ線を南北の基準線とし、原点Ｂでそれと直交する線を東西の基準線として、調査区全体に3m単位のグリッドを組んだ。グリッドは東西を算用数字で、南北をアルファベットで呼称した。

発掘調査は、南北軸から東西にそれぞれ1.5m放れたところに、東西3m（1グリッド）・南北18m（6グリッド）のトレンチを設定して実施した。その調査の結果、試掘調査時と同様な基本層位が確認され、第2層がちは少量ではあるが奈良･平安時代の遺物が出土した。また地山上面で竪穴住居跡1軒・ピット数個が検出された。

発掘された遺構の平面図･断面図については、竪穴住居跡･焼土遺構を$^1/_{20}$、その他の遺構を$^1/_{40}$で作成した。また、層の堆積状況を把握するために$^1/_{20}$の断面図を作成した。

2. 発見された遺構と遺物

(1) 基本層位

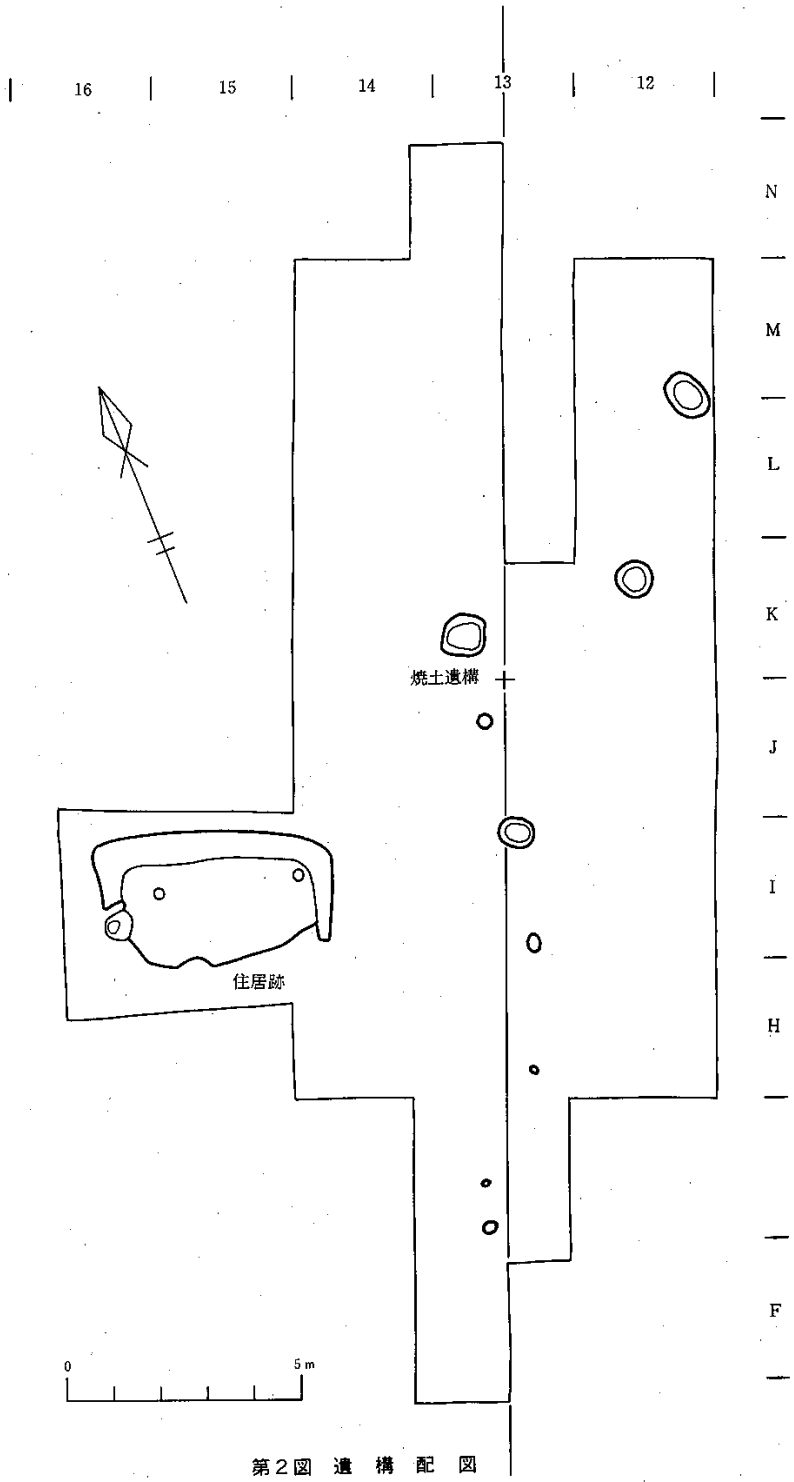
遺跡は丘陵麓部の南緩斜面に立地している。今回の発掘調査は、遺跡を南北に縦断する東北新幹線の路線にかかる部分を対象に実施された。遺跡の発掘区内における基本層位は次のとおりである。

〈第1層〉

第1層は暗褐色砂質シルト層である。現在の表土となっている。層の厚さは約20㎝である。遺物は全くない。

〈第2層〉

第2層は黒褐色シルト層である。粘性を若干有している。層の下部にはこぶし大の円礫を含



第２図　遺　構　配　図

んでいる。層の分布状況は第1層と同様であり、層の厚さは約20cmである。遺物は少量であるが出土する。

〈地山〉

黄褐色砂質シルト層である。遺構はすべてこの層の上面で検出されている。

(2) 竪穴住居跡とその出土遺物

遺構の確認：発掘区の南西部、Ｉ－14区の地山面で住居跡の東側部分が確認された。住居跡の西側部分は路線外に延びていたが、地権者の了承を得て拡張し、精査を実施した。

重複：他の遺構との重複関係は認められない。

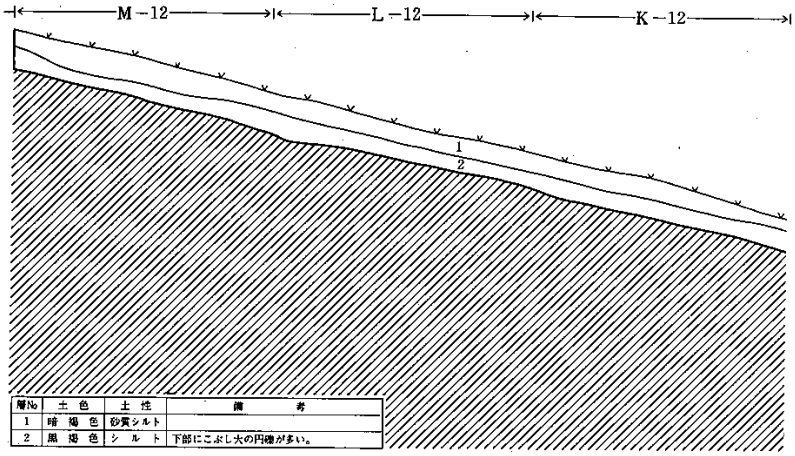
平面形・規模：住居跡の南側が削平されているが、残存する壁や周溝の状況などから平面形は方形を基調とする住居跡である。残存する北壁の長さは約5mである。

堆積土：2層認められた。第1層は黒色砂質シルト層であり、住居跡中央部では床面上に堆積している。第2層は暗褐色砂質シルト層で、黄褐色の岩粉を若干含む。壁沿いおよび周溝内に堆積している。

壁：北壁と東西壁の北側に残存している。地山を壁としており、残存壁萬は最も良好な北壁で約30cmである。

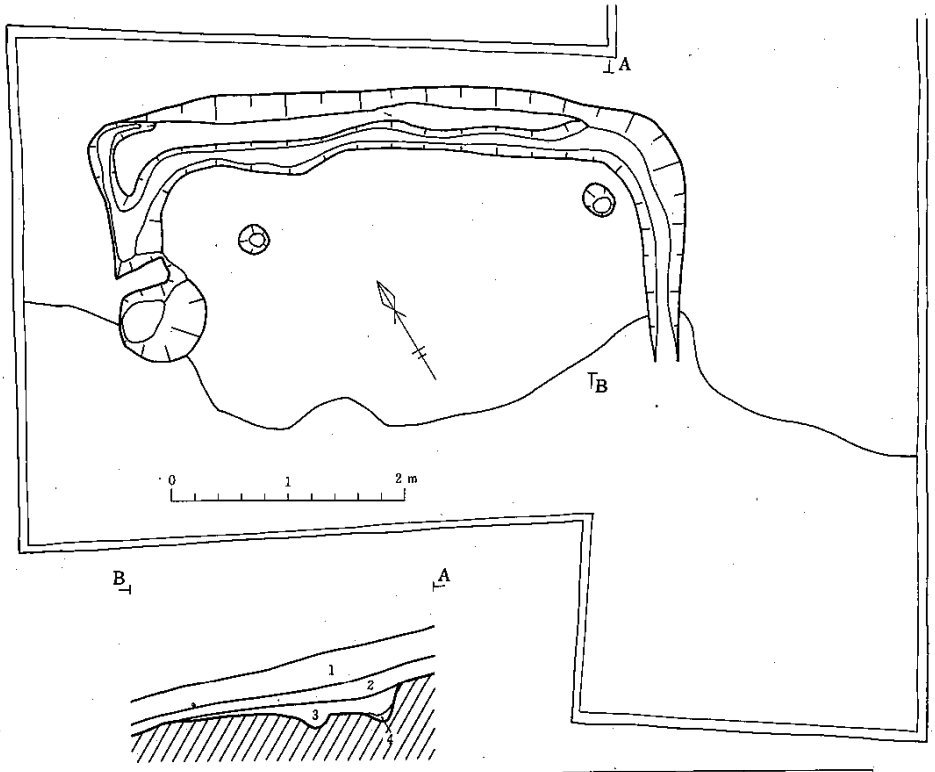
床面：住居跡北側の堆積土の残っていた部分に認められた。住居掘り方底面（地山）を床としている。残存する床面は、東西約4.1m、南北約2.4mの範囲である。

周溝：東西側では残存する壁沿いを、北側では壁から約20cm離れたところを巡っている。西側では、カマドの側壁と接するところで途切れている。周溝は幅約20cm、深さ約10cm、断面形は「U」字形である。なお、北壁と周溝の間は幅約20cmで床面より約5cm高いテラス状になっ



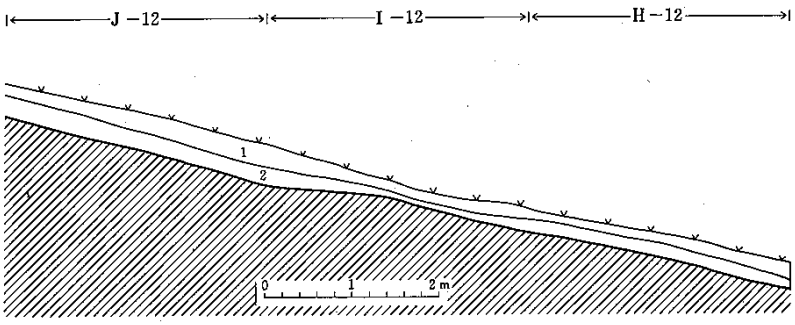
層No	土色	土性	備考
1	暗褐色	砂質シルト	
2	黒褐色	シルト	下部にこぶし大の円礫が多い。

第4図　基本層位



層No	層	土色	土性	備考
1	基本層位第1層	暗褐色	砂質シルト	
2	基本層位第2層	黒褐色	シルト	下部にこぶし大の円礫が多い。
3	堆積土第1層	黒色	砂質シルト	
4	堆積土第2層	暗褐色	砂質シルト	地山粒子が若干混じる。

第3図　竪穴住居跡



ている。

柱穴：床面上で2個のピットが検出された。いずれも柱痕跡は認められなかったが、ピットの掘り方の規模、堆積土などに共通性をもち、南側は削平されているが位置関係などから、本住居跡の柱穴となる可能性がある。

カマド：西壁に取り付いている。削平のため燃焼部しか検出されなかった。側壁は右側しか残っていない。側壁は黄褐色砂質シルトを貼り付けて構築されている。燃焼部底面は皿状に凹んでおり、床面からの深さは約6cmである。また、底面には部分的であるが火熱を受けた痕跡が認められた

出土遺物：床面直上、周溝や堆積土から土師器･須恵器･赤焼土器が出土している。破片については、第1表に記した。

〔床面直上〕

須恵器甕（第5図1）

底部は欠損している。また、体上部から口縁部にかけての部分と体下部は接合できなかったが、同一個体である。口縁部は外傾し、口縁端部は縁帯状をなしている。体部は肩部でゆるやかに屈曲し、体下部に移行する。肩部以上には内外にロクロ調整痕が認められる。肩部以下の外面には上部に平行タタキ目、下部にはヘラケズリ、内面にはアテ目とナデ調整痕が認められる。

〔堆積上〕

土師器坏（第1表）

いずれも破片である。製作に際しロクロを使用したもの（2点）としないもの（11点）とがある。体部外面の器面調整は前者にロクロ調整、後者にヘラケズリ、ヘラミガキが施されている。内面は前･後者ともヘラミガキされ、黒色処理されている。

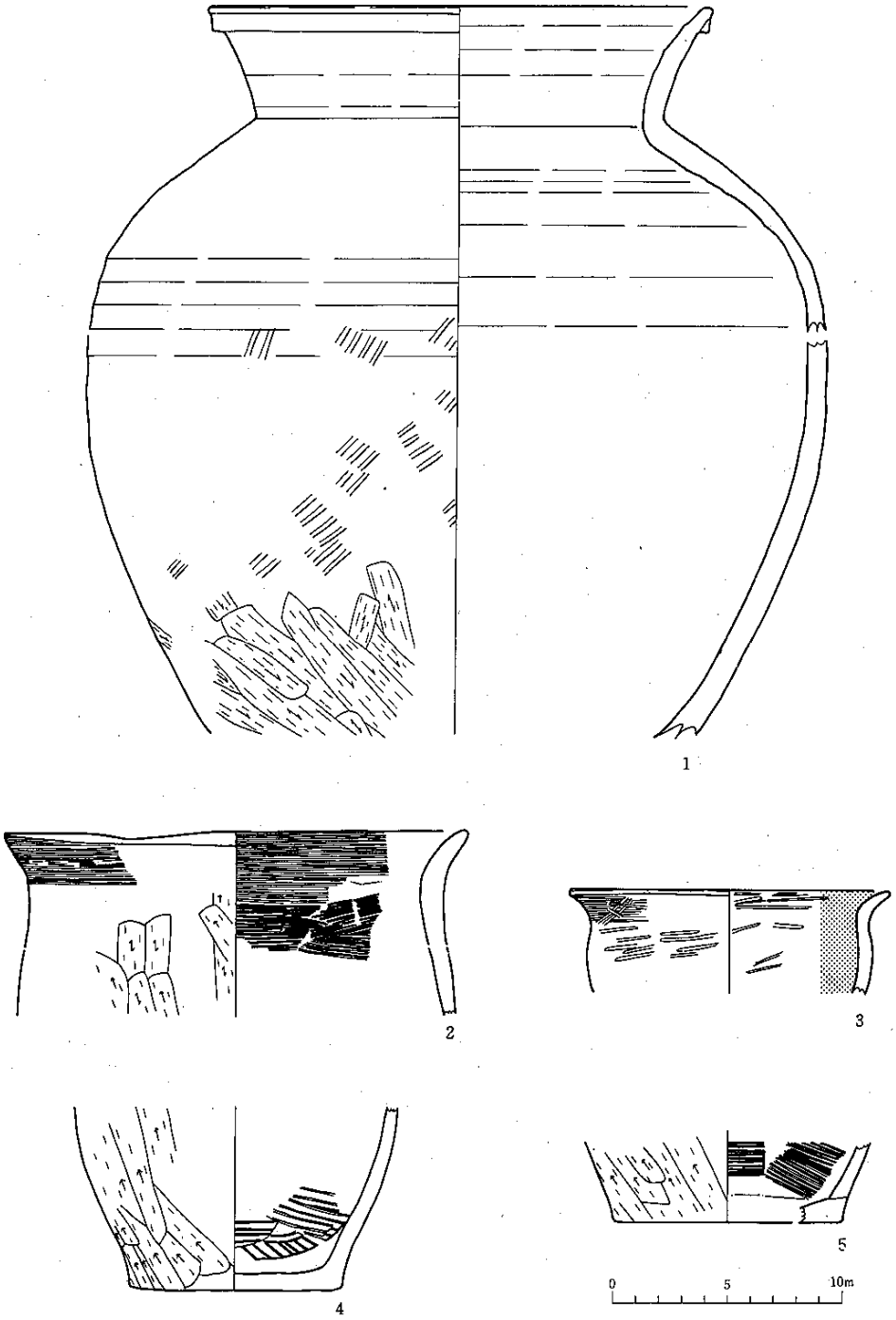
土師器甕（第5図2～5）

第4図2は長胴形の甕と思われる。内傾気味の体上部からゆるやかに外傾する口縁部に続く。頚部に段等は認められない。器面調整は口縁部内外面には横ナデ、体部外面にはヘラケズリ内面には刷毛目が施されている。

第5図3は小形の甕と思われる。体上部でわずかにふくらみ、口縁部は外反する。外面の器面調整は、口縁部に横ナデ後部分的にヘラミガキ、体部にヘラミガキが施されている。内面は口縁部から体部までヘラミガキされ･黒色処理されている。

第5図4・5は長胴形の甕の体下部以下のものである。器面調整は体部･底部の外面にヘラケズリ、体部内面には刷毛目が施されている。

次に破片についてみる。口縁部は内外面とも横ナデ調整のものが多い。体部は外面にヘラ



第５図　第１住居跡出土遺物

ケズリ、ヘラケズリの後にヘラミガキ、刷毛目、内面に刷毛目・ナデ・ヘラミガキなどの調整がみられるが、外面がヘラケズリで内面が刷毛目調整の破片が圧倒的に多い。なお、ヘラミガキされたものは、内面が黒色処理されている。

赤焼土器（第1表）

坏体部破片が1点ある。

(3) 焼土遺構

遺構の確認：昭和47年の試掘調査で検出された遺構である。K－13区の地山面で確認された。

重複：認められない

平面形・規模：長軸約92cm、短軸約82cmのほぼ方形を呈している。

堆積土：黒褐色ソルト層が認められた。

壁：地山を壁としている。壁高は最も保存の良好な北側で約16cmである。東側と西側の壁は南側に行くにつれてその高さを減じている。

底面：地山を底面としている。底面はほぼ平坦である。なお、南側の底面上には木炭が分布していた。

使用痕跡：北東隅の壁、南側の壁や底面に火熱を受けた痕跡が認められた。

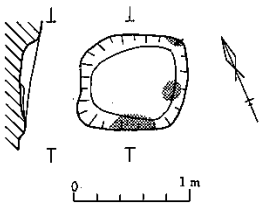
出土遺物：全く出土していない。

第１表　第１住居跡出土破片観察表

種別	器形	部位	器面調整 外面－内面	周溝	1層	計
土師器	坏	体部	ケズリ－ミガキ(黒色)		1	1
			ミガキ－ミガキ(〃)		1	1
			ロクロ－ミガキ(〃)		1	1
			不明－ミガキ(〃)		2	2
			不明－不明(〃)		2	2
		底部	ケズリ－ミガキ(黒色)		2	2
			不明(ロクロ)－ミガキ(〃)		1	1
			不明－ミガキ(〃)		2	2
			不明－不明(〃)		1	1
	甕	口縁部	横ナデ－横ナデ		6	6
			横ナデ－不明		1	1
			不明－不明		1	1
		体部	ケズリ－刷毛目		34	34
			ケズリ－ナデ		2	2
			ケズリ→ミガキ－ミガキ(黒色)		1	1
			ケズリ－不明(〃)		1	1
			ケズリ－不明		2	2
			刷毛目－刷毛目		3	3
			不明－刷毛目		5	5
			不明－ミガキ(黒色)		1	1
			不明－横ナデ		1	1
			不明－ナデ		3	3
			不明－不明		5	5
		底部	ミガキ(?)－ナデ		1	1
			ケズリ－不明		1	1
			不明－不明		7	7
須恵器	坏	口縁部	ロクロ－ロクロ		1	1
		頸部	ロクロ－ロクロ		2	2
		体部	ロクロ－ロクロ	2	9	11
			ケズリ－ロクロ		1	1
			タタキ－ロクロ	1	3	4
赤焼土器	坏	体部	ロクロ－ロクロ		1	1
計				3	105	108

(4) その他の遺構

試掘調査と今回の調査で8個のピットが検出された。いずれも地山面で確認されている。これらのピットはその大きさから2つに大別される。径約70～100cmのものと、径約20～40cmのものである。深さはともに約10～20cmである。



第６図　焼土遺構

(5) 遺構以外の出土遺物

基本層位第2層から出土したものと、出土層位不明のものとがある。遺物には土師器、須恵器がある。実測図の作成不可能な破片については観察結果を第2表に記した。

イ．第2層出土の遺物

土師器坏（第7図）

第7図1は平底で、体部から口縁部まで外傾する器形である。製作に際し、ロクロは使用されていない。外面は口縁部がナデ調整される以外、体部・底部とも手持ちヘラケズリが施されている。内面は口縁部に横ナデ、体上部に刷毛目、体下部・底部にヘラミガキが施されている。

次に破片についてみる。破片には、製作に際しロクロを使用したものとしないものとがある。内面はともにヘラミガキされ、黒色処理されている。

土師器甕（第7図2・3）

第7図2は体下部以下を欠損しているが、長胴形の甕と思われる。体部は直立気味に立ち上がり、頚部で屈折して外傾する口縁部に続く。頚部に段等は認められない。器形調整は口縁部内外面には横ナデ。体部外面にはヘラケズリ、内面は刷毛目が施されている。

第7図3は底部を欠損するが、小形の甕と思われる。器形は、体下部の方から外傾してきたものが、体上部で屈折して直立し、外傾する口縁部に続く。器面調整は口縁部内外面には横ナデ、体部外面はヘラケズリ、内面は屈折部の上には横ナデ、下には刷毛目が施されている。

破片についてみると、器面調整は口縁部内外面には横ナデ、体部外面にはヘラケズリ、ヘラミガキ、内面には刷毛目・ナデが施されている。

須恵器（第2表）

頚部破片である。内外面ともロクロ調整されている。

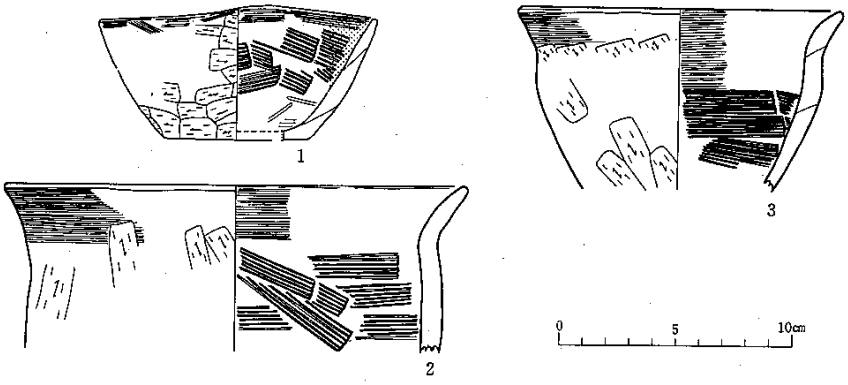
ロ．出土層位の不明な遺物

土師器坏（第2表）

底部破片である。底部には回転糸切り痕が認められる。内面の器形調整はヘラミガキされ、黒色処理されている。

須恵器坏（第2表）

体部破片である。内外面ともロクロ調整されている。



第７図　第２層出土の遺物

第２表　基本層位第２層および層位不明の土器破片

種別	器形	部位	器面調整 外面－内面	2層	X層	計
土師器	坏	体部	ロクロ－ミガキ(黒色)	3		3
			不明－ミガキ(〃)	2		2
		底部	糸切り－ミガキ(〃)ロクロ		1	1
	甕	口縁部	横ナデ－横ナデ	2		2
		体部	ケズリ－刷毛目	4		4
			ケズリ－ナデ	1		1
			ミガキ－ナデ	1		1
須恵器	坏	体部	ロクロ－ロクロ		1	1
	甕	頸部	ロクロ－ロクロ	1		1
計				14	2	16

3. 考察

(1) 遺物の分類と年代

ここでは実測図の作成できた遺物を中心として、その分類と年代について検討したい。

〔土師器坏〕

製作に際しロクロを使用しないもの（A類）と使用したもの（B類）とがある。

A類としたもので図化できたのは1点だけである。平底で、体部から口縁部にかけて外傾する坏である。外面の調整はヘラケズリ、内面は刷毛目･ヘラミガキ･黒色処理されている。その他、破片ではあるが、外面がヘラケズリ･ヘラミガキ、内面がヘラミガキ・黒色処理されたものがある。

B類としたものはすべて破片である。外面がロクロ調整、内面がヘラミガキ･黒色処理されている。なお、底部破片が1点あり、回転糸切りで切り離されている。

A類と同様な特徴をもつ土器は、砂押川遺跡（桑原：1976）などから出土しており、これらは国分寺下層式とされている。ただ、図化できた坏の内面にはヘラミガキと刷毛目が施されており、このような技法をもつ坏の類例に乏しく、今後、検討を必要とするものと思われる。

B類と同様な特徴をもつ土器は、上記の糠塚遺跡・天狗堂遺跡などから出土しており、表杉ノ入式とされている。

国分寺下層式や表杉ノ入式土器は、一般にそれぞれ奈良時代･平安時代のものと考えられている。

〔土師器甕〕

大形の甕（A類）と小形の甕（B類）がある。ともに口縁部に最大径をもち、頚部に段等は認められない。また、製作に際しロクロを使用した痕跡も認められない。

A類の甕は所謂長胴形のものである。口縁部内外面とも横ナデ、体部外面にヘラケズリ、内面にハゲ目が施されている。体部破片には内外面ハゲ目のものもある。

B類は調整の違いにより2つに分けることができる。ＢⅠ類は、口縁部内外面に横ナデ、体部外面にヘラケズリ、内面に刷毛目が施される。ＢⅡ類は、外面が口縁部に横ナデの後ヘラミガキ･体部にヘラミガキ、内面が口縁部･体部ともヘラミガキ･黒色処理されている。

A類と同様な特徴をもつ土器は国分寺下層式･表杉ノ入式の坏と共伴することが確かめられている（小井川･手塚：1978、佐藤・手塚：1978他）。ただ、このような土器は栗囲式にも存在するらしいが、本遺跡では栗囲式の遺物は出土していないことから、奈良･平安時代のものと考えられる。

ＢⅠ類・ＢⅡ類と同様な特徴をもつ土器は糠塚遺跡では国分寺下層式期の住居跡で共伴している。したがって、奈良時代のものと考えることができよう。

〔須恵器坏〕

小片が1点出土しているだけであり、時期を特定することはできない。

〔須恵器甕〕

口縁部が外傾し、口縁端部は縁帯状をなしている。体部は肩部でゆるやかに屈曲し、体下部に移行する。肩部以上には内外にロクロ調整痕が認められる。肩部以下の外面には上部に平行タタキ目、下部にはヘラケズリ、内面にはアテ目とナデ調整が施されている。

これと類似した土器は対馬遺跡･糠塚遺跡などから出土しており、国分寺下層式・表杉ノ入式の土器と共伴する。したがって、奈良･平安時代のものと考えられる。

(2) 層の性格

第2層は調査区の全域に分布する。1で検討した結果、この層からは奈良･平安時代の遺物が出土することかわかる。しかし、出土遺物は少なく、完形品もない。また、遺物は層理面に対して不規則な状態で出土している。

したがって、第2層は二次的な堆積層の可能性がある。

(3) 遺構の年代

発見された遺構には、竪穴住居跡1軒、焼土遺構1基、ピット数個がある。これらの年代について検討すると次のようになる。

竪穴住居跡に伴うと考えられる遺物には、須恵器甕がある。遺物の検討から、この甕は奈良平安時代のものと考えられる。また、住居跡の堆積土から出土した土器も、奈良時代と考えられるものが量的に多いが、平安時代の遺物も混在している。これらのことから、本住居跡は奈良･平安時代のものと理解される。

焼土遺構は伴出遺物もなく、その年代は不明である。しかし、このような遺構は奈良･平安時代の集落跡ではよく発見されるものであり、本遺跡からは同時代の遺物しか出土しないことから、奈良･平安時代に属する可能性もある。

ピットについては、伴出遺物もなく、その性格・年代については不明である。

4. ま と め

今回の調査で得られた成果を要約すると次のようになる。

1. 遺跡は丘陵の麓に形成されている。
2. 発見された遺構には、竪穴住居跡、焼土遺構などがある。これらは、奈良･平安時代に属するものと考えられる。
3. これらの遺構を覆う第2層は、二次的な堆積土と考えられる。
4. 上記のことから、本遺跡は奈良･平安時代の集落跡と考えられる。
5. 路線外にも発掘区と同様な地形がみられることや、そこから奈良・平安時代に属すると考えられる遺物が表採されることなどから、遺物の範囲は発掘区の東・西側に広がっていることが予想される。

引用・参考文献

氏家　和典　(1957)：『東北土師器の型式分類とその編年』歴史第14輯

(1961)：『土器』「陸奥国分寺跡」所収陸奥国分寺跡発掘調査委員会編

(1967)：「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって－奈良･平安期土師器の諸問題－」「柏倉亮吉教授還暦記念論文集」

加藤　孝　(1954)：「塩釜市表杉ノ入貝塚の研究」「宮城学院女子大学研究論文集Ⅴ」

加藤孝・伊藤玄三　(1955)：『宮城県登米郡新田村字対馬竪穴住居趾群』「登米郡新田村史」

桑原滋郎（1976）：『東北北部および北海道の所謂第Ⅰ型式の土師器について』「考古学雑誌第57巻3号」

小井川和夫・手塚均（1978）：『糠塚遺跡』「宮城県文化財調査報告書第53集」

小井川和夫・高橋守克（1977）：『宮城県対馬遺跡出土の土器』「宮城史学5号」

佐藤好一・手塚均　(1978)：『天狗堂遺跡』「田尻町文化財調査報告書第1集」

宮城県教育委員会　(1972)：『東北新幹線関係遺跡分布調査報告書』「宮城県文化財調査報告書第27集」

Ⅲ 新 庄 館 跡

1. はじめに

新庄館跡は高清水町北部にみられる丘陵の一部が、瀬峰町との境付近で南東に向って樹枝状に張り出した丘陵のひとつ、通称折木山と呼ばれる標高約50mの丘陵上に立地し、丘陵突端部の尾根や斜面を利用して築城されている。

本館跡は、高清水－瀬峰－登米郡を結ぶ道（通称高清水街道）のすぐ北側に位置しており、旧奥州街道と交わる所から約0.7㎞東側にあたる。この高清水街道は、天正18(1590)、同19(1591)年に起きた葛西大崎一揆を平定するため、伊達政宗が通って佐沼に向ったことなどから、中世における主要な道であったことが推測される。このことから、新庄館跡は交通上要衝の地を占めていたと考えられる。

また館跡の頂部から四方を望むと、北部・東部・西部は丘陵地帯となっている。南西には高清水の町並が一望できる。南・南東部には小山田川などによって形成された扇状地性低地が広がっており、この扇状地性低地は、城主にとって主要な経済的基盤になっていたものと思われる。

2. 調査の方法と経過

調査は、路線が館跡の東部をトンネルで通過することから、その工事で破壊される部分について実施した。その部分は館の段状遺構と考えられたので、段状遺構の構造･性格･構築方法などを把握することを調査の主点とし、全面発掘することにした。

調査で検出された遺構については、$^{1}/_{100}$の平面図を作成した。また、これらの遺構の構築方法などを把握するために、精査後さらに掘り下げ、$^{1}/_{20}$の断面図を作成した。さらに、館跡の状況を理解するために館跡全体の測量調査を実施した（$^{1}/_{500}$）。

3. 発見された遺構と遺物

(1) 館跡の概観

ここでは、測量調査および踏査で得られた成果をもとに、館跡の概略について記すことにする。

館跡は、丘陵頂部からやや南斜面に寄った部分に東西に走る道路があり、その道路建設および牧場造成のため道路の北半分が破壊を受けている。そのため、館跡の範囲を明確にすることは困難である。したがって、測量は道路の南側についてだけ実施した。北側については破壊される前の地形図を用意し、前者と合成して館跡の測量図を作成した。

館はほぼ南北に走る空堀によって東西に2分される。西側の保存状態は比較的良好である。最頂部には東西約110m、南北約25mの平場があり、その東･北･西端には土塁が巡っている。その外側には空堀があり、さらにその外側にも土塁がある。南側は段でもって平場を画している。平場の北部には空堀を遮って土橋状遺構が認められる。また、平場南側にみられた段は、さらに3～4段あり、下位水田面へと続いでいる。これらの段で画される平坦面は幅5～10mである。外側の土塁は平場およびこれらの段状遺構を囲むように巡っている。

東側の最頂部は、大部分が破壊のため明らかではないが、被壊前の図面では標高約47.5mで平坦になっており、平場の存在が想定される。また、紫桃氏の略図（紫桃：1973）では、この部分が平場となっており、その北側に土塁や堀が記載されている。この平場らしいところの南側も段でもって区画されており、このようを段はさらに2段認められる。この段で区画される平坦面は幅5～10mである。最頂部の平場らしいところや段状遺構の東部ではそれらを区画する堀、土塁などは認められない。また、平場らしいところの北側には、図で見る限り、平坦面があり、その外側に土塁か堀が巡るようにも思われる。その下部の斜面については、図からは遺構は読みとれない。

これらのことから、館跡の範囲は、破壊を受けて不明な部分もあるが、東･北は丘陵東端から北西に延びる沢によって区画され、西は、北半が北部から南西に延びる狭い沢と、南半では丘陵頂部から西側を画する土塁・堀によって区画されているものと思われる。したがって、館跡は東･北側の部分では丘陵頂部を除いては不明であるが、丘陵頂部･南側斜面に造作を加えて構築されている。その規模は東西約450m、南北約280mを有すると推定される。

(2) 段状遺構

今回の発掘調査は、東側の段状遺構のところを対象に実施した。調査面積は段状遺構の約70％の範囲に及んだ。調査の結果、傾斜角約30度の山側斜面の旧表土と地山を削平し、その土を旧表土の上に積んで平坦面を構築していたことが判明した。削り出し部分の角度は約65度である。平坦面は幅約6mである。そのうち、削り出された部分が約3m、盛土された部分が約3mである。平坦面は東から西にゆるやかに傾斜している。平坦面は調査区東部で北東にカーブし、その部分で北側が高さ約0.6m、南側が高さ約1.1mの段をもって立ち上がり、さらに北東に延びている。

(3) 通路状遺構

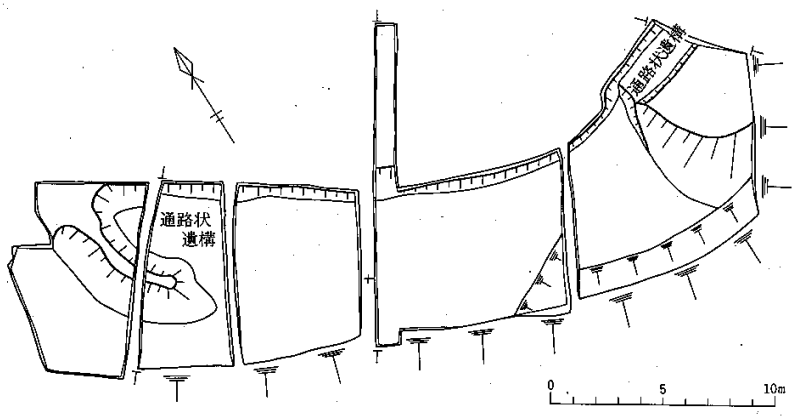
調査区の東端と西端の二ヶ所で検出された。東側のものは、段状遺構平坦面の立ち上がる段の部分から始っている。底面幅約1.5m、深さ約0.4mの断面「U」字形の溝状をなしている。山を削り出して造られており、平坦面と同様に北東に延びている。堆積土は4層認められるが、いずれも自然堆積の状況を示している。

西側のものは、上位の段状遺構に登って行く通路状の遺構である。東側のものと異なり、積土によって構築されている。積土の状態から3時期使用されたものと考えられる。第Ⅰ期は、段状遺構平坦面と同様に北側斜面の旧表土と地山を削り出し、その土を南側斜面に積んで、底面幅約2.5m、深さ約0.2mの溝状にしている。第Ⅱ期は、第Ⅰ期の溝状の部分がある程度埋没した後に積土をして底面幅約0.7m、深さ約0.5mの溝状にしている。第Ⅲ期は、第Ⅱ期の溝状の部分がある程度埋没した後に積土をして、底面幅約0.7m、深さ約0.1mの溝状のものと、その内側に基底幅約1.2m、高さ約0.3mの土塁状の高まりを構築している。

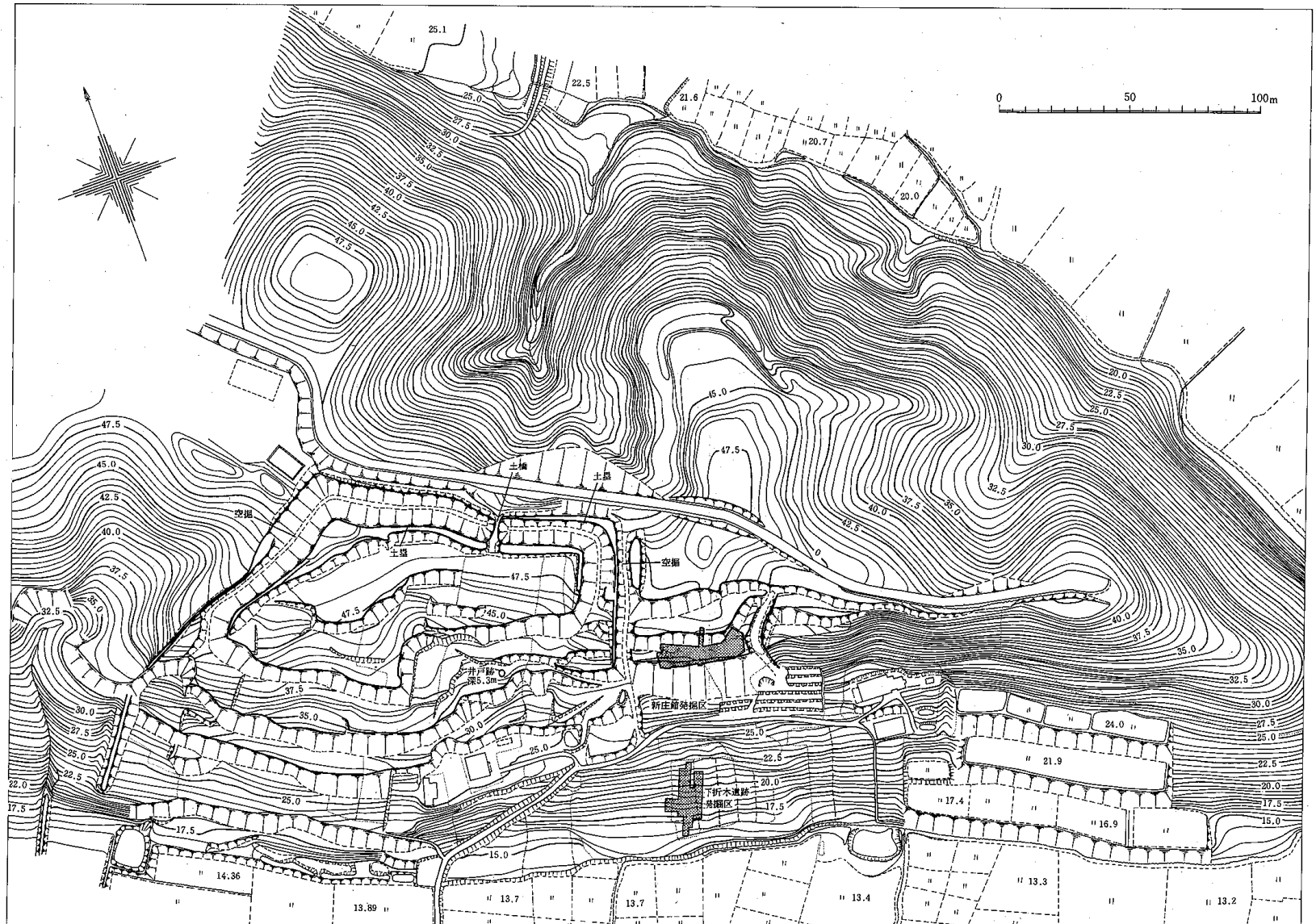
(4) 遺物

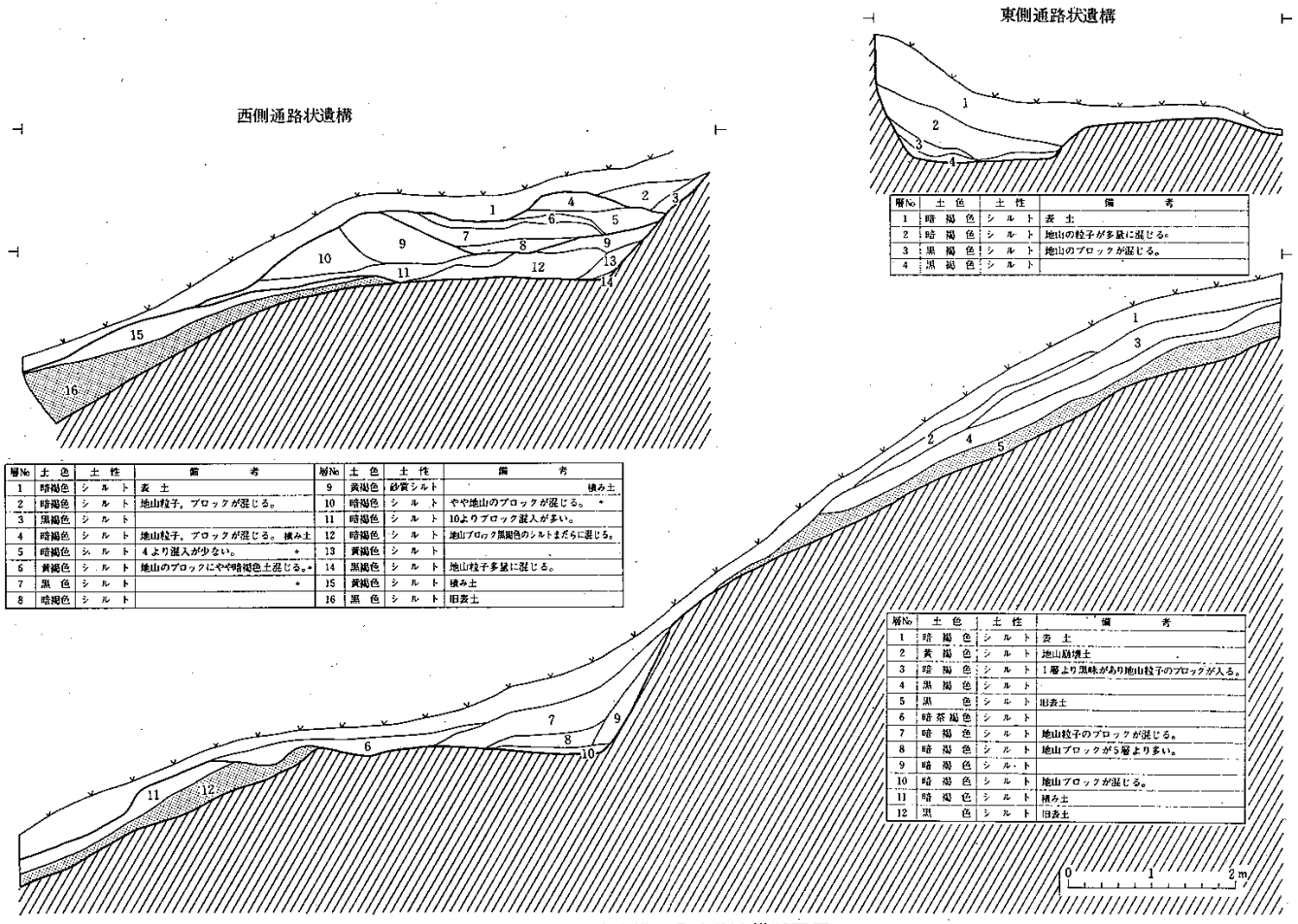
調査区内から出土した遺物は全くない。第11図にかかげた板碑被片は、調査区の東側に居住する佐藤豊氏が所蔵していたものである。出土地点、出土状況などは不明である。粘板岩に梵字･文字を刻み込んだものである。

尚絅女学院短期大学事務員佐藤正人氏のご教示によれば、梵字が「ぞ」で地蔵菩薩を示し、「彫り方のくずれ方（本来の薬研彫りでなくなっている）から、時代的には新しくなるものと思われ、南北朝期から室町期のものと考えられる」とのことである。



第８図　段状遺構・通路状遺構平面図


0
50
100m
土橋
土塁
空掘
土塁
空掘
井戸跡
深5.3m
新庄鐘発掘区
下折木遺跡
発掘区



層No	土色	土性	備考
1	暗褐色	シルト	表土
2	暗褐色	シルト	地山粒子，ブロックが混じる。
3	黒褐色	シルト	
4	暗褐色	シルト	地山粒子，ブロックが混じる。 積み土
5	暗褐色	シルト	4より混入が少ない。
6	黄褐色	シルト	地山のブロックにやや暗褐色土混じる。
7	黒色	シルト	
8	暗褐色	シルト	
9	黄褐色	砂質シルト	積み土
10	暗褐色	シルト	やや地山のブロックが混じる。
11	暗褐色	シルト	10よりブロック混入が多い。
12	暗褐色	シルト	地山ブロック黒褐色のシルトまだらに混じる。
13	黄褐色	シルト	
14	黒褐色	シルト	地山粒子多量に混じる。
15	黄褐色	シルト	積み土
16	黒色	シルト	旧表土

層No	土色	土性	備考
1	暗褐色	シルト	表土
2	暗褐色	シルト	地山の粒子が多量に混じる。
3	黒褐色	シルト	地山のブロックが混じる。
4	黒褐色	シルト	

層No	土色	土性	備考
1	暗褐色	シルト	表土
2	黄褐色	シルト	地山崩壊土
3	暗褐色	シルト	1層より黒味があり地山粒子のブロックが入る。
4	黒褐色	シルト	
5	黒色	シルト	旧表土
6	暗茶褐色	シルト	
7	暗褐色	シルト	地山粒子のブロックが混じる。
8	暗褐色	シルト	地山ブロックが5層より多い。
9	暗褐色	シルト	
10	暗褐色	シルト	地山ブロックが混じる。
11	暗褐色	シルト	積み土
12	黒色	シルト	旧表土

第10図　段状遺構，通路状遺構断面図

4. 考　察

(1) 発見された遺構について

今回の調査対象となった段状遺構の調査結果を要約すると次のようになる。

イ. 山側斜面を削り出し、その土を積んで平坦面を造り出している。平坦面の幅は約6mである。

ロ. 平坦面は発掘区東部で一段高くなっている。

ハ. 平坦面からは、建物跡などの遺構は検出されていない。

二. 発掘区東端・西端では通路状の遺構が検出された。そのうち、西側のものは上位の段状遺構へ続いている。

したがって、本館跡の段状遺構は建物などが存在するところではなく、上位の段状遺構や平場に登る通路として使用されていたと考えられる。そして、このような段状遺構の存在は、防

第図板碑拓影

禦という面から見ると、敵の攻撃に対し、各段ごとに抵抗を示すことができ、仮に、下位の段状遺構が落とされても、敵をそこに集結させることになり、そして上位の段状遺構を登るためにはさらに狭い通路を通るねばならないという点で、きわめて有効な施設になると思われる。

(2) 文献的考察

中世の高清水付近については不明な点が多い。これを資料でみると次のようになる。

最初は鎌倉御家人の移住であろう。源頼朝の奥州攻め後、東北各地は鎌倉御家人に所領が与えられた。栗原郡を含む河内地方には渋谷氏･四方田氏･泉田氏･大塚氏などが移住したものと思われる（余目記録）。高清水町には大擦氏に関係すると思われる板碑の存在から、同町付近は大塚氏の領地であろうとされている（高清水町史編纂委：1976）。

その後は、高泉氏に関する資料である。高清水の高泉氏の祖となったのは斯波（大崎）家兼四代の孫・詮持の二男持家である。斯波家兼は文和3年（1354）奥州探題に任命され下向してくる。

その後、斯波氏は代々探題職を受け継ぎ、志田･黒川･加美･玉造･粟原の、いわゆる大崎五郡を所領とする。ただ、斯波氏の奥川下向の頃は黒川･加美･玉造･最上がその領地であったらしい（大崎盛衰記）。そして、天文年間（1532～1555）には御要害（高清水城）が高泉氏第三代高泉直堅によって築かれたとされている（高清清拾遺志）。

天正16年（1588）年大崎氏の内格の際、伊達政宗は中新田まで出兵し失敗するのであるが、この時、高清水出羽守なるもの伊達軍を迎えに行っている。

そして、天正18（1590）・同19（1591）年の葛西大崎一揆の際にこの地が資料にみられる。天正18年豊臣秀吉の小田原攻めに参陣しなかったために葛西･大崎両氏は仕置を受ける。両氏の所領は没収され、その所領が木村吉晴・清久父子に与えられた。この木村父子による圧政などに対して葛西・大崎両氏の旧臣は抵抗を示す。これが葛西大崎一揆と呼ばれるものである。しかし、一揆は伊達政宗と蒲生氏郷によって平定される。この際に、一揆方は高清水の「森原山」に陣を取ったが、氏郷軍に敗れ、氏郷軍は藤沢･新田を通って佐沼に向い、佐沼城にいた木村父子を救出する（葛西盛衰記）。翌19年再び1日葛西・大崎の地に一揆が起こるが、政宗は一揆方最後の拠点佐沼城を落とし、これを平定する。このとき政宗は高清水城から出陣したと「高清水拾遺志」に記されている。

次に新庄館跡に関する文献資料をあげ、それに基づく若干の検討を加える。

新庄館跡については、延宝年間（1673～1680）に著された「仙台領古城書上」や「「仙台領古城書立え覚」には記載されていない。

資料1　享保4年（1769）に佐久間洞巌義和が藩主にさし出した「奥羽鶴蹟聞老志」である。

新城館

在_高泉駅口樵木山傍有_古石墳二基_題日_弘元四年甲戌所_レ立也不_レ詳為_何人

資料2　寛保元年（1741）に仙台藩士佐藤信要が著した「対内名蹟志」である。

新城館　高清水村に有。

樵木山傍に有。古石墳二基有。元弘四年甲成立る所と有。何人の墓なるや詳ならず。

資料3　明和9年（1772）に田辺希文が藩主の命を受けて編纂した。「対内風土記」である。

古墨凡二、基一、今石母田家居レ之。其二。號二新城館一。不レ詳二何人所一レ居。観迹聞老志日。有古石墳一。記二元弘四年甲戌所一レ立也。不レ群レ為二何人一。希文按。元弘之號。

後醍醐帝御守。而四年乃重祚建武元年也。遠国乱世改元之命未レ達。以一元弘記之者也。

資料4　安永9年（1780）3月高清水村肝入鎌田新蔵によって書上げられた「高清水村風土記御用書出」では、名所7ケ条のひとつ古館のところに次のように記載されている。

一、古館　一ツ

一、折木山新城館

資料5　寛政10年（1798）に著された「高清水拾遺志」である。

新城館　瀬嶺道ヨリ三町弐間

折木山東南嶺崎二在り東西六十二間南北十八間登リ四十六間此館近来高清水長門住スト謂伝ルハ誤ナリ。北条ヨリ足利之初二至リ大崎家以前ノ古城ナリ。聞老志ニモ当城伊賀守居住ストアリ。此伊賀守ハ北条時代ノ土ナルベシ大崎ノ一族ナラバ受領ヲ名乗ルベキニ新庄ト云名字大崎家中二見エズ人皇九十九代後光巌院延文元年大崎伊予守源家兼当国二初メテ下リ天正十八年マデ二百五十四年之間領ス

高清水直堅天文年中今ノ御要害新二築シカ

評謂水戸先手組ノ浪人園部市左衛門ト云者、土屋能登守二致仕シテ軍学ノ達人ナリ能ク要害ヲ学へり一年冬篭シテ地理ヲ論シ要害城トリノ沙太二及又新城館ノ要害ヲ間人アリケレバ本丸大手搦手二三ノ構堕堀封彊物見上楼等ノ尋問此城火ニヨハク水二渇ス。其カマへ北条時代ノ古城ナリ織田信長時ヨリ平山城トナリ山城ナシト目前二指サスコトク答ケリ。

資料1・2とも項目は新城館であるが、記載されている内容は折木山に所在する仮碑2基のことについてであり、館跡についての記載はない。同様に、大正2年（1913）伊勢斎助による「奥羽観蹟聞老志輔修篇」にあっても同様である。

資料3．4は、館跡としての存在は記載されているが、内容についての記述はない。

資料5の「高清水拾遺志」では、新城館跡と古碑を別々に項を立て記載している。新城館については他の資料より詳述しているが、「聞老志」には資料1の如く伊賀守が居住したとは記載されておらず、延文元年から天正十八年まで、実際には234年であるのに254年と記載されていたりで、この資料には明らかな誤りも認められる。また、14世紀半ばに大崎家兼が、奥州探題として下向しているが、大崎氏の初めの所領は黒川・加美・玉造の3郡程度であったという

説（平:1953）もあり、この記録には、疑問の点も残されている。したがって、これらの資料をそのまま使用することができず、資料から本館跡の築城年代・居住者等を確定することは困難である。しかし、「仙台領古城書上」や「仙台領古城書立之覚」に記載されていないことから、本館跡は、延宝年間に存在していたか全く伝承もすたれて廃城になっていたかのどちらかであろう。また

「封内風土記」にも館跡の名前しかでていないことは、明和9年には現存していないことを示すものと思われる。さらに、近世の文献にも新城館の名があらわれないのは、このことを裏付けするものと思われる。したがって、本館跡は中世以前のものであると思われる。

中世以前といっても、古代における東北の城柵官衙跡と比較しても立地･規模･構造にはかなりの相違がみられる。これらのことから、本館跡は中世に築城され使用されたものと考えられる。

5. ま　と　め

1. 本館跡は平地をのぞむ丘陵突端を利用して築かれている。
2. 今回の調査は、南斜面にみられる段状遺構のひとつを対象として実施した。
3. 発掘区の東・西端に通路状遺構の存在が確認された。
4. このことから、段状遺構は通常通路として利用されたものと推定される。また、有事の際には防禦的に優れた機能を発揮するものと思われる。
5. 本館跡は、文献的裏付けはないが、内部の遺構などから見て、中世に構城され使用されたものと思われる。
6. 北側の削平された部分の下部には遺構がまだ残存する可能性がある。

引用・参考文献

余目記録（『宮城県史』所有）

大崎葛西盛衰記（『仙台叢業』所収）

高清水捨遺志（『高清水町史』所収）

奥羽観蹟聞老志（『仙台叢業』所収）

封内名蹟志（『仙台叢業』所収）

高清水村風土記御用書出（『高清水町史』所収）

伊達秘鑑（『仙台叢業』所収）

柴桃　正隆　(1973)：『仙台領内古城館』

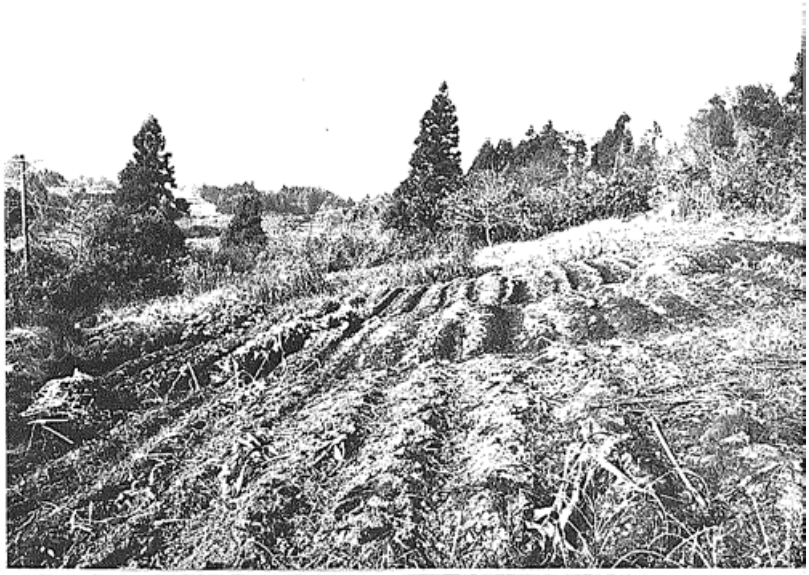
高清水町史編纂委員会　(1976)：『高清水町史』

大塚　徳郎　(1953)：『高倉御家人の奥羽移住について』文化代 17 巻第 3 号

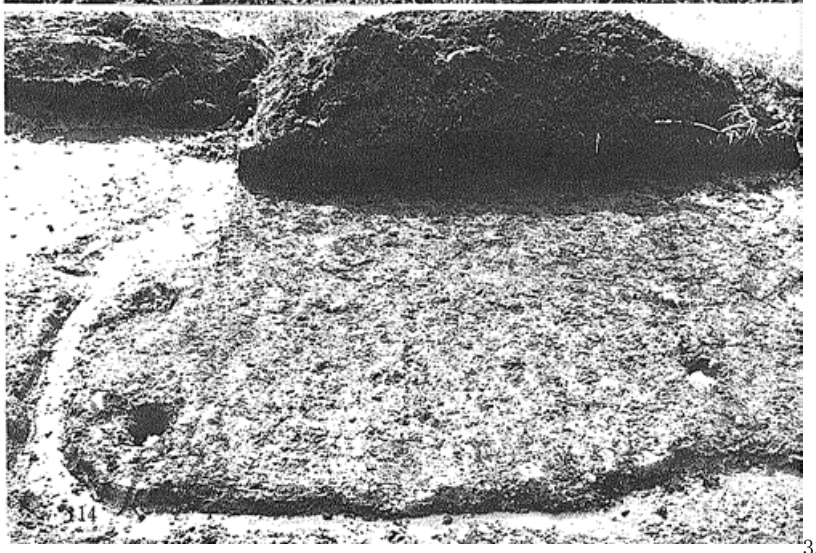
平重　道編　(1953)：第Ⅱ章　『古代及中世の北方村』北方村史

図　　版

遺跡遠景



遺跡近景

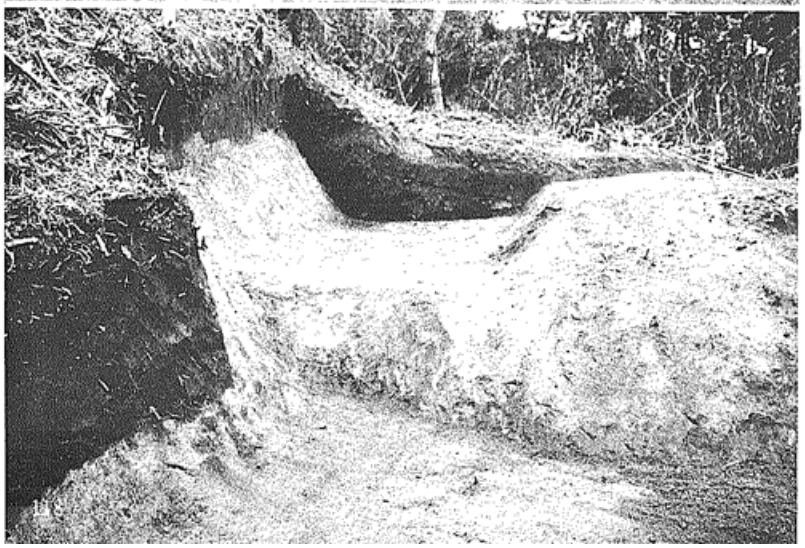


竪穴住居跡

図版１　下折木遺跡

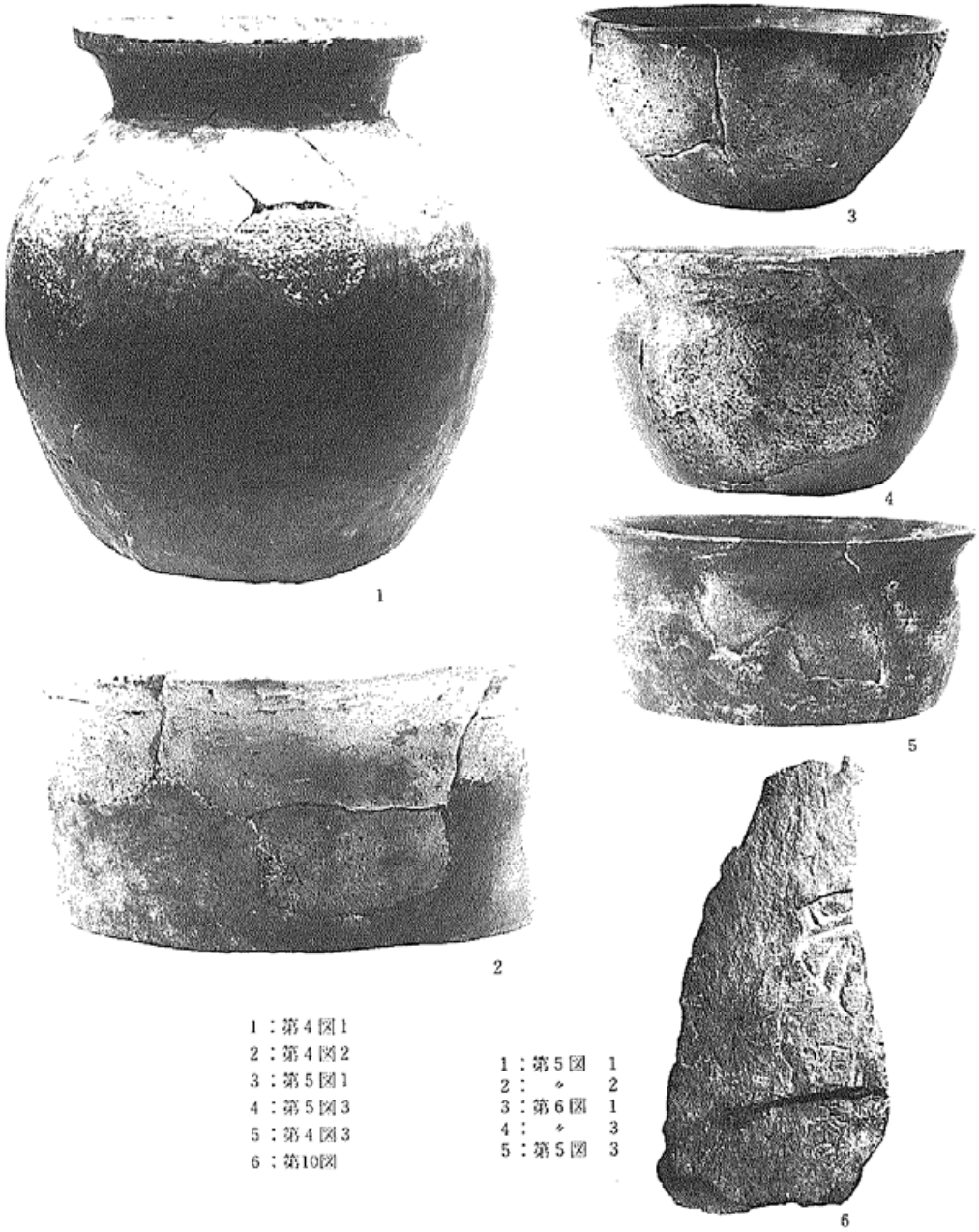
階段状遺構（西から）

西側通路状遺構
（東から）



東側通路状遺構
（西から）

図版２　新庄館跡



1：第4図1
2：第4図2
3：第5図1
4：第5図3
5：第4図3
6：第10図

1：第5図　1
2：　〃　2
3：第6図　1
4：　〃　3
5：第5図　3

図版3　出　土　遺　物